
私の知らない世界

海堂莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の知らない世界

【Nコード】

N1945V

【作者名】

海堂莉子

【あらすじ】

地下通路を抜けて辿り着いた先は、私の知らない世界だった。その世界で私が与えられた仕事は、末の王子のお世話をするだけだった。

第1話

真つ暗闇のその先に一体何が待ち受けているんだろう。

迷いのない足取りは僅かに軽く、後ろについてくる気配は戸惑いがちだ。

気分は悪くない。

非日常を感じるの嫌じゃない。これから何が起こるんだろうと思えば、胸は否応なく高鳴る。

その日私は、大好きで憧れの『佐々倉さん』のお宅に兄ちゃんと共に訪問していた。

『佐々倉さん』というのは、兄ちゃんが勤めている会社の若き社長さんで、金持ちで顔も良く、性格もいいという女性にモテる要素を存分に所持しているお方なのだが、なぜか彼女を作らないという不思議な人だ。

「しゃしゃくらシャン。ろうちてかるじよをつくらいんれるかあ？ らんらあらしがかるりらつれられらるら？ ダハハハハーダ。あん、ラーリン。そんなれみらいやん（佐々倉さん。どうして彼女を作らないんですか？ なんなら私が彼女になってあげよるか？ ダハハハハーダ。あん、ダーリン。そんな目で見ちゃイヤン）」

ワインをたらふく飲んで呂律の回っていない私をイヤがりもせず、ニコニコ笑ってさりげなくかわす佐々倉さんは流石だと思う。そんなことを考えられるほどには、頭は酔ってなどいなかった。体の方は完全に酔いが回ってはいたが。

「ああ、酔った灯里も可愛いなあ。ね、可愛いでしょ社長？」

酔いの回った妹を嗜めるでもなく、デレデレになっている兄ちゃんは相当シスコンだ。

「ホントに、可愛いね。でも、俺には普段の灯里ちゃんとあんまり

変わらないように思うけどね」

「ありらろろりらす。あらり、ろいれろろりりらる（ありがとうございます。灯里、トイレをお借りいたします）」

佐々倉さんにびしりと敬礼をすると、回れ右してふらりふらりと歩き始める。

「一人で大丈夫？ 灯里ちゃん」

返事の代わりに手をぴらぴらと振って答える。

足元では、ふわりふわりと一歩ずつ彷徨う私の足を機敏に避けてついてくるペットがいた。私のペットであり、相棒であるチェスはリスザルだ。

私の足を避けることをゲームのような感覚で楽しんでいたチェスだったが、それに飽きたのか定位置である私の肩に飛び乗った。

「ありり、ここはろこれすかねえ？」

千鳥足で真っ直ぐトイレに向かっていたはずだが、気付けば知らぬ場所へ潜りこんでしまったようだ。

「うつつ、トイレはろこっ」

ゆっくりとしか歩けない私は、もう我慢の限界に来ていた。

この広い屋敷の中、運良くその辺にトイレがあるかもしれないと、手当たり次第にドアノブを回す。

「おやつ？ これはこれは」

私が開けたそのドアは念願のトイレではなかったが、地下へと降りる階段と、下へと続く闇、それから下から突き上げてくる冷たい風が私を迎えた。

これは、この下にはワインセラーがあるかもしれないと思った途端、私の尿意は完全に消えた。それと引き替えに芽生えたのは、好奇心と欲望。

佐々倉さん秘蔵のワインをこっそりいただきたいという好奇心という名の欲望だ。

勿論、人様のワインを勝手にいただいちゃいけない、と止める気持もないではなかった。だが、既に酔いの回っている私には、そ

んな常識的な判断は海辺の砂のように簡単に流されてしまった。

「おられます（お邪魔します）」

小さく呟く。その言葉を言い終える前に足は階段にかけていた。壁に手を這い、電気のスวิตช์を探したがどこにもそれらしきものは何もなかった。

けれど、ふと足元を見ればほんのりと灯りが灯っている。足元さえ見えれば電気など必要としない。

「行つれみようか、チェス」

そう問いかければ、肩の上で飛び跳ね、キーキーと喚いている。その鳴き声は、止めておけと言っているように聞こえたが、私の足は下へ下へと運んでいく。

戻った方がいいのは、直感的に分かつてはいた。だが、あまりに大きい好奇心が、私を突き動かしていた。

完全に階段を下りきると、先の見えない通路が続いている。両壁沿いに灯された光が徐々に窄まり、点となっている。この通路の終着点は相当遠いことを物語っていた。

「行くべきかあ、行かざるべきかあ」

その通路の先を睨み付けて、呟いた。この通路がどこに繋がっているのかは定かではない。もし、このまま進んだならその答えは明らかになる。だが、この距離を行って戻って来ると相当な時間を有し、兄ちゃんや佐々倉さんに心配をかけてしまう。

「戻ろう」

踵を返し、階段を上ろうと足を上げたが、足は着地する前に何かに遮られた。

「いった」

直角に曲げた膝をしこたま何かにぶつけた。暗いから良く分からない。だが、今、まさに降りて来た階段がないのだけは確かだ。

手を前に突き出し、空間を確認する。

「壁？」

痛みにもはや酔いも冷めてしまっていた。目の前に突如現れた大

きな壁。前後左右に手を動かしてみるが、そこには壁だけが存在している。少しひんやりと、ざらりと感じるそれは間違いなくコンクリートの壁だった。

「ちよつ、この壁……動いている？」

まるでくすぐったそうにその壁がうねうねと波を打っている。驚きにぴたりと手を止めると、壁の動きもぴたりと止まった。再び動かすと、うねり、止めると止まる。

「あんた、生きてんの？」

非現実的なことは信じないようにしているが、今まさに目の前にしているこの壁はまるで某アニメに登場している妖怪のようではないか。

「ねえ、私戻りたいんだけど。そこいってくんない？」

通せんぼをするように、胸を反らせる壁に私は嘆息した。

「この先は通さないって？」

壁が前後に揺れた。頷いているようだ。

この壁が私の前を塞いでいる限り、兄ちゃんのもとに戻ることは出来そうにない。壁は見事に隙間なく通路を塞いでおり、退路は断たれた感じである。残す進路は永遠に続くと思わせるその長い通路だけだ。

「ねえ、壁ちゃん。この長い通路の先には面白いものが待ってるの？」

この先に何かがあるか。こんな長い通路を歩いて辿り着いた先は、ワインセラーか。それとも、どこかに続くただの秘密の通路か。はたまたそれ以外か。

何にしろ、退路を断たれた私に残された選択肢は一つしかない。

「仕方ないな。行きますか。壁ちゃんが案内役なんですよ？」

壁が再び前後に揺れた。

何だろう。行く手を阻む邪魔な奴なのに、なんだか憎めない。

まあ、私にはチェスがいるし、壁ちゃんもいる。真っ暗闇ってわけでもない。

チェスが腹いせなのか壁ちゃんを爪でひつかいている。壁ちゃんが痛そうに身をよじっているが、チェスはそれだけでは気がすまないのか、キーキーと喚いている。

「チェス。それくらいにしてやんな。可哀想でしょ」

気配で分かる。壁ちゃんがめそめそと泣いている。どうにも同情してしまう私は甘いだろうか。

自分の甘さ加減を振り払うように私は足を踏み出した。

真つ暗闇のその先に一体何が待ち受けているんだろう。

迷いのない足取りは僅かに軽く、後ろについてくる気配は戸惑いがちだ。

気分は悪くない。

非日常を感じるのは嫌いじゃない。これから何が起こるんだろうと思えば、胸は否応なく高鳴る。

肩に乗り、不安そうに私をちらちらと窺い、ほんの少し震えているチェスを撫で、微笑んでみせる。

目指す先は闇しか見えない。だが、その先は楽しいものだと思じて私は歩を進める。

それが、私の物語の始まりだった。

第2話

薄闇の中進む通路にいい加減うんざりしだしたのは仕方ないこと
思っていたきたい。

私たちが歩きだしてからとうに30分は経過している筈なのだか
ら。

「ああ、喉乾いたあ」

何も出てくるわけがないことは、百も承知だ。

後ろをずりずりと移動する壁ちゃんから申し訳なさそうな気配を
感じる。

「今ならワインがぶ飲み出来る自信があるっ」

グラスがないなら、らっぱ飲みでも厭うまい。

薄々、というよりも確実に行き着く先がワインセラーでないこと
は分かっている。わざわざこんな時間のかかる場所へワインセラー
を作るはずもないのだ。

チエスは騒ぎ疲れたのか、私の肩でスヤスヤと眠りについていた。
出来ることなら私も寝たい。

「ねえ、壁ちゃん。私の言ってることが正しかったら頷いてね？」

壁ちゃんに向かい合い、後ろ足で歩いていた。この通路は恐ろし
いほどに真っ直ぐで、歩く障害物もありはしない。もし、何が現わ
れたとしても、事前に壁ちゃんが教えてくれるだろう。壁ちゃんが
優しいのには、そうそうに気付いていた。

「私たちが向かって先にある先にワインセラーはある？」

壁ちゃんが左右に波打った。自分で予期していたことといっても、
事実を突き付けられるとへこむ。

「そっか。じゃあ、まあもはやこれは有り得ないだろうけど、佐々
倉さん家のどこかの部屋に繋がる？」

壁ちゃんの体が左右に揺れる。佐々倉さん家のあのドアから永遠
真っ直ぐに進んでいるのだから、それが有り得ないことも百も承知

だ。それでも聞かずにはいらなかったのは、自分を諦めさせる為だったのかもしれない。

「私、生きてるよね？」

ハッとしてそんなことを聞いてみた。壁ちゃんに肯定されてホッと息を吐く。もしかして、アルコールの取りすぎで前後不覚になり、頭の打ち所が悪くぼっくり逝ってしまったのかと思ったのだ。死んでからこれだけ歩かされるなら、行き着く先は地獄。

流石にそんな悪いことはしてないよ。

壁ちゃんには、私が何を考えているのか分かるのか、戸惑いと励ましを感じる。

「地獄ではないんだね。天国でもないみたいだけど」

はぁ、と息をついて振り返った。

ビタン。

恐らくそんな音がしていただろうと思う。イヤ、もっと濁った低い音だったかもしれない。

顔面だけじゃなく、体の表面全部をしこたま打ち付けた。

「うっ」

壁ちゃん、行き止まりに近付いたならそう言つてよ。

出て来そうになる愚痴を寸で飲み下した。

壁ちゃんが悪いわけではない。単なる私の不注意なのだ。

扉への激突により、気持ち良く寝ていたチェスも目覚めた。

「とっ、扉だよ。チェス」

可愛らしく目を擦っていたチェスに、目もくれずに呟いた。

ごくりと唾を飲み込んだ。

後ろに控える壁ちゃんに目をやる。もう、退路は断たれている。

この扉を開けるしか私に選択肢はない。

ここで少し寝てみようか、と一瞬そんな考えが過った。寝て、起きた時には兄ちゃんか佐々倉さんの心配そうな顔が見えるんじゃないか。だが、きっとそれは有り得ないんだ。

あまりに生々しくて夢だとは思えなかった。何度頬をつねっただ

ろうか、自分の頬だけじゃ不安で、チェスの頬まで引つ張ってみた。痛さにキーキー呻くチェスは幻聴でも幻覚でもなかった。

私は暫くぼんやりと扉を見つめ、思案したあとドアノブに手をかけた。

ドアノブは何の抵抗もなく回され、思い切つて扉を押し開けた。

その光は、薄闇を歩き続け疲れ切った私にはちとばかり強いもので、すぐに周りの状況を確認することなど到底無理な話だった。

よるめくように二三歩前に歩くと、後ろ手に扉がパタリと閉まった。

後ろを振り返ると、今までそこに現実にあつた扉が、ぼんやりと輪郭を薄め、仕舞には跡形もなく消えてしまった。

「なっ」

強引に目を擦り、再びそこを確認するが、もう扉はない。何度瞬きしても、再び現れることはなかった。

変哲もない壁と化したそれを手でなぞるも、その痕跡すら今はもうない。

「兄ちゃんっ。佐々倉さんっ。壁ちゃんっ」

扉の向こうの遙か遠くにいるはずの人たちを縋るような想いで呼んだ。

その手助けをするかのように、私の頭の上でチェスは飛び跳ね、騒ぎ立てる。

無情にも返事はない。

「諦めが悪いな、女」

何処からともなく聞こえて来た言葉にぎくりと体を強張らせた。チェスも何か異様なものを感じたのか、私の頭上で動きを止めた。

誰かがこの扉の向こうに居ることを予想しなかったわけじゃない。だが、希望としては誰もいない方がいいに決まっている。それがいい人なら申し分ないが、それが望んでもいない人だったら、いくら

ここが地獄ではないにしろ、地獄と思わざるを得なくなってしまうのだから。

ああ、振り向きたくない。その誰かが私にとってどんな影響を及ぼすにしても、誰とも接触したくない気持ちでいっぱいだっただ。

「おいっ」

「そんなに急かすんじゃない、エロイよ」

馬鹿にしたような男の声の後に、その男を窘めるようなどちらかと言えは優しい声が続いた。

当初の光でかすんでいた瞳は漸く正常に戻っていた。振り返ればそこにどんな人物がいるのかはすぐに目に入ってくるだろう。

「姫殿。こちらを向いては下さらぬか？」

優しい声が私に向けて発せられた。

「はっ、姫ええ？」

現代日本において、姫などというものは存在しない。そんなものはおとぎ話の中だけでしかお目にかかったことがないのだ。

私が姫じゃないことは自分がよく知っている。

突拍子もないことを言い始めた優しい声の主に詰め寄ろうと勢い良く振り返った。

「ちよっ、あんたたちなにその恰好。コスプレパーティーでもしてたの？」

ざっと横に一列に並んだ男女6人。一番右に貫禄のある優しい笑顔のオジサンがいて、その左隣りにそれは美しい銀の髪をした女性、その二人の子供であろう三人の人物が並んでいた。長男であろう、眼鏡をかけた少し冷たそうに見える長身の男は無表情にこちらを見ていた。その隣りで次男であろう、私と同年か少し下くらいのまだまだやんちゃさが残るこれまた長身の男は、私を見てニヤニヤと笑っている。先程の馬鹿にした声がこの男のものであることは顔を見ればすぐに分かる。一番左に立っているのは、母親と同じ銀色の髪をした美しい少女だった。少し気だるげに私を見る姿に、どうやら無理矢理ここに連れて来られた感が漂っている。男性陣は皆一様

に赤い髪をしていた。その中でも一番やんちゃで馬鹿にした声を発した腹立たしい男の髪は透明感があって美しかった。

けっ、髪だけ美しくて、性格は悪そうだ。

そんな6人の人物たちは皆、ひと昔もふた昔も前の西洋貴族のようないでだちをしていた。その中には、私だけが場違いのような気がした。

「私、コスプレとか苦手で、てか興味ないんで帰りたいんですけど。帰り方知りません?」

6人の12個の目にまじまじと観察されて、かなり居心地の悪い私はおずおずとそう尋ねた。

どう考えても、お近づきになりたくない種類の人たちなのだから、早々に帰るに限るのです。

初めにアクションを起こしたのは、優しい声のオジサンだった。私に駆け寄ると力任せに私を抱き締めたのだ。

お腹の締め付けにより、今まで忘れ去っていた尿意が再びよみかえる。

「無理いつ。放してえ、取り敢えずトイレ行かして、マジ洩れるってえっ」

第2話（後書き）

御挨拶遅れました。こんにちは、読んで頂いて有難うございます。
新しいお話が始まったのですが……、少々この作品、苦戦しております。初めに大まかなプロットを作成したのですが、その通りには進んではくれない……。私が考えている結末へとどうやって転がしていけばいいのか、悩んでいる最中であります。もしかしたら、完結を待たずに終了なんてことも……。あるかも？ いや、頑張りますけどね。

更新はいつもどおり（平日投稿、土日祝日等休み）で頑張ってます。
ります。

お付き合い頂けたら、嬉しく思います。よろしく願います。

第3話

ふうい、すつきりすつきり。

と、トイレから戻ってきた私を再び出迎えた6人の視線は大方同じようなものだった。

女のくせにはしたない。

心の声が聞こえてきそうな軽蔑とも呆れとも取れる眼差しが否応なく注がれる。

「しょうがないでしょ？ 出るもんは出るんだから。出すもん出さなきゃ病気になっちゃうでしょうがぁ」

え、そういう問題じゃない？

痛い。あからさまな軽蔑の鋭い視線が刺さる。

「女じゃないな」

私の中で確固たる地位を築き上げたこの男。

お前とは頼まれたって口きかねえ。

憤慨していると、オジサンがじりじりとにじり寄って来ていた。

獲物を狙う猛獣のように。じりじりと逃げるように等間隔を維持するよう努めた。

堪り兼ねたように走りだしたオジサンに恐怖をなし、私は涙目で逃げる。逃げるといってもあまり広い部屋でもなく、グルグルと同じところを回っているだけなのだが。

「無理い。来ないでえ、変態っ」

私がこれだけ騒いでいるというのに、傍観している残り5名に少なからずの殺意を抱いた。

私の危機を救ってくれたのは私の愛猿チエスだった。キーと一声鋭く喚くと、オジサンの顔にへばりつき、ガリガリと両前脚で爪をたてた。

5本の爪痕がバツテンの形で綺麗に描かれている。正直痛そうで見えていられないが、同時にざまあみろとも思っていた。

「取り敢えず、私どもと来ていただけますか、姫様」

眼鏡の冷徹長男が今繰り広げられた出来事などなかったかのように淡々と言葉を紡ぐ。

「だから、姫じゃないって。私は帰るって言ってるじゃ」

「いらしてください」

眼鏡の奥がキラリと光った気がした。途中でさえぎられた言葉が、口の中で消えていく。

この人に逆らうのは賢明じゃない。

私の中の直感がそう諭している。

「……ハイ」

チェスに引つ掻かれたオジサンに目をくれる者はおらず、多少の同情が滲む。

だが、そう思うだけで言葉をかけるにはいたらない。また抱き付かれるのも困る。

ぞろぞろその部屋を出ていく一向に私はやむを得ず従うことになった。

彼らの両親であろう二人が前に立ち、その後ろを私、そしてその後ろを子供たち、とまるで私が逃げ出さないように囲まれているような気がするの、私の気のせいだろうか。

先ほどいた部屋でも私が逃げ出すための道はなかった。壁ちゃんがいいたあの通路に続く扉はすぐに消えてしまったし、あの部屋の扉は眼鏡長男が立ちはだかるように塞いでいた。

こんな人たちとお近づきになりたくない私は、呑気なフリをしつつも逃れる術を探していたが、その全ては彼らに塞がれていた。

どうしても、私を帰すつもりはないようだ。

この状態に早くも気詰まりを感じていた。

大きなソファなんかじゃなくて、1人ずつコジャレた椅子に座っているのだが、その並びがまずおかしかった。私を中心点にして半

円を描くように座り、12この目が襲い掛かる。

「私、帰りたいんですけど……」

「無理だろ」

吐き捨てるように言い放ったのは、ム力つく次男坊だった。

「無理とは？」

ムツとしながら聞き返した。

「あの扉はもう開かない」

「どうということ？」

「まあ、落ち着いて頂けないでしょうか、姫様。私たちがあなたをここに喚んだんです。ですから、私たちはあなたを還すわけにはいかないのです」

長男坊の落ち着き払った態度が無性に癢に触る。帰れないと言われて冷静でいられるほど、大人じゃないのだ。

「こことは？　ここは一体何処なんですか？　なぜ私が喚ばれて、なぜ還れないのか、きちんと説明して下さい」

「ここはエリアスフィアという世界のクリムゾンレイク大陸にあるアルナボルディ王国の王都、クリムゾンソール。その中心である王城のなかに今あなたはいます」

カタカナだらけの国名やら何やらを一度に言われても覚えられない。だが、ここが地球じゃなく日本でないと言っていることは分かった。しかも、ここが王城であることも。

まあ、俄かには信じられないが。

「ここが地球じゃないってことですか？　そんな、ファンタジーなことを私に信じると？」

これは全て佐々倉さんと兄ちゃんが考えたどつきりなんじゃないだろうか。

兄ちゃんが佐々倉さんと組んだなら、これくらいのことやってしまいそうだ。

だが、いくら待っても手製のプラカードを持って現れる兄ちゃんをみることはなかった。

ム力つく次男坊は、仏頂面ですくつと立ち上がると、私の腕をむんずと掴むと強引に引っ張る。

乙女な私が殿方の力に叶うはずもなく、引き摺られるように連れていかれた先はバルコニーで、私は咄嗟に突き落とされると判断しぎゅうつと目を閉じた。

「おら、お前の目で確かめろ。これを見てもお前が住んでいた世界だつて言えるのか？」

優しさの欠片も感じられないその声に従って、目を開けなければならぬことが耐えられないほどにイヤだった。だが、そうしないといつまでたつても捕まれた腕が解放されないのを知っていた。

などと余計なことを考えているが、本当のところ怖かったのだ。見てしまえば、肯定せずにはいられないことも知っているから。壁ちゃんの存在を認めた時から、非現実を受け入れてしまっていたのだから。もう既に兄ちゃんたちがいる世界とは違つところに迷い込んでしまったことを。

私は、ゆっくりと緊張を解いた。

長男坊が言うところの王城のバルコニーから広がるその世界は、私が知っている世界とは違った。しかし、全く知らないかと言えばそうでもない。それらの様子を私は見たことがあつた。世界史の教科書で。

この世界は、私が高校の時に習つた世界史の教科書で見たようなひと昔もふた昔も前の様子に似ていたのだ。

「ここは地球じゃないつて言つたよね？」

「そうだ」

信じられないことだが、同じ地球でも違う時代にタイムスリップしてしまつたんじゃないかと思つたのだ。それもまた非科学的なことだが、別世界にいるというよりは信じられたかもしれない。

突きつけられた現実、あまりに非現実的で信じると言われても容易く信じられる類のものではなかった。

「ここで私に生活しろつて言つてんでしょ？ もう、絶対に地球に

は戻れないの？ これってつまりは異世界トリップってやつなんですよ？」

何だか少し奇妙だった。

私が知ってる異世界トリップは、例えばブラックホールが出現して吸い込まれたとか、ドアを開けたら異世界でしたとか、起きたら異世界でしたとか、そんな感じ。

何で私だけ、地道に何時間も歩いて異世界入りしなければならなかったのか。もっとパツと召喚してくれれば良かったんじゃないだろうか。

「戻るかもな。早くて1年後には」

「なにそれ、1年後？ あのねえ、そんなに時間たっちゃったら私は元の世界じゃ失踪扱いされるだろうし、折角就職決まったところなのに内定取り消しになっちゃうでしょうが」

イヤ、兄ちゃんはきつと私の帰りを信じて待っていてくれるだろう。だが、就職先が私を待ってくれているとは思えない。

くっ、苦勞して内定貰ったところだったのに……。

「ねえ、私を召還したんでしょ？ 召還したんだったら、この世界には魔法が存在するってことだよな。どうにかもう一度あの扉を開けてよ」

「魔法は存在する。だが、高度な魔法を操れるのはこの世界ではたった一人だけだ。その存在がこの国に訪れるのは約1年に一度だ」
「今すぐそいつを連れて来いっ。さもなきゃシバくぞ、てめえら」

その怒声は城下にまでおよび、国民たちは王城で獣が暴れていると勘違いし、武器を片手に押し寄せたそうだ。

それを私知ることにはなかったのだが。

第4話

突き付けられた現実はあまりに惨いものだった。

せめてそれが就職してから暫くして、安定した地位を手に入れた後だったなら何とかなったかもしれないのに。

とにもかくにも、この世界に高度な魔法を扱えるものは1人しかおらず、その魔法使いが地球とこの世界を繋ぐ道を施した。その魔法は私がこの世界に着くと同時に解かれるようになっていた。よって地球への道は塞がれてしまったのだが、その魔法使いに再びお願いすれば道は繋がるだろうということ。だが、魔法使いは魔法を施したあとすぐにこの国をたち、その行方は分らないという。魔法使いは気配を消して移動するため追跡はできず、例えば見かけたとしても口外することを禁じられているため情報が入ることはない。魔法使いがここに現われたことを王城の外に洩らすことは出来ないのだ。

探す旅に出てみようかという私の希望は早々に摘み取られた。

「それで、なんであんなら地球とこちらを繋いじやったのさ」

やさぐれた気持ちはどう頑張っても浮上しそうになかった。

「我々はあなたに末の息子の面倒を見てもらいたいのです」

漸く気を取り直したのかオジサンが口を開いた。さっきまで私を追い回していたために体力切れ、及びグルグルと回っていたため酔ってしまいぐったりとしていたのだ。

オジサンの口にした言葉に私は思案した。

末の息子……。

ぐるりと視線をめぐらせ、ある一点で止まり眉間に皺を寄せた。

「バカ、俺じゃねえ」

ふう。ってこいつ私にバカって言ったね？ バカって言う奴、バカ力。

幼稚なことを考えてみるが、決して口には出さない。また拳骨を

くらいたくはない。先ほどバルコニーで叫んでしまった時に、うるさい、と拳骨をくらっていたのだ。それも容赦のないものだった。

「ここにはいないのです。まだ三歳の息子です」

「なんで私が他人の子の面倒見なきゃならんのよ。自分等で見ればいいでしょうが。そんなことのために私はここにいんの？ 冗談止めてよね」

私、まだ結婚も出産もしてないんだよ？ いきなり三歳の子供の世話なんか出来るわけない。

そもそも末の息子とらやが可哀相じゃないか。お母さんがいるんだから、お母さんが面倒見りゃいいのだ。

「ごもつともだ。だが、弟は私たち家族の誰一人にも心を開かない。もう、普通なら言葉を発してもおかしくはないのに、誰も弟の声を聞いたことのあるものはいない。私たち家族だけではない。何人もの優秀な乳母を雇ったが誰一人として聞いたことはない」

クールガイの長男坊が淡々とした調子で語る。

弟が心を開かないことに嘆いているという風には見えない。世間体が悪いから仕方なく、といった感じがどうも私を苛立たせる。

「本当失礼だと思うけど、言わせてもらうよ。その子は知的障害があるんじゃないの？」

「それはないのだ。その可能性を示唆して、医師に見てもらっているが、何の異常も見られなかった」

オジサンが断固した態度で否定の意を唱えた。

私にはこの世界がどれほどの医療技術があるのか、そもそも検査がどのようなものか知る由もないが、そんな問題のある子供が存在することを否定したがっているように見える。

誰もその子のことを本当には考えていないように見えて腹が立った。

私にその子への義理なんて何もない。とんでもないことに巻き込まれて迷惑している。でも、こいつらのその子への態度は我慢ならなかった。

「分かったよ。その子の面倒は見る。でも、私の行動には口出ししないですよ？ それに、期間は魔法使いが地球への道を開くまで」

面倒なことを頼んでおいて、後で育て方が悪いだのの文句は受け付けない。私に頼むのがそもその間違いなのだから。

「引き受けてくれると信じていた。ありがとう。名乗り遅れたが、私はアルナボルディ王国国王、セシリオ・アルナボルディだ。隣に座っているのが、王妃であるファナ。第一王子であるブラウリオ。第二王子であるエロイ。第一王女であるディアナ。そして、あなたに面倒をお願いしたいのは第三王子であるジェラルドだ」

なんとなく予期していたけれど、やっぱり王族なんだ……。そうだよ。そこまで偉い人じゃなきゃ、こんな変なお願いしないだろうね。

「どうも。辻元灯里、あかり……です」

「おお、あかり。なんて可愛らしい名前なんだろう」

このオジサン——国王なんだっけ——、また怪しげな雰囲気醸し出してるよ。

狙いを定めたような視線は止めてくれ。大体なんだってこんな変態を野放しにしとくんた。

そういえば、王妃はまだ一言も喋ってない。息子の面倒見てくれてんなら、それ相応の態度なり言葉があって然るべきなんじゃないんかい？

「とにかく、ここにいる間の身の安全と衣食住は保証してくれるんでしょね？」

「勿論です。あなたは大切なゲストですから、希望があれば何なりと仰って下さい」

長男、名前はブラウリオとかいったっけ、名前長いからリオでいいや。

リオの喋り方って丁寧なんだけど、腹に一物も二物も持っていそうで、素直に喜べない。

「あのさ、リオのその喋り方どうにかなんない？ もっとこうさ、

柔らかい感じで……」

「……リオ」

「あ、うん。名前長いからリオでいいでしょ？」

リオは肩眉を上げ、さらに指で眼鏡をクイツと上げたが、異論を唱える気はないようだった。

「長男がリオで、次男は……」

「エロイだ」

「エロい？ 確かにエロそうな顔してるけど……、ぶははっ、そのまま名前にすることないのに」

「うるさい、黙れ。俺はエロくないっ」

腹を抱えて爆笑する私にその怒声は届かず、いくらなんでもあんまりなネーミングに心行くまで楽しんだのだ。

「何はともあれあんたはエロイね。ぶぶっ」

「人の名前で笑うなっ」

どう考えてもツボな名前に私は、笑わずにはいられなかった。

「私はディアナよ。きちんとディアナと呼んでちょうだい」

王女のディアナは、少しツンツンしているが、それに迫力がなくて私には可愛らしく映るだけだ。

反抗期に入っているのか、それがまるで板に付いていないのだ。

「分かった。ディアナね」

極力笑みがこぼれないように注意したつもりだが、ディアナには感じるものがあつたのか、ぷくりと膨れて顔を背けた。

そんな態度すら可愛らしいことに本人は気付いていないようだ。

「で、私が面倒を見るのはジェラルルだから、ジェラかな。そのジエラにはいつ会えるの？」

「今日は疲れておるだろうから、ジェラルルに会うのは明日にして今日はゆつくりと寛いでくれ」

王の有難い言葉に甘えることにした。

酔いはもう完璧に冷めたが、長時間歩いて、とんでもな展開に巻き込まれてしまって、もうクタクタだった。

「あかりを部屋に案内せよ」

と、王が言うと、ドアが開いて数名のメイドさんが部屋の中に入ってきた。

うわぁ、生メイドさんだ。

「姫様、ではお部屋に案内させていただきます」

王族ファミリーに一応頭を下げて、メイドさんの案内通りに部屋を出た。

メイドさんが案内してくれた部屋はあまりにも広くて、落ち着かないことこの上ない。きつとビップ待遇なんだろうけど、私にはいい迷惑でしかなかった。

私はメイドさんたちに丁重にお下がりいただくと、一人では大きすぎるベッドに飛び込んだ。

柔らかな質のいいベッドに横になった途端、私は疲れに引きづられて意識を手放した。

第5話

目覚めたらきつと全ては夢だったと、安心するものと思っていた。誰だってこんな体験をすればそう思わずにはいられないだろう。

だが、現実はその甘くはなかった。

「姫様、起きてください。もう、朝です。皆様お待ちですよ。さあ、起きてください」

優しい声と、控えめに揺さ振る手の温かさ、それが兄ちゃんのものとは明らかに違っていた。

薄目を開けて、見知らぬメイドさんが目に入って飛び起きた。キヨロキヨロと辺りを見回し、自分がいた家じゃないことを確認するとガックリと肩を落とした。

そんな私を慰めるように愛猿のチェスが私の膝の上から覗き込むようにした。その気遣いに応えるように優しく頭を撫でてやる。

「どうされました、姫様」

メイドさんが心配そうに私を覗き込む。

「ごめん、大丈夫……です。あの、私は姫じゃないんで、その呼び方はちよつと。あかりって呼んでくれる？」

「よろしいのですか？ では、あかり様と。私はあかり様の身の回りのお世話をさせていただきます、メイヤと申します。よろしくお願いします」

メイヤは恐らく私よりは幾分年下の笑顔の温かい可愛い少女だった。

「私のことかメイヤは聞いているの？」

「私はこれからあかり様の一番身近でお世話させていただきますので、あかり様がどこからお越しになったのかといったことは予め聞いております。あかり様の素性を知る者は、昨日お会いになられた王族の皆様と私たちあかり様の侍女だけです。あかり様は表向きジエラル様の家庭教師ということになります」

「私たちって私につく侍女は他にもいるの？」

「はい。私の他にもう二人おります。後程二人の紹介もさせていただきますい」

私一人に三人もつくことないと思うんだけど……。

「うん。まあ、とりあえず分かった」

「はい。それではお召しかえをさせていただきます」

そう言くと、当たり前のように私の服を脱がしにかかるメイヤにたまらず待ったをかけた。

「ちよっ、ごめん。先に言うておく。私は自分で出来ることは自分でやる。着替えもお風呂も出来るから」

「え？」

メイヤの戸惑いは驚くほどに大きいものだった。

そりゃそうか。彼女は毎日そういう仕事をしてきたわけで、そしてそれを拒否する人などいないだろうから。

ここは大人しくお世話された方が良かったんだろうか。だが、人間として誰かにしてもらわなければ何も出来ないようなダメな人間になり下がるのはイヤだ。

「ごめんね。そのドレスは着れない。ワンピースのようなものはないかな？ なければ、メイヤが着ているような服を頂戴？」

メイヤは心底戸惑っていたが、私が意見を曲げないと分かると私が求めるような服を持って来てくれた。レースや膨らみのない質素なワンピースだ。メイヤはこれを私に渡しながら、心配そうに私の顔を覗いていた。

「ありがとう、メイヤ」

そう私が言くと、メイヤは戸惑い顔を引っ込めて零れるように微笑んだ。無邪気な笑顔に、少しだけ気分が軽くなる。

ここでジェラの面倒を見ると承諾したものの、心はまだここではない日本に向けられているのだ。日本に戻れないと現実的な事実を突き付けられても、すぐに気持ちは追いついていかないのだ。

朝のけだるさと非情な事実が私を重い気持ちにさせていた。それ

がメイヤの笑顔で幾分軽くなったのだ。

何の部屋だか分からない、強いて言うなら食堂のような部屋に通された。

無駄に長いテーブルの奥に国王が座しており、その向かいに王妃が、そして両脇に子供達が座していた。

その全ての目が私を見ていた。恐らく私の姿があまりにもみすばらしいので、呆気に取られているのだろう。

「おはようございます。すみません。お待たせいたしました」

何か言いたそうにしている面々を無視して、辺りを見回す。

一体どこに座ればこの国では無礼にならないのだろうか。

「あかり様、こちらへどうぞ？」

長身で少し佐々倉さんに似ている男性が、椅子を引いて出迎えてくれた。

「ありがとうございます」

謝辞を述べると、につこりと微笑んだ。

うわっ、笑顔が佐々倉さんにそっくり。

うつかり見惚れてしまった私を連れ戻すかのような不躰な声が耳を汚す。

「おい、ブス。お前なんかクリストに相手にされるわけないんだから、色目を使うな」

声の主など確認しなくても分かっている。私の斜め向かい側に座っている男をギロリと一睨みしたあと、佐々倉さん似の男性を見上げた。

「お気を悪くされたらすみません。私の知り合いにとっても似ていたものですから……」

「いえ、気を悪くなどするはずがございません。宰相をしております、クリスト・ベニテスでございます。何か困ったことがあれば私にお言い下さい」

クリストの物腰の柔らかさにつこりと微笑んだ。

あまりに男前の違いを感じ、再び斜め向かい側に座る男を見て、あからさまに頭を振ってため息を吐いてみせた。

「お前、何だその態度はっ」

「ああ、煩い。朝っぱらから小さい男だなあ」

見なくても怒りに震えているのが分かる。

「あら、どうなさいました？ エロイ様。赤い顔をされていますが？」

自分でも意地が悪いと分かる笑顔でエロイを見た。今生の恨みと
いうように鋭い目が向けられていたが、痛くも痒くもなかった。

「お前は性格が悪い」

「そっくりそのままお返しいたします」

「まあ、その位にしなさい。エロイ、あかりは大事なゲストなのだからそんな態度は弁えなさい」

オジサン、もとい国王の一声でぱたりと大人しくなったエロイに、こっそりと舌を出した。

眉がピクリと動いたが、国王の視線があつたため、悔しそうに唇を嚙んでいた。

「さあ、せつかくの食事が冷めてしまふ。いただく」

「いただきますっ」

パチンと手を合わせて、大きな声を出した私を誰もが驚いた眼差しで見ている。

「あーと、これは日本の食事の前の挨拶でして、すみません、驚かせてしまつて」

『いただきます』『ごちそうさま』なんてのは、日本独特の挨拶だつてことを忘れていた。

おかげで気が触れた人みたいな視線を浴びてしまった。

「おお、そうか。あかり、私もその日本式の挨拶を試みよう。いただきます。……これで良いのかな？」

「はい。完璧ですっ」

異文化コミュニケーションは、こんな些細なことでも嬉しいもの

だ。

この国の料理はイタリアンに酷似していたので、私の口に問題なく合った。

「あの、ジェラと一緒に食事をしないんですか？」

してはいけない質問をしてしまったのだろうか、場の空気が一瞬凍り付いた。

「ジェラルは私たちと一緒にとはとりません」

ナイフとフォークを持つ手を止めたまま、リオは素っ気なくそう言い捨てた。

それ以上の質問は受け付けないと言いたげに、その話はもう終わりだと言いたげに、手を動かし始める。

ジェラルには何か触れてはならない秘密がありそうだ。これから面倒を見る私にも言えない秘密が。

どこかピリピリとした空気のまま、朝食を終えた。

いつジェラルに会えるのか聞ける雰囲気じゃなかった。

朝食を終えた私は与えられた自室で大人しくしていた。

王城内を探険しようと思ったのだが、メイヤに止められた。侍女たちは朝は仕事で忙しく、午後になれば案内できるからそれまで待っていて欲しいとのこと。一人で王城を回ると迷子になるんだそうだ。

迷子になってもいいんじゃないかと思うのだけどね。

メイヤに言われた通り大人しくしているか、迷子になりにいくかで少々迷っていたのだ。

悩んだ挙句、私は迷子になりに行くことにした。

第6話

足取りは軽く知らずスキップを刻んでいた。

すれ違ふ者は異質な髪の子とその肩に乗る猿に驚き、不思議そうに見送っていたが、そんな視線はちつとも気にならなかった。

ともすれば、鼻歌なんかを口ずさみつつ、思うままに城の中を歩いていた。チェスもまた私がご機嫌なのが嬉しいのか、飛び跳ねて喜んでいた。

この国の人々は赤い髪が主流で、王妃や王女のような銀色の髪は見ることはなかった。勿論、黒い髪もだ。

メイヤが迷子になると言っていたのは決して大袈裟ではなく、早々に迷子になっていた。だが、それを不安に思うことはなく、逆に楽しいことに思えるのは私の長所と言えるのではないだろうか。

なるべく人がいない方へ通路を入って行く。その方が面白いものが見つかるかと知っているからだ。

兄ちゃんと一緒によく遊びに行った佐々倉邸でもよく迷子になり、面白い骨董品やお化けが出て来そうな部屋を見つけた。

「そういえばあの宰相さん、佐々倉さんに似てカッコいいよねえ。ね、チェス？」

佐々倉さんと宰相のクラリスを思い出してにんまりと頬を緩めた。どちらも私のタイプだ。だが、チェスにはそれが不服なのかキーキ―と喚き散らした。チェスはあまり佐々倉さんが好きではなかった。ヤキモチだろうか。

妄想を膨らませながら奥へ奥へと歩いたその奥に怪しげな扉を発見した。どう見てもそれは怪しく、私を糾っているように見えた。その怪しげな扉の前に、一組の男女が佇んでいた。私は迷わず身を隠した。何故かその光景を私が見ていることを悟られてはいけなような気がした。しばらくするとその二人は私がいる方とは反対方向に歩き去った。

「ねえ、今のつて王妃とリオだったよね？ あんなところで何してたんだろう」

二人があんなところで一体何をしていたのか気になるところだったが、私にはそれよりも気になるものがあった。怪しげな扉。その扉を開けることが私の使命のように感じた。

ドアノブに手をかけ、くると回す。そのあっさりとした手応えにこの世界に繋がっていたあの扉を思い出した。また、どこか異空間へ繋がっているかもしれないと思い至ると、体がブルリと震えた。これ以上の移動は避けたい。だが、押し開けた扉を再び閉じるわけにもいかなかった。

私の不安は空振りに終わった。

その扉の内側にあったのは、何の変哲もない部屋だった。基本的に何にもないただの空き部屋。

ただ一つ普通じゃないのは、その空気だろうか。負の空気といえはいいだろうか、とにかくどんよりとそしてひんやりとしていた。

チェスが私の肩の上でキツと鋭く、短く鳴いた。

チェスが凝視している先を見ると、そこには小さな物影があった。ぼんやりと浮かぶあがる塊がゆっくりと僅かに動いた。

「ひっ、お化けっ？」

だが、よくよく見てみれば、それはお化けではなかった。小さな男の子だったのだ。

「ねえ、もしかしてあんたジェラル？」

男の子は私が声をかけると、びくりと飛び上がった。返事はないが、この子がジェラルであることは間違いないだろう。

「私はね、これからあんたの面倒を見ることになった、あかりっていうの。よろしくね？」

答えは期待してはいなかった。ジェラルが誰とも話さないことを知っているし、私を警戒しているのがぴりりとした空気が現われている。

「あんたいつつもこんな暗いところに一人でいるの？ 暗闇ってさ、

たまにある分にはいいけど、ずっとそんなところにいると病んじやうんだよ、心が……」

この部屋には窓はあるようだったが、その窓にはカーテンというよりも暗幕といった分厚いものがかかっている。

「一気に明るいところに行ったら目を悪くするから、少しずつ慣らしていこう」

カーテンをほんの少しだけ開けた。日の光が雲間から覗くように一筋の光を照らしている。たった一筋光が入っただけで、空気が少し和らいだ。

「日の光はね。何でも明るく照らしてくれるの。ほら、見て。まるでステージに立つ歌手みたいでしょ？」

ほんの少し開けたカーテンから覗くスポットライトを一身に浴び、私は歌いだした。

絶望の暗闇の中でも

君は笑いかけてくれた

その笑顔に会うたびに

胸が温かくなった

僕の心を君の笑顔が

明るく灯してくれたんだ

生きていこうと決めた

君という希望とともに

暗闇がしつこく僕を追い縋っても

君という灯りがその先へ導いてくれるから

この曲は兄ちゃんが私のために作ってくれた曲だった。確かいつかのバースデーだったと思う。拙いギターを弾きながら、私のためにだけに歌ってくれた。

まだまだ甘えたい盛りの頃に突如命を落とした両親の死を受け入れられなくて塞ぎ込んでいた私に贈ってくれたものだ。

何故今、この曲を歌ったのか……。ジェラがあの頃の私のように見えたからだ。

歌い終わったあと、ヒュツと息を吐いた。

「光はいつだって導いてくれるんだよ、正しい道へ。光を見つけないきゃ、自分だけの光を」

私にとつての兄ちゃんのように、兄ちゃんにとつての私のように。「あー、ごめん。三歳児にはちつと難しかったね。今はとりあえず戻るよ。また、今日のうちに誰かに連れられて来るかもしれないけど」

ただジツと私を見ているだけのジェラルに一方的に話をした。

「チェス、行くよ」

カーテンによじ登って遊んでいたチェスは、ぴよんと飛び降りるとすばしっこい動きで、再び私の肩の上に収まった。

「またね」

何かを言いたげにも見えるジェラルだったが、私が笑いかけると俯いてしまった。

仕方ないかと、私は部屋を出る。

「チェス」

あの子の傍にいてあげて。

私の心の声が聞こえたと言うように、キツと短く鳴いて扉の隙間からするりと入っていった。

「さて、そろそろ戻りますか」

あまり長く部屋を留守にしていると、メイヤにばれてしまうだろう。

その後、私は帰巢本能と思われる動物的な驚異のパワーを発揮して、一度も迷うことなく自室へと戻って来た。私は迷子になっても必ず戻りたい場所に帰れるので、兄ちゃんが私を心配することはなかった。幼い頃からデパートに行けば必ずはぐれる私を、始めは心配してくれていたが、兄ちゃんの心配をよそにっこりと笑顔で何事もなかったように戻って来る私を見て次第に心配することもなく

なっていた。

今回、私がいなくなったのにちつとも帰って来ない私を兄ちゃんはどう思っているんだろうか。どんなに遅くなっても、絶対に兄ちゃんの元に戻るだろうと思ってくれるだろうか。

一度でいい、会えなくてもいい、ただ兄ちゃんに私が無事であることと、必ず帰るということを伝えられればいいんだけど。

「おいっ、どうしたんだ。ぼんやりして？ おいつて、大丈夫なのか？」

ぼんやりとソファに座って考え事をしていたので、誰かが入って来たのも話しかけられていたことにも気付いていなかった。気付いた時に間近に見えた赤い髪があまりに奇麗で、思わず手が伸びてしまった。

「奇麗な髪……。ふわふわだ」

その赤い髪は柔らかくてふわふわで、まるでぬいぐるみみたいだったので、私はそれを抱きよせた。ギュッと抱き締めて、ぬいぐるみにするようにてっぺんにキスをした。

ああ、癒される。

「ちよっ、おまつ、何してんだっ」

慌てる声が聞こえたので、顔を覗き込んだ。

「あら、顔も赤い」

その相手がエロイだと分かっているにも、何故だか争う気持ちにはならなかった。

「もう、離れちゃダメっ」

私の腕の中で暴れて離れようとするエロイを、窘めてさらに強い力で抱き締めた。

「ああ、この髪の毛、ぬいぐるみみたいで癒されるっ」

私はエロイの髪の毛に自らの頬を擦り付け、その柔らかさに酔いしれた。エロイの呻く声を聞こえないふりをして。

第7話

その赤い髪は兄ちゃんのことを考えて、ホームシックになりかけていた私には癒されるものだった。

手触りが昔好きだったぬいぐるみに似ている。もうそのぬいぐるみも今では手触りが残念なことになってしまっているが。

「おいっ、もういい加減にしろっ」

イヤ、勿論私だって止めてあげたいのは山々だけど、あまりに心地好くて離れがたいのですよ。

堪り兼ねたエロイが力づくで私を離れた。離れがたく名残惜しそうに見ていると、恨みがましそうにエロイが睨み付けてくる。

「ケチねえ。ホームシックに苦しんでる女の子に少しくらい癒しを提供してもいいでしょお？」

「ホームシック……なのか？」

エロイは、私が乱した髪を整えながら、遠慮がちに尋ねた。

やな奴とばかり思っていたけど、ホントは良い奴なのかもしれない。

「私の家族は兄ちゃんだけだから、兄ちゃんがなくなった私を心配してると思うとね」

「親が……いないのか？」

「うん。だいぶ前にね、お父さんもお母さんも死んじゃったよ。親が死んでから、兄ちゃんが私のお父さんでお母さんだった。だから私は、兄ちゃんに三役分の心配をさせてるんだ」

私は何でこんな込み入ったことを昨日会ったばかりの、しかも第一印象最悪のこの男に話しているんだろう。

ぼろぼろと素直な言葉が不思議と出てくるのだ。

「すまない。俺たちの勝手でこんなところに連れてきてしまった」「しおらしく頭を下げるエロイを見ていたら、しみりしていた自分がなんだか無性に恥ずかしくなってきたしまった。

「うつわ、素直すぎてキモい」

「キモい？」

「気持ち悪いってこと。なんで私たち二人がしんみりしなきゃなんないの。ガラじゃないでしょ」

「お前……。俺が素直になってやってるのに」

「はあ？ なってやってるう？ どんだけ上から目線なんだよ。私はこの国の人間じゃないんだから、あんたが王族だからってかしくくつもりはないんだよ」

王族だからってなんだってんだ。地位があるからって人の運命狂わす権利はない。

「ところであんた、何でこんなところにいんのよ。のぞき？」

「のぞきのわけがないだろう。本当にお前は性格が悪いな」
ちくりと痛んだ胸に私は気付かないフリをした。

こんな奴の一言に、私は傷付いたりしない。したくない。

「あんたのが性格悪いわよ。そんなのはいいのよ。私が聞いてんのは、何で断りもなくあんたがこの部屋にいるのかってこと」

私の散々な物言いにうんざりしたようにため息を吐いた。

そんなの見たって私は傷付かないんだから。

「俺は父上にお前をジェラルルのところに案内するように言われて来た。ノックをしても応答がないから留守かと思って、一応中を覗いて見たら、お前の様子がおかしかったから……」

心配してくれた、と。

不器用ながら小さな優しさを感じる。

まあ、性格は合わないけどね。

「ジェラに会いに行くんでしょ？ 行くわよ」
すくりと立ち上がり、すたすたと歩いていく。

扉の前で立ち止まり、振り返った。

「ありがとう」

それだけ言々と部屋を出た。

部屋の中からエロイのバカみたいな笑い声が聞こえて、顔が熱く

なる。

ちきしょう、あいつ、笑いやがって。

私は屈辱に震えた。

行儀悪く足を踏みならしながら私は歩きだした。

「おい、待てよ。場所分らないだろ？」

「そうね。分らないわ」

そう答えつつも早足を止めるつもりはなかった。

「なあ、笑って悪かったよ。機嫌直せつて。なあ」

懸命に私の機嫌を取ろうとするが、敢えてそれを無視した。

「なあつてば。分かったよ。お前が触りたい時に俺の頭を触ること許すからさ」

なんと、それは酷く魅力的な申し出。

つい足を止めてしまった。

後を追っていたエロイが私の背中にぶつかった。

「うお、悪い」

「今の言葉、本当？」

「え？ あ、ああいつでもどんどこいだ」

「あ、そう。じゃあ許してあげるわ」

振り返りにっこりと微笑むと、エロイは苦虫を噛み潰したような嫌な表情を浮かべた。

「おい、何でジェラルの部屋がこつちだと分かった？」

「え、ああただの勘？」

実際はもう既にジェラの部屋までの道順は把握している。

「そうか」

そう言っただけ、エロイは口をつぐんだ。

行き交う人々が気さくにエロイに声をかけていく。その表情は皆嬉しそうで、エロイが王城の人々から慕われているのが分かる。そして、エロイににやかな挨拶をしたあと、注がれる私への値踏みするような容赦ない視線。それは特に女性からの視線であり、エロイが女性から絶大な人気を誇っていることを表していた。

「けっ、エロなくせに」

「は？　なんか言ったか？」

「べっつにな〜んにもお」

暫くすれば人気のない通路へと入って行く。

「あんた、人気がないからって私のこと襲わないでよねっ」

「バカかつ、襲うわけないだろうがっ。俺をなんだと思っただ」

「うん、エロ」

「俺はエロイという名だが、別に特別エロいわけじゃない。人並みだ」

堂々と宣言するものの、人並みと言っているという事はエロいということ肯定しているってことになるんだけど、分かってないんだろうか。

「はいはい。エロいエロい」

「お前ってホント、ムカつくな」

「それはお互い様だと思うけどね」

「勿体ない。顔は可愛いのに……」

「はあ？　何？　あんた私に惚れたの？」

「違うっ」

「ああ、だよ。良かった。私には佐々倉さんって人がいるんだから、勝手に惚れないでよね」

こんなところで恋愛なんかしたって結局向こうに戻らなきゃならないんだから、お互いに傷つくだけだ。ならば、いつそのこと好きな人など作らない方が身のためだ。お遊びの恋愛ならしてあげてもいいけどね。

「惚れないっ。サクラって誰だよ。お前の恋人か？」

「何、あんた。そんなに私に興味があるんだね？　佐々倉さんは、恋人なんかじゃないよ。強いて言うなら心の恋人……　とでも言うかな」

心の友ならぬ心の恋人。心の中で恋人としてたまに妄想出来れば十分なんだ。まあ、ようは夢見るだけで十分なアイドルみたいなも

んなんだろうと思う。

「なんだそれ、わけ分からん」

「あんた相当私に興味があるんだね。一晩だけなら付き合っただけでもいいけど？ 勿論後腐れなしでね。まあ、体の相性が良ければ一晩ならず相手してあげてもいいけどね」

「なっ、何言ってるんだっ」

「バカ、冗談だよ。本気にすんなっての」

お遊びの恋愛なんて言っただけ、私にそんな器用な恋愛が出来るわけもなく。身を焦がすような恋愛するのが恐ろしい、臆病な人間だ。

「ごめんで、怒ったの？ 私はそんな無責任に恋愛出来るタイプじゃないよ。そんな風に見えた？」

「イヤ、見えない。だから、驚いた。怒ってるわけじゃない」

「ただ、ちよつとからかっただけよ」

正直に言えば私は恋愛に慣れていない。というよりも、男の人に慣れていない。こんなふうに人気のないところで二人きりになるのは、酷く不安で怖い。唯一大丈夫なのは、兄ちゃんと佐々倉さんだけだ。

私がエロイをからかうのは、不安や恐れを一生懸命に隠そうとしているからだ。

「着いたぞ。ここだ」

言われなくても、分かっている。この部屋の中にお化けのように影の薄いジェラルルがいることも、ジェラルルとともにチェスもいるだろうことも。

第8話

エロイが扉を開けた瞬間に茶色い物体が飛んできて、エロイの鳩尾のあたりに激突した。

私には勿論予想できた事態ではあったのだが、面白そうなので注意を促さなかったのだ。

痛さに苦しんで腰を折るエロイをよそに私に飛び付くチェス。

「ど、どうして猿が」

腰を折ったまま、苦しそうに私とチェスを見上げる。

「さあ、どうしてでしょう」

首を傾げて知らぬフリをする。

「お前、ここに來たのか？」

「さあ？」

痛みが引いてきたのか、体を起こしたエロイは、今度は恨めしげに私を見下ろした。

「まあ、いい。とにかく入るぞ」

私を中に入るように促し、私を通したあと、エロイも部屋の中へ体を投じた。

案外ジェントルマンだ。

「ジェラルル、こちらに。……明日からあかりがお前の面倒を見ることになった。いいな？」

エロイはジェラルルを呼び、そして私を紹介した。

兄弟だと言うのに少しよそよそしくはあったが、エロイからジェラルルを嫌がる感情は感じられなかった。

朝食の時の感じからして、あまりよく思っていないように思ったのだが、そうでもないようだ。

「よろしくね、ジェラルル。チェスとは仲良くなれた？」

相変わらずジェラルルからの反応はない。

まあ、焦るつもりはない。これから、たっぷり時間があるのだ。

先ほど私が開けた小さなカーテンの隙間から覗く光が、今はジェラルルを照らしていた。

ジェラルルの髪は王妃と同じ銀色だった。王妃とディアナは同じ青い色をしているが、ジェラルルの目は深緑色をしていた。

目の色と言えば、エロイの目は髪の色と同じように鮮やかな赤い色をしている。ジェラルルの目も綺麗だが、エロイの目も綺麗だ。
「ジェラの目は綺麗な色だね」

何も悪いことは言っていないはずだ。なのになんだ、このえも言われぬ微妙な空気は。この薄暗い中でその空気は重苦しさを感じる。

「お前の色は変わっている。この世界に黒髪黒目は皆無だ。初めて見たぞ、そんな色」

エロイがその空気を壊すように、明るい声でそう言っ、私の頭を掻き乱した。

「ああ、そう言えば黒い髪は見たことないな。大抵みんな赤い髪だもんね？」

「この国は基本的に赤髪だ。赤髪じゃないのは、他国出身だと思っ
ていいだろう」

「へえ、じゃあ王妃さまは他国から嫁いできたんだね」

「そう言うことだ」

今はまだ少ないのかもしれないが、他国との交流が深まれば、いろんな色の髪をした人々がこれから増えていくのだろう。あまり他の髪色の人々の姿を見ないのは、まだ国際交流が盛んではないからではないか。それとも、王城で働く者はこの国の出身者でなければならぬという制限でもあるのだろうか。

「いいなあ。私もこんな色に憧れるな」

ジェラルルの頭を撫でながら、そう呟いた。

この国の人間が髪の色だけで差別するような人柄でないことを願
いながら。

ノックの音に私とエロイが振り返った。

扉が開き、侍女が入ってきたのだが、部屋の中にエロイを発見して危うくトレイを落としそうになっていた。

「エッ、エロイ様っ。どうしてこちらにっ」

「ああ、今日はジェラルルの家庭教師を連れてきたんだ」

「そうでしたか」

納得しつつ、私のことを観察している。

もついい加減なれたけども、いい気分なわけではない。

エロイが私を彼女に紹介しない。それは、彼女に紹介する必要があるということか、自分から名乗れということなのだろうか。

ちらりとエロイを窺ったが、何を考えているのかさっぱり分からない顔をしていた。

「あの、ジェラルル様のご昼食をお持ちしたのですが」

「それはありがとう。すまないが、私と彼女の食事も運んでくれな
いか？」

「承知いたしました」

配膳を終えた侍女が出ていくのを待つて口を開いた。

「何これ？」

私はジェラルルが今から食す食べ物指差し、エロイにキツい調子で尋ねた。

「何これとは？」

「何これは何これでしょ？ もう三歳でしょ、ジェラは？ 何でこんな離乳食みたいなご飯食べてんの？」

その食事は、高校生の頃、友達の歳のだいぶ離れた妹が食べていた離乳食に酷似していた。ジェラルルに与えられた食事はリゾットのようなものだが、米も野菜も全てある程度すり潰されてドロドロになっている。

「もしかして、ジェラは胃が弱いのか？」

「そんな話は聞いていない。そもそも俺はジェラルルの食事を見たのはこれが初めてだ。何かおかしいのか？」

「これは、まだまだ食事に慣れていない赤ちゃんが食べるような食

事だと私は思う。そうでなければ、胃を悪くしている人が、齒の不自由なご老人とか。もう三歳なら大人とほとんど同じで大丈夫だった筈だけど……。子供を育てたことがないから何とも言えないけど、これは一歳くらいの赤ちゃんの食事だと思う」

友達の弟は、三歳くらいでは私たちと変わらない食事をしてたと記憶している。だって、三歳と言ったら日本で言うところの幼稚園の年少さんだ。幼稚園児は普通に給食やお弁当を食べている筈だもの。

「そういうものか？ さっきの侍女に聞いてみよう」

私はエロイに頷くと、もう一度ジェラルルに用意された食事を見た。

私は、ジェラルルに待てをして、食事に手をつけさせなかった。

侍女が戻って来て、エロイがその件について尋ねると、そう指示をしたのは王妃だということだった。王妃がそう命じた理由は不明だった。侍女も、ジェラルルに離乳食のような食事を与えねばならないことを不思議に思っているようだった。が、王妃に命令されれば逆らえる筈もないのだ。

「ねえ、エロイ。明日からは私がお世話係なんだから、私が決めてもいいよね？ 私はジェラの食事を自分で作りたいと思うんだけど、いいかな？」

「お前が？ 作れるのか？」

なめないでいただきたい。両親の死後、兄ちゃんと二人だけで暮らしていたんだ。兄ちゃんが外で働いてくるのなら、私は家事をこなす。暗黙の了解のようにそういう図式が出来上がっていた。最初は散々な料理しか作れなかったけれど、今では兄ちゃんだけでなく周りの人々をも唸らせるくらいの腕前にはなっていた。

「あんた、私をなめてんの？ 料理くらい作れるつつうの。で、いいの？ いけないの？」

「そうか、お前がそう言うならやってみたらどうだ？ 母上には俺から話しておこう」

そうこなくっちゃ。

料理は愛情。料理でジェラルルの心を掴めれば、少しは話をしてくれるかもしれない。

今日のところは、その離乳食のような食事をジェラルルに食べさせ、柔らかそうなものを私の皿から取って与えてみる。ジェラルルはそれをとて美味しそうに頬張っていた。

いつまでもこんな料理じゃ満足できないもんねえ。

話は出来なくても、ほんの少し注意して見てみれば、ジェラルルは色んな表情を見せていた。全く反応がないと思っていたのは間違いだったのだ。その変化は分かりにくいかもしれない。けれど、無反応ではないのだ。

こんな誰も人が通らない所で、いつも一人暗闇の中で暮らしていたジェラルルが、心を病んでいてもおかしくはないと思っていた。この環境でなら、言葉が分からないのは無理もないのかもしれない。子供は人が話している姿を真似しながら言葉を覚えていくのだ。真似する人がいなければ、言葉などいつまでたっても覚ええない。ジェラルルは喋らないんじゃない。言葉を知らないから、喋れないのだ。きちんと感情を持っていることに、そして、ジェラルルはこれくらいいくらでも言葉を覚えることが出来る、そう思うとホッと胸を撫で下ろした。

第9話

「そんじゃ、突然邪魔しちゃってごめんね。また昼くらいにお邪魔します」

すっかりと仲良くなった人々に片手をひらひらさせて調理場を出た。私の肩にチェスはいない。調理場に動物を入れられないからだ。エロイが方々に話を通してくれたお陰で、調理場の一角を借りることが出来るようになった。

私のことは、王によって知らしめることになり、私がジェラルの家庭教師であることが既に皆に共通の事実となっているようだった。

「今度、暇なときにお嬢ちゃんのを料理を教えておくれ」

ほんのわずかな時間で気のおけない仲になったオバサン。料理長なのだが、見た目は恰幅のいい陽気な下町のオバサンにしか見えない。この料理長、名をノアンさんと言った。

「オッケー、任しといてっ」

私がジェラルの朝食に作ったのは、日本で普通に食べられているもの。

卵焼きと味噌汁、野菜のお浸しとご飯。味噌汁とはいったものの、この世界では味噌という調味料はなかったのだ、それに似たものを代用して作った。なので、正確にはなんちゃって味噌汁だ。

準和風の朝ご飯だ。

二人分の食事を持って、嬉々としてジェラルの元に向かった。

「ジェラル、おはよう。今日もいいお天気だよ。昨日は少ししかカーテンあけなかったけど、今日は半分の半分開けよう」

四分の一開けただけでも、大分明るくなる。

昨日のうちにエロイに大きなテールプルを用意してもらっていた。そこに二人腰掛けた。チェスは、もう既にバナナに似た果物をテ

ーブルの上でモシヤモシヤと食べている。

「じゃあ、食べよう。いただきます」

私が手を合わせる姿を不思議そうに見ていた。

「いただきます。ご飯を食べる時の挨拶だよ」

それをジェラルルに強要するつもりはない。そのうち真似するようになるかもしれないし、しなくても別に構わない。そもそもこの国にはそんな挨拶はないのだから。

「さあ、食べてごらん。私のいた国の料理なんだ。ジェラの口に合うかな？」

ジェラルルは、初めて見る日本食をジッと見ていたが、卵焼きをフォークで指すと口に運んだ。

卵焼きを咀嚼するジェラルルの頬が僅かに弛んでいるように見えるのは、私の希望的観測だろうか。

気に入ってくれたと信じたい。

「それは卵焼きって言うんだよ。卵焼き」

ジェラルルは小さな口にご飯を頬張り、なんちゃって味噌汁を啜り、卵焼きや野菜のお浸しをポイポイと入れていく。

「ジェラ。ご飯はゆっくりと落ちて着いて食べよう。たくさん噛んで食べるんだよ。モグモグモグ。こんなふうだね」

私が言っていることは、理解できているようで、注意された点をきちんと守ろうとしている。

その姿が可愛くて、無性に抱き締めたくなった。

朝食のあと、私はずっとジェラルルの傍にいた。まだ私を警戒しているジェラルルとにかく慣れてもらいたくて。

ジェラルル、きっと怖いんだ。みんなのことが、それは家族であっても同じことなんだと考えている。昨日エロイに呼ばれたときも、素直に従うものの、体が強張っていたように思う。

私がジェラルルにとって害をなさない存在であることを、理解させるしかない。

あんまり話し掛けすぎるともジェラルルのストレスになってしま

うので、適度に距離を保ちながら、無理なくお近付きになれたらいいと思っています。

私はジェラルルの部屋のテーブルに、メイヤから借りた本を広げていた。この世界のことがかかれている本で、一番はじめに世界地図がついている。

エリアスフィアは、二つの大きな大陸に分かれている。西部に広がるのがブルーレイク大陸、東部に広がるのがクリムゾンレイク大陸である。その二つの大陸は左右対称のようで、真ん中に大きな川が流れている。

「ドクロみたい……」

二つの大陸をくつつけるとまるでドクロのように見える。ちょうど目の位置に大陸の名にもなっているクリムゾンレイクという名の湖があるのだ。

それぞれの大陸には、三つの王国があり、それも面白いことに左右対称なのである。しかも、国名が一文字目と三文字目を逆にしただけなのだ。例えば私が今いるアルナボルディ王国の対になる王国は、ナルアボルディ王国となるわけだ。因みにアルナボルディ王国は、クリムゾンレイク大陸の中部に位置する王国である。北部のボスコスクーロ王国と、南部のカルフアーニヤ王国に挟まれている。

「ジェラも見ろ？」

私がぼそぼそと呟きながら真剣に見ている本に興味があったのか、気付けば凝視されていた。

ジェラルルは無言で私の隣にちょこんと腰掛けた。

その可愛らしさに、頬をすりすりしたくなかったが、そんな奇行に走ったら仲良くなるう計画が台無しになってしまう。なんとなく諦めたのだ。

「この世界のことを勉強していたんだよ。ここが私とジェラがいるアルナボルディ王国だよ」

私が指差す地図を見て、こくこくと頷いている。そして、ドクロの目を小さな丸っこい指で指し、私を見た。

「これはね、クリムゾンレイクっていう湖だよ。きつと大きいんだろ。見てみたいね？　どんな湖なんだろう。どこかに写真が載ってるかな？」

ぺらぺらとページを捲り、案の定写真を見つけた。イヤ、厳密には写真ではなく、限りなく写真に近い絵なのだ。よくよく見ないと絵だと分からないほどの高い技巧だ。

「あつたよ、ジェラ。凄い。湖の水が赤いね」

実際は湖の水が赤いわけではなく、水の透明度と湖の底の赤土、これが湖の水が赤く見える仕組みだ。水がこんなに綺麗じゃなきゃ、赤くは見えなかっただろう。泥沼のように汚ない色だったかもしれない。

「エロイの髪の色みたいね？」

こくりと力強い頷きを見せる。ジェラルもそう思っていたのだろう。

ジェラルは、話すことは出来ないようだが、きちんと私の話を理解しているようだ。ここに来ていたであろう侍女が話している内容を聞いていたから、聞くほうの能力は発達していた、ということか。ならば、私が思ったよりも早く言葉が出てくるかもしれない。

それは大きな希望だった。

そのあと、私とジェラルは二人で本を見ながら勉強したのだった。

「そろそろお昼の用意してくるね。チエスと待っててね。本、見てる？」

こくりと頷く。

昨日出会った時は、何を話し掛けても頷きさえしなかったところを見ると、飛躍的な一歩と言えるだろう。廊下を一人歩きながら、知らず笑顔がこぼれる。

私はもう既にジェラルの可愛さにやられてしまっているのかもしれない。決して笑顔を見せてくれるわけじゃない。ただ、そのちよつとした仕草が何とも言えず可愛いのだ。

思い返せば、私は子供好きだったかもしれない。自覚したことは全くなかったが、よく友達に子供好きだねと言われていたことを思い出す。わけも分からず、そう？ などと答えていたけど、そうだったのか。

弟や妹が欲しいとは思っていたが。

「ぶわっぶ」

考え事をしていたせいで、前方不注意で何かにぶつかった。

「すみません。大丈夫ですか？」

「いえいえ、こちらが悪いんです。すみません。……あの、リオ。近いです」

「ああ、君に怪我がないかと思ひまして」

「人とぶつかったくらいじゃ怪我はしませんよ。大袈裟ですね？ それじゃ、私は急いでいますんで」

すたすたと歩きだすその背中を見送る眼鏡の奥の瞳が、切なそうに濡れていたことに、私が気付くはずもなかった。

第10話

「あ、そうだ。リオっ」

用事を思い出し、振り返るとリウは先程と同じ位置で、こちらを向いたまま止まっていた。

「リオ？ どうしました？ 具合でも悪いんですか？」

驚いて駆け寄り、リオを覗き込んだ。

「いいえ、大丈夫ですよ。それより、私に用があつたのでは？」

いつもどおりのリオに戻つたのを見届け、私は首を傾げた。

「あ、そうそう。あのね、ジェラのことなんだけど、あの部屋から出してもいい？ 散歩をさせてあげたいなって思ってるんだけど」

「いけません。それは、許可できません」

眼鏡の奥の瞳がざらりと厳しく光つた。眉間には皺が寄り、口はへの時に結ばれている。

「どうしてですか？ あんなところに閉じ込めておくなんて、非衛生的です」

子供にそんなことを強いるなんてどうかしている。

「ジェラルルの存在が他者に知られてはならない。ジェラルルは産まれてきてはならない子供だったんです」

「それは誰が言つたんですか？ 誰がそんなくだらないこと考えてるんですか？ リオもそう思っているの？」

なんて悲しいことを言うんだろう。

産まれてきてはならない子供なんて、いるべきじゃないんだ。どんなことがあつてもそんなふうに考えるべきじゃない。

子供は敏感だから、すぐに気付く。自分は産まれてきてはいけなかつた子供なんだと、必要とされない子供なんだと。

「この国にとってあの子はいてはならない存在です。ですから、この城の一部の人間しか知らない」

王城の人間は私がジェラルルの家庭教師だと認識している。

私を知る人もまた、一部の人間でしかないということなのか。

「あなたがジェラルの家庭教師だと認識している人間と、ディアナの家庭教師だと認識している人間とがいるということですよ」

「紛らわしい」

「もつともですね」

そこまでしてなぜ隠さねばならないのだろう。

「そこまで深く関わらない方がいいですよ。なにも考えずにあなたがなすべきことをすればいい」

なんだろう。イライラする。

「リオ。事情は知らないし、聞きたくもない。私は他人で人の家族にあってーだ言うのはただのお節介でしかないけど、敢えて言わせてもらおうよ。あんたたち、間違ってるよ。ジェラがどんな子だったとしても、存在しなきゃいけないなんて言っちゃダメなんだ。ジェラが王妃の不倫で産まれた子だったとしても、その相手がかなりマズい人だったとしても、ジェラ自身に変な能力があったとしても……」

当てずっぽうだったんだけど、リオの表情が私の一言ごとに青白く変化していく。

おいおい、凶星かよ。

それにしても、リオはクールガイのくせに、顔に出るタイプだな、こりゃ。

「相手は王族……じゃなくて、神に携わる職についているもの……」
どうやら神に携わる職についている人物らしい。

王族がこんなに簡単に秘密をバラして（バラしたわけではないけど）しまっているのか。

「リオ。あんた、次期国王なんじゃないの？ 私がこんなこというのはなんだけど、向いてないと思うよ」

落ち着いて、冷たそうに見える。エロイより国王の器だと思って見たが、見かけ倒しだったか。

「次期国王はエロイですよ。私では国王は勤まらない」

少し肩を落としてそう言うリオ。なんだかリオが不憫に見えてきた。

「まあ、気落ちしないでよ。国王なんかになったって別にいいことなんてないだろうよ。気苦労が増えるだけだよ」

「それは……慰められているんでしょうか？」

「まあ？」

ジェラルルの話を、しかも説教まがいのことをしていたのに、いつのまに話は脱線していた。

「いっけね、ジェラルルのご飯作りに行くところだったんだ。ねえ、リオ。暇？ まだ話聞きたいから一緒に来て」

一応訊ねてはいるものの、返答は受け付けず、リラの腕を取り、歩きだした。

「ノアンさんっ。また、調理場とあと食材も借りるねっ。んでさ、この国の麺でどんなのがある？」

「ああ、構わないよ。おや、今日は珍しい御方が来たもんだ。久しぶりだね、坊っちゃん」

「えっ、坊っちゃん？」

「ノアン、いい加減その呼び方は止めてください。ノアンは、私とエロイの乳母だったんです」

前の言葉はノアンへ、後の言葉は私に向けられた。

それはいいことを聞いた。これから二人の弱みをこっそり聞き出せそうだ。

「いや、止めてください。それだけは」

「私まだ何も言っていないけど」

「言わなくても分かりますよ」

「あ、そう？ まあ、いいや。それよりノアンさん。どんなのがあるのかな？」

ノアンさんもお昼時で忙しそうで、手を患わせて申し訳ない。だからこそ、さっさと聞いて、自分の与えられた一角に逃げ込もうと思っただ。

「この世界にある麺は、一通りここに揃えてあるからね。何でも好きに使いなよ」

料理がイタリア風なだけあって、パスタが主だった。というかパスタしかない。

「ありがとう、ノアンさん」

パスタの種類によつて容器に分けられていた。適当な太さのパスタをざつと掴んで、自分の定位置になるであろう場所に立った。

「きのこの和風スパゲッティにしようかな。と、きのこのこつと」
パスタを置くと、再びそこを離れた。

今朝、野菜の保管場所はノアンさんに教えて貰っていた。

種類ごとに大きなザルのようなものに入っている。その中から、エノキとしめじ、椎茸に似ているきのこを調達して戻ってきた。

「リオは包丁使える？」

「イヤ、持ったこともないですが」

「うん、じゃこれよろしくね」

「出来ないと言っているじゃないですか」

「いい機会でしょ？ 何事も経験するのが一番だよ。さ、やったやつた。これを細切りにして。こんな感じに」

少しだけ実演して見せて、椎茸もどきをリオに押し付けた。戸惑って椎茸もどきを眺めていたが、私が無視して違う作業に忙しく動いているのを見て、諦めたように手を動かし始めた。

チラツと見れば、危なかしい手つきながら一生懸命に頑張っていた。

リオのその姿がなんだか可愛らしく映った。

「一つ聞きたいんだけど、この国で神に携わる職についている人は、結婚はしちゃいけないとか、女性と関係を持つちゃいけないとか、そんな決まりがあるのかな？」

日本ではあまり気にはならない。仏教、ようはお坊さんたちは普通に結婚しているようだ。神父さんはどうだっただろうか？ あまり接点がないので分からない。一番初めにパツと浮かんでくるのは

シスターじゃないだろうか。シスターは神に身を捧げているんだっ
たよね。

そういうことがあるんだろうか。

「……彼は神官でした。この国では、神官が女性と交わることは禁
じられています。その事実が知られれば、その者は神の裁きを受け
ることになっています」

「裁き？」

「裁きと言っても、誰かに処罰されるわけではなく、煩惱に負けた
自らの命を神に捧げ、許しを請うんです」

切腹。

そんな言葉がパツと浮かんできた。

言ってることは立派だが、ていのいい自殺だ。

「ジェラの父親は……」

「神に命を捧げたことになりますね」

ジェラルを残して逃げるように死んだようにしか、私には思え
なかった。

無責任に子供を作っておいてなにか、自分の命を神に捧げるだ。

その命をかけて女、子供を守ってみる。その方がうんとカッコい
いんだ。

第11話

信仰や宗教を否定するつもりは毛頭ない。けれど、自分の大事な
ものも守れないで、なにが神か、と思ってしまうのは、私が無宗教
だからかもしれない。

理解できないが、自分の信仰に命かけてる人だっているんだろう。
イヤ、だったら、命懸けてルール守っとけよ、と思うのだが。

「ああ、馬鹿馬鹿しい」

「私もそう思います。私はお国柄信仰を余儀なくされていますが、
命を蔑ろにする信仰はどうかと思ってしまうです」

お国柄というくらいだから、この国に根ざした信仰があるのだろ
う。だが、リオはその信仰をあまりよろしく思っていない、と。

「あんたとは話が合いそうだよ」

ニシツと笑って見せると、苦笑を浮かべている。

「この国では、女性の不倫はご法度？」

「勿論そうです。女性に対しては少々厳しい気もしますが」

今でこそ女性の不倫も珍しくなくなってきたようだが、女性
に少々厳しい気がするのには日本も同じような気がする。

「王妃のそれって、本当に不倫だったのかな？　もしかして……」

私の言わんとしていることが分かったのか、リオは顔を顰めなが
ら頷いた。

やはり、そうか。王妃はその神官が好きだったわけじゃなく、無
理矢理襲われたのだ。

「身籠ったと分かった時点で、どうしても出来たんじゃない？」

「この国では、堕胎は法で禁じられています」

「そっかあ。だから、王妃はジェラルルの世話をしようとしな
いのね？　その忌まわしい記憶が蘇ってしまうから」

「そういうことになりますね。母上は身籠っていた頃から心を病ん
でいました。子とともに命をたとうと何度もしたほどに。まだ、母

上の傷は癒えていません」

王妃が喋らないのは心が病んでいるからなのだ。親子揃って喋れないって、なんだか寂しいな。

「いつそのこと養子に出せばいいんじゃない？ そうすれば新しい家族で愛して貰えるでしょう？ その方が王妃もジェラも幸せでしょう」

母親に憎まれて生きていくなんて、そんな過酷な道を歩ませなきゃならないのはあまりにも無慈悲だ。

「母上に起こった出来事は、国民には知られてしまっています。どこから洩れたのかは定かではありませんが、母上の国民人気は凄まじく、まさに崇高されているといってもいいくらいですから、その辺から洩れたのかも知れません。ただ、ジェラルは生まれてすぐに病で命を落としたとされています。そうでなければ、ジェラルの命が危険に曝されます」

「まさか、国民がジェラを暗殺しようとするんじゃない」

「まさにその通りです。母上を苦しめるものは排除すべし、と考える国民がいるのです」

行き過ぎた追っかけというべきか。過激な追っかけは時として何をしでかすか分からないので怖い。

「もしかして、その神官。実は国民にやられたとか言わないよね？」

「それは……分かりません」

リオのその目にウソはなかった。言葉のとおり、分からないのだろう。可能性として、国民が手を下したということも有り得るということだ。

「ジェラが養子は無理な理由が分かったよ。だから、一部の人間しか知らないのね？ そんなもってそれが、外に出せない理由でもあると」

「そういうことです」

ジェラルの身に危険が降り掛かるのは避けたい。けれど、どうにかして外の世界を見せてあげたい。

「ねえ、ジェラが男の子だってことは知られてる？」

「知られています」

そう、と私はニヤリと笑った。

それなら男の子だとばれなきゃいいんじゃない？

「ジェラに女装してもらえばいいんだと思うわけ」

ジェラルに女装させるのは申し訳ないけど、外の空気を吸って感じてほしい。その前にこの城の外に私自身が行って見てみないと危険があるところにわざわざ行かせるわけにはいかないのだ。

「さて、お昼も出来たし、こっちのトレイはリオが持つて」

トレイを一つリオに押し付けて、ノアンさんに挨拶して調理場を出た。

「あかり。そちらも持つて」

さりげなくリオがもう一つトレイを取り上げた。

「ありがとう」

「イヤ、それにしても二人にしては量が多くはないですか？」

「何言ってるの。リオもあるんだよ。あれ、勝手に一緒に食べるものだと思い込んでた。リオもジェラをその……恨んでる？」

勝手にリオはジェラの話やその他の話をしてくれたから、憎からず思っていると思い込んでしまった。

「恨んでないません。ジェラルにもっとよくしてやりたいと思うのですが、母上の悲しそうな顔も浮かんでしまつて。複雑な気持ちです」

「一緒にご飯食べるのは、ダメ？」

「いいえ、喜んで一緒にします」

家族の中で、ジェラルをよく思っていないのは、王妃だけではないかもしれない。だが、そこにあるジェラルへの小さな想いが王妃に隠れているだけで、決してないわけではないことに私はホッとしていた。

「ジェラ。お昼の時間だよ」

私が部屋に入ったとき、ジェラルルはチェスと戯れていた。

「ジェラ。今日はリオも一緒にご飯を食べようね」

ジェラルルはリオを見上げ、不安げな表情を浮かべたが、リオが僅かに微笑んで見せると、嬉しそうに口を緩めた。といっても、その動きは微々たるもので、よく見てないと分からない。

「あかり。今、ジェラルルは私に笑いかけてくれたのでしょうか？」

「うん、そうだよ。嬉しいって」

感動です、ぼそりとこぼした声が私の耳に届いた。リオの瞳が爛々と輝いているのを見て、つい吹き出してしまった。

憎しみなんてこれっぽっちもない。リオからは愛情しか感じられない。

「ああ、私、リオ好きかも」

「は？」

突然笑いだしたかと思えば、突然そんなことを言い出した私に戸惑いを隠せぬようだった。

「私、リオ好きかも。変な意味じゃなく純粋に。好きだなんて思う人としてとか、恋愛感情としてとか、いまいちピンとこないけど、ただただこの人が好きだなんて思った。

戸惑いを隠せないリオにつこりと微笑んで見せた。

「さあ、ジェラ。今日はスパゲッティだよ。良い子は手を洗ってこよう」

私はリオの戸惑い顔から逃げるようにジェラルルを連れてその場から逃げた。

ジェラルルがそんな私を不思議そうな顔で見上げている。

「なんか私変なことをリオに言ってしまった気がする。何言っちゃってんだろう、私」

これじゃまるで告白だ。イヤ、まるでじゃなく確実に愛の告白だ。リオは何を考えているだろうか。もしかしたら戻ったら先程と同じ状態で口をぽかんとしているのかもしれない。そんなリオの様子を思い浮かべたら可笑しくて、クスリと笑いが漏れた。

ジェラがまた、私をキョトンとした顔で見上げている。

「うっん、何でもない。料理が冷めちゃうから早く行こう」

リオに対して、後ろめたいとかどんな風に接したらいいのか、とか自分がポロリと出してしまった言葉に後悔したりは全くなかった。そう言えば、自分から誰かに好きだなんて言葉言ったのは初めてだったな。

なんて、正直どうでもいいことを考えていた。だが、私の心臓はドキドキと激しく鼓動していた。頭の中ではどうでもいいことを考えているのに、体の方は緊張している。妙なアンバランスが生まれていた。後々思うことだが、この時私は動揺していたんだと思う。

私って……リオのことが好きだったんだ、びっくり。

このドキドキで、恋愛感情じゃない理由が思いつかなかった。

第12話

すっかり発言が案外恐ろしいことに、私は初めて気付いた。

「ジェラ。このかつらをかぶってごらん」

メイヤが変装用に作ってくれたそのかつらは、見事な黒い毛だった。

リオにジェラルルのことを色々と聞いたあの日から一週間ほどがたっていた。

そのあとすぐにメイヤにジェラルルに女装をさせてみようと考えていること、かつらを用意して欲しい旨を伝えた。

いくら小さいとはいえ、ジェラルルに女装をさせるのは、酷ではないかと意見を受け、結論として黒髪のかつらを作り、私の弟と名乗らせることに落ち着いた。まさかメイヤが手作りでかつらを作ってくれるとは思っていなかったが。

その間、私はリオとは会っていなかった。恐らく避けられているんだろうと思う。私からも会いにいくとは思えなかった。私は魔法使いが姿を現したら日本に帰るのだ。道が分かれると知っているのに、これ以上気持ちを肥大させるわけにはいかない。だから、私には都合が良かったといえる。

「うん。これなら大丈夫かな。ジェラ、お外に散歩に行ってみよう？」

この一週間ほどでカーテンは完全に開けられるようになり、ジェラルルは光にも慣れた。かつらも出来たことだし、外に出てみるのもいい頃だと思われた。

ジェラルルは一瞬キョトンとした表情を表面に張り付けたが、すぐに笑顔へと変わった。

最近のジェラルルは、私を害のない存在と認めてくれ、心を少しずつ開いてくれている。言葉はまだまだ出てこないが、何かを言い

たそうに口を開くことがある。結局、諦めたように口をつぐんでしまふのだが、いい傾向だと思っている。

私の料理を気に入ってくれたのか、がつがつと毎食残さず食べ、少しふつくらしてきたように見ている。とは言っても、初対面時がガリガリだったので、漸く見ていて痛ましくないほどになったというところなのだが。

黒髪のかつらをかぶったジェラルルと手を繋いで部屋を出た。扉をくぐるときに少し緊張したように私の手を強く握ったが、大丈夫という意をこめて握り還すと安心したように肩の力を抜き、一歩を踏み出した。

私からしたら小さな一歩だが、ジェラルルにとっては大きな一歩だった。

「あかり様。お出掛けですか？」

声をかけてくるのは、大抵が顔見知りであり、信頼のおけるもの達だった。

「うん。ちょっと散歩」

声をかけられるたびに萎縮するジェラルルだったが、私が気軽に話している様をみると落ち着くようだった。

「気をつけて行ってらっしゃいませ」

「うん、行ってくるね」

大抵の人がそんな好意的な会話を繰り広げるが、時折私に対し、胡散臭そうな視線を向ける。黒髪が珍しくて不躰な視線を向ける者もいる。だが、私はあまり気にしていなかった。

それでもなるべくジェラルルの負担をさけるため、人気の少ない道を選んだ。

思えば私自身この世界に来てから外に出たことがなかった。

室内からみる空と直接見る空はやはり新鮮さが違う。ジェラルルは生で見た初めての空、外の空気、解放感、それらに感動しているようだ。

肩の上に乗っていたチェスは、久しぶりの外にはしゃいで、どこかへ走っていつてしまった。だが、私は焦ったりしない。チェスが私のところに必ず戻ることを知っているから。ふと、可笑しくなる思っていることが、浮気な彼を信じて待つ女の心理に似ていたからけれど、相手が彼なら恐らくこんなゆとりはなかっただろう。

私はジェラルルの手を引いて、庭園の奥へと進んでいった。メイヤに頼んで、庭園の人気のない穴場をリサーチして貰っていたのだ。そこなら存分に遊べると、太鼓判を押された場所だ。

湖の近くではジェラルルが落ちてしまいそうで、不安がある。森の近くはジェラルルが迷い込んだり、獣が出没したりすると大変だ。地面は芝生で、草原のようにある程度開けた場所、しかし何かあった時に身を隠せる箇所があり、声を出しても届かないある程度城から離れた位置にある。私の条件に合った最適な場所だった。

初めはジェラルルが思いのまま体を動かすのを見守っていた。

芝生の感触が良かったのか、座り込んで芝生を手で触れてみる。芝生に紛れて咲いている小さな黄色い花を見つけて摘んでみたり、ちようちよを見つけて追いかけてみたり、バッタのようなものが飛んで来たのに驚いてひっくり返ってみたり。

私には、よくある普通の芝生に見えるけど、ジェラルルには全てが初めてで、全てが新鮮で、全てが発見で、全てがおもちゃなのだ。太陽の光の下で見るジェラルルの頬はほのかに赤らんでいた。

私が初めてジェラルルを見た時、お化けだと勘違いしてしまうほどに陰に満ちていた。その面影は今はないと言ってもいいだろう。

ジェラルルは本当によく笑うようになった。

母親が幼稚園の卒園式に子供の成長を見て涙を流す、そんな感情を私はこの時初めて理解した。恐らくその感情はもう既に兄ちゃんを知っている。私の高校の卒業式の日、兄ちゃんは周りをドン引きさせるほどに泣きじゃくっていたのだ。あの時は、何をやっているんだと呆れていたけど、今なら少しは分かる。まだ、ほんの少しだけ。きつとこれからもっと知っていくことになるのだろう。

「ジェラ、ボールで遊ぼう」

メイヤに貸して貰ったボールは、この世界では違う名前があったようだが、覚えていないのでボールとそのまま呼んでいた。少し硬めのボールだが、蹴ったり投げたりするのはまだジェラルには無理だと思うので、これくらいでも大丈夫だろう。

ジェラルの方へころころと転がすと喜んでそれを追いかける。そのボールを投げようとするが、下に叩きつけるようになってしまふ。

「ジェラ、ころんてしてごらん」

身ぶりを交えて伝えると、どうにかボールが返って来た。ジェラルに少し運動をさせようと、今度はジェラルの前ではなく、少し外してボールを転がしてみる。タタツと走ってボールを取りに行く姿は何とも可愛らしい。そして、ボールを取った時の誇らしげな顔に、頭を撫でくり回したくなる。

「上手だね、ジェラ」

褒めてやると嬉しそうに、少し恥ずかしそうにはにかんだ。

ああ、かわゆい。他人の子でこんなに可愛いんじゃない、自分の産んだ子ってどんなに可愛いんだろう。

まだまだ小さいジェラルのこと、すぐに体力もなくなり、ボールにも飽きると思っていたが、いくら走っても疲れ知らず、おまけにボール遊びが気に入ったのか、何度も何度も転がせと促してくる。ほんの少ししか動かない私の方が疲れてくるってどういうことなんだ。

「ごめん、ジェラ。ちょっと休憩させて」

芝生の上でごろんと横になった。

この国の貴族の女が見たら、卒倒するようなこんな振る舞いをジェラルに見せるのは教育上良くないのかもしれないが、あんまりに疲れて横になりたかった。

空はとても綺麗で。日本の空と何も変わらないように見えた。目を閉じて、パツと開ければ日本に戻っていたらいいのに、と思わな

いこともないが、今はジェラルルを中途半端で投げ出すことは出来ないと思った。

「おい、疲れたのか？」

「うおっ、エロイか。うん、ちょっと疲れたから休憩。この国ではこんな風に寝るのはお行儀悪いんだろうけど、見なかったことにしてえ」

それには何も言わず、エロイが私の隣りに腰をおろし、一人でボールと戯れているジェラルルから視線を逸らさずに口を開いた。

「お前、兄上と結婚するんだな？」

第13話

「兄上と結婚するんだってな？」

「はあ？」

エロイが言った言葉が理解できなかった。

「兄上と結婚するんだろ？」

どこか不機嫌そうに問い詰めるエロイに狼狽していた。

そんな話、知りませんけど……。

「何それ？」

「兄上とお前が結婚すると聞いた。違うのか？」

驚き、絶句している私を見て、エロイも狼狽しているようだ。

「そんな話、聞いてない。私はただ……」

リオが好きなだけだ。好きだけど、異なる世界にすむ人間だから、とこれ以上の進展は避けようと決意したばかりなのだ。

「誰が言ったの？」

「父上が、そう言っていた」

「どういうことが聞いてくる。ジエラをお願いっ」

なぜ国王がそんなことを？ 意味が分からない。国王は私の気持ちを知っていたのか？ だから、結婚などと言い始めたんだろうか。驚く視線を気にも止めず、私は城の中を疾走していた。

「聞いたからだ」

「何をですか？」

国王の執務室で、社長室の椅子を連想させる大きな椅子に座る彼の人を、机を両手につき、詰め寄るように見下ろしていた。

「息子の気持ちをだよ。息子は君を好いている。それは会った瞬間から気付いていたが、君も息子を好いてくれているようだと聞いてね。何か不味かったかな？」

「不味いでしょうよ。私は1年後には元の世界に戻るんですよ。」

結婚なんて出来るわけじゃないですか。せつかく諦めようと決心したのにつ」

余計なことを。いくらリオが私を好いていようと、そう好いていようと、え、好いていようと？

「あの、さっきなんて言いました？」

「不味かったかな？」

「違いますよ。リオがなんて……」

「ああ、息子は君を好いている、と言ったんだよ」

「ウソですか？」

そんなのウソに決まっているよね。だって、リオは私を避けていたじゃないか。避けていたということは、私の存在が迷惑だってことじゃないか。

違うの？

「私が嘘を吐くわけがない。嘘だと思ふなら、聞いてみるがいい。

彼女を連れて行ってやれ」

壁ぎわに控えていた従者に指示を与えた。

おい、待て。私はまだ行くななんて一言も。そんなことほいそれと聞けるもんじゃないんだよ。しかも、あれから会ってないんだから、どんな顔していいのかも分からないっていうのに。

「ご案内いたします。あかり様」

丁寧に促されて、行きませんとは言えない状況だ。いや、行かないと言うことは出来るだろう。けれど、リオの真意を知りたくもあった。

結局私はリオのところに連行され、渋る私の代わりにノックまでしていただき、リオの執務室の中まで送り届けられてしまった。

「リオ」

「あかり。父上が勝手なことをしてしまつてすみません。そのことで来たんですね？」

従者や侍女が促される前に部屋を出ていく。

素直に頷き、口を開いた。

「リオ。本当？」

「父上に聞きましたか？」

再びこくりと頷いた。

「リオは私の気持ちが迷惑なんと思った。ずっと私を避けていたから。でも、違うの？ 私のことが好きなの？」

「私はあかりが好きです。避けていたのは、自分でもどうしたらいいのか分からなかったからです。あかりは１年後には帰ってしまいますから。これ以上好きになれば辛いだけです。だから、会わなければいいんだと思いました」

同じだ。私が考えていたことと全く同じだ。

悲しくて、笑いたくなかった。泣いたって笑ったってどうにもならないというのに。

「私たちの結婚は取り下げさせますから、安心して下さい」

「……私はリオを好きでいちゃダメってことでしょ。私はリオの前に姿を現しちゃダメってことでしょ。じゃあ、この気持ちはどこへ行くの？」

行き場のない気持ちをどこへ向ければいいんだろう。好きな人がすぐ傍にいるのに、その人も私が好きだと言ってくれているのに。

会えなかった一週間が、余計に恋心を膨らませてしまったように思う。少しずつ積み重なった恋情が、私の胸をちりちりとさせた。

「ごめんなさい。私がこんなこと言っても困らせるだけだね。私の気持ちはきつと消せないけど、リオに迷惑はかけません」

それだけ言い切って、私は部屋を飛び出した。

我慢しろ。我慢しろ。涙はまだ、見せるな。

人気がない場所に辿り着いた途端、大粒の涙がぼたりぼたりと流れ落ちた。

失恋したんだ、私。

生まれて初めての告白、生まれて初めての失恋。

こんな時、兄ちゃんの不在が私を不安にさせた。兄ちゃんには何でも話してきた。楽しいことも悲しいことも苦しいことも嬉しいこ

とも、全て。兄ちゃんに話せば、それだけで心を落ち着かせることが出来る。兄ちゃんは私の精神安定剤だったんだ。

その兄ちゃんが今はいない。

「兄ちゃん……」

口に出してみたら、それに呼応するように何かに包まれたような気がした。温かくて、安心感のある兄ちゃんの気配。

兄ちゃんが私を案じてくれている。その思いが遠く離れたこの地へも流れてきている。

兄ちゃんはいる。ここではない世界に。でも、この世界にいないわけじゃない。そう考えたら、力が沸いてきた。

兄ちゃんの姿が見えないのは、辛くて苦しい。けど、兄ちゃんはきつといつまでだって私の帰りを待ってくれる。

「泣いてちゃダメだ。兄ちゃんに笑われる。今、私が出来ることをしなきゃ」

私に出来ることは、ジェラルルのお世話。ジェラルルがいらないって言うくらい愛情を注ごう。イヤって程愛を知らしめてやろう。

「こうしちゃいらんっ」

乱暴に頬に伝う涙を拭い去ると、歩き出した。始めはゆっくりと大股で、そのうち逸る気持ち私を走らせた。

今すぐに、ジェラを思い切り抱きしめたかった。あの愛しい存在を胸に収めたかった。

「ジェラっ」

庭園で先程と同じように遊んでいるジェラルルに、勢い良く抱き付いた。ジェラルルは苦しいのかもぞと腕の中で暴れる。

「私ね、ジェラのこと大好きだよ。いっぱいいっぱい好き。私は1年でこの世界からいなくなっちゃうけど、それまでうんと沢山一緒に過ごそうね」

ジェラルルを閉じ込めていた腕を解放し、丁寧にその小さな頭を撫でる。

「あ……」

ジェラルルが口を開き、言葉を紡ぎ出そうと一生懸命だった。言葉を出そうとするも、上手くいかずもどかしそうに眉を顰める。泣き出してしまうそうだが、懸命に頑張ろうとする姿を見ていると、無理をしなくていいとは言えなかった。こんなに頑張っているんだ、気のすむまでやらせてあげよう。

「あーり」

「うん、あかりだよ」

「あーり、ああーり、あかーり、あかつり……」

何度も何度も私の名前を呼び続けるジェラルル。上手く言えるまで何度でも何度でも挑戦する姿に、こちらの涙腺が危ぶまれた。

「あかりっ」

「うん、上手。言えたね。凄いね、ジェラ。偉い偉い」

「あかりっ、……ちやや……」

「ちやや？」

「ちや……やっ」

何を言わんとしているのか、分からなくて首をかしげると、伝わらないことが悔しいのか唇を噛み締める。

「やっ、いちゃ……やっ」

「行っちゃ、やだって言いたいのか？」

目尻に涙を溜めながら、こくんと頷いた。

「私に行かないでって言うてるの？」

「イヤっ。あかり、いいっちゃ……やっ。あかり、いるっ」

小さな男の子が私を引き留めようと、一生懸命に言葉を繰り返すその姿に、私は堪え切れずに涙を流した。

第14話

涙を流して必死にしがみ付いているジェラルルの姿に、心が締め付けられた。

そんなに長い時間を共にしたわけではないのに、そんなに思ってくれていると思うと、嬉しくて、そして、ちょっぴり胸がちりつとした。

1年という期間が長いと思うか、短いと思うか。私は早く兄ちゃんを安心させたいと思えば長く、ジェラルルともっと一緒にいたいと思えば短く感じた。ジェラルルは、1年を短いと感じるだろうか。「すぐにいなくなったりしないよ」

「やつ、やーや」

頭を左右に振り、より一層力強くしがみ付く。

ジェラルルがこんな風に泣くのも、子供らしく駄々をこねるのも初めてで、困惑の中にも嬉しさがあった。

「ありがとう、ジェラ」

涙に濡れた瞳が不思議そうに私を見上げていた。

なぜ私が、ありがとう、と言ったのか分からなかったのだろう。

「ありがとう」

もう一度そう言うと、それが別れの挨拶だと思ったのか、再びひつくひつくとしゃくり上げ始めた。

慰めて泣き止めさせることもせず、小さな背中をゆっくり撫でていた。

泣きただけ泣いていい。気が済むまで泣いたらいい。きっとずっと誰にも甘えられなかったんだから。

ジェラルルは長いこと泣き続けた。脱水症状が現れるんじゃないかと、心配になるほどに。

結局ジェラルルは、泣き疲れて、しがみついたまま寝てしまった。「重いだろ？俺が運ぶ」

「うわっ。エロイ、いたんだ？」

「お前がジェラルルを見てるって言ったんだろ？ 戻って来たと思えば、二人で泣き始めるし、一人で戻ろうと思ったが、ジェラルルが寝ちまうと思ったから。寝ると、子供でも重いからな」

「ありがとう、エロイ。でも、多分無理だと思う。しっかりしがみ付かれてるから、離れないんじゃないかな」

「がっちりと私の服を掴んでいる。」

「なに？」

エロイが引き剥がそうと引っ張るが、がっちりと掴んだ手が離れることはなかった。

「いいよ、エロイ。ジェラが起きちゃうから。抱っこしてくから。ありがとね」

ジェラルルを抱き上げて、歩き始めた。

覚悟はしていたが、地蔵を抱えているんじゃないかと思えるほど重い。

ああ、エレベーターが恋しい。

ジェラルルを抱っこしての階段はかなりキツイ。でも、世のお母さん方は何度も登ったりしてるんだろ？

私の少し後ろをエロイが何も言わず、ただついてくる。

「エロイ？ もう、大丈夫だよ？」

「ジェラルルの手が弛むかもしれないだろ？」

そのためについてきてくれていたのか。

その気持ちは嬉しいが、リオとのことを詮索されるのは堪らない。一人にして欲しい気分だ。

「ホントにいいから」

察してください。今は、あまり人と話したくないんだよ。

そんな心の叫びをエロイが察するはずもなく、後ろに気配を感じる。

「お前、兄上とはどうなった？」

「さあね、どうにもなりませんよ。私はすぐに消える人間なんだか

ら」

泣きだしてしまいそうになる。

リオのあまり見られない、無表情から広がりを見せる笑顔を思い出される。

リオは私なんかじゃない、この世界のご令嬢と結婚するのだろう。出来ればそれは、私が去ったあとならいいと願わずにはいられない。「苛々する。なんで兄上なんだっ」

「へ？」

「なんで好きになるのが、兄上なんだ」

「なんでだろう？」

第一印象は、あまり良くなかった。無表情で冷静で冷たい人だと思った。でも違った。冷静に見えて、どこか抜けてて、無表情なのは照れ隠しだった。丁寧に話すのが癖みたいなので、その会話のリズムが私には心地よかった。冷たいと思っていたのに、さりげなく優しく、ジェラルルのことも考えてくれていた。隣にいてだけで胸がドキドキして、痛いくらいだった。その反面、一緒にいると安心出来た。

「何でだろうね。そんなの私にだって分かんない。気付いた時には好きだった。もう、止められないくらい好きなんだ。どうしようもないじゃん」

私は好きでいることを止められないだろう。どんなに辛くても。この気持ちは消せない。

初めてなのだ。本気で誰かを好きになったのは。胸が締め付けられる想いも、理性では抑えられない想いも。

「エロイは、誰かを深く想ったことがある？」

「ああ、ある」

「誰かを心の底から想うって、結構しんどいんだね」

友達が恋をして笑ったり泣いたり惚気たり悩んだりしている姿を見て、眩しいと思った。羨ましいと思った。憧れていた。

好ましい人や憧れの人はいたが、恋い焦がれたことはない。誰か

を想って胸を焦がしたこともない。真剣に想いを告げられたこともあるが、心は動かなかった。

「そうだな」

「エロイも好きな人いるんだ？」

「……完全な一方通行だ。俺のことなんか眼中にも入っちゃいない」
エロイってかなり良い男なのに、片思いなんだ。

「エロイも大変だね。でも、エロイって良い奴だもん。その子にもいつか分かって貰えるさ。頑張れ」

「……お前が言うか？」

ぼそりと呟いた言葉は私の耳には届かず、こぼれ落ちた。

「ん？」

「イヤ、何でもない」

「そう」

それきり会話は途絶えた。エロイは結局ジェラルルの部屋まで送ってくれた。

「別に何もしてくれてはないけど、取り敢えずありがと」

ついてきただけで、しかも、傷に塩を塗り込むようにリオの話題をふったエロイは、憎らしいけれど、きつと心配してくれてたんだと思う。

だから一応のお礼は言っとかないとね。

私は扉の前でエロイを帰した。これ以上私たちに関わりすぎるのは、立場上良くないと思えたからだ。

ジェラルルは私たちがいる程度の声のボリュームで話していてもちつとも起きる様子がなかった。

ベッドに横たえた後も、私の服を掴んだ手は放さなかった。

「困ったねえ。これじゃ、部屋に帰れないよ」

仕方がないので、しばらく見守ることにする。

大きすぎるベッドにちょこんと横たわる小さな体を見て、自身の幼い頃を振り返った。

鮮明に覚えているわけではない。けれど、ある程度の年齢になる

まで、母親の布団と一緒に寝ていた。一人の布団が与えられた後も、両親と同じ部屋で寝ていた。一人で寝るようになったのは、一人部屋を与えられてからだ。確か小学生の高学年の頃だったと記憶している。それでも、夜に怖い番組を見てしまった日には、兄ちゃんや両親の部屋に潜り込んだものだった。

間違ってもこんな年齢で、一人で夜を明かすことなどなかった。

よく泣かないものだと感じる。私が知らないだけで、一人でこっそりと泣いているのかもしれない。

そうだとしたら、なんて不便なんだろう。

私がジェラールを見て感じる憤りは、同情なのだろうか。……そうかもしれない。可哀相な子だって心のどこかで思っている。だが、確かに守りたいと思う気持ちは、私の中に存在しているのだ。同情じゃない感情が確かに存在しているのだ。

ジェラールを見ているうちに、私は激しい眠気に勝てずに意識手放した。

私も今日は疲れていた。心も体も。

「良い夢を」

途切れかけた意識の中で誰かの声が聞こえた気がした。

ふんわりと揺れる安心感、心地よい気分、それらはただの夢だと私は推測した。

第15話

目覚めは突然訪れた。

特に物音がしたとか、悪い夢で飛び起きたというわけではなく、まさにはちりと目が覚めたのだ。

私の腕の中には小さな温もりがあり、スヤスヤと気持ちよさそうに寝息をたてていた。

昨日、私はジェラルルをここまで運んで、結局私も寝てしまったんだ。だが、私はジェラルルと同じベッドではなく、ジェラルルのベッドに頭だけを預けて寝てしまったはずだ。

自らがベッドに入ったとは考えられない。あの時、意識がなくなる間に聞いた声の主が私をベッドに寝かせたんだろうか。しかし、あれは私が見た夢だった筈なのだ。

結局昨日、私はジェラルルにご飯を食べさせるのも忘れて朝まで寝てしまったのだ。

「メイヤが心配してるかも」

何も知らないメイヤは、いくら待っても戻らない私を心配したかもしれない。だが、私がジェラルルのところにいるのは知っている。もしかしたら、私を心配して見に来たメイヤが私をベッドに寝かせてくれたのかもしれない。ただ、メイヤに私を抱き上げる力があるだろうか？

どっちにしろメイヤには謝らなければ。

寝起きに一度に頭を回転させたので、少し頭痛を感じた。側頭部を抑えながら、ベッドからそっと抜け出した。

変わらず聞こえる寝息に安心して部屋を出た。取り敢えず自室に戻り、お風呂に入ろう。メイヤがいてくれるといいけど。私には風呂のはりかたが分からない。日本のものとは違うのだ。メイヤにやり方を教わって、自分で用意したいと申し出たが、メイヤに一蹴されてしまった。

「ただいま戻りました」

誰かがいるとは思っていなかったが、日本にいたときの名残が知らず口について出てきてしまう言葉だ。

「お待ちしておりました、あかり様」

「うわっ」

扉を開けたら、目の前に仁王立ちしたメイヤがいた。しかも、般若の顔で。

「おはよう、メイヤ。いや、あの、ごめんね？ 心配させちゃったかな？」

メイヤの目が細められ、迫力を増していた。

「ええええ、心配しましたとも。誰かにさらわれたんじゃないか、何らかの方法で元の世界に戻られたんじゃないかと。私はジェラル殿下の部屋を訪れることを許されていません。ですから、安否を確認することも出来ない。厨房に顔を出せば、夕方に現れるあかり様が今日はまだ来てないと言う。生きた心地がしませんでした。ブラウリオ殿下が教えて下さらなければ私は……」

「リオが？ なんて？」

ここでリオの名前が出てくるとは思わなかった。

「あかり様は、ジェラル殿下と寝てしまったので、こちらには戻れないだろうと」

「リオがそう言ったの？」

「はい、そうです。そう言ったブラウリオ殿下は大層嬉しそうでした」

まさか、私が夢だと思っていたあの感覚は、あの声はリオだったというのか。

確かにあの声はリオのものだった。けれど、期待してそれを否定された時の落胆を考えると、夢と結論付けることで折り合いをつけたのだ。

嬉しかった。だが、私の気持ちに答えられないくせに期待を持たせることはしてくるな、とも思った。

「そっか」

お礼はしたいと思う。日本人としてそれが礼儀だと考える。けれど、もう関わるべきでないとしていたのだ。

心が揺れる。会いたいけれど、極力会うべきでないのだ。

失礼にあたるが、誰かにお礼を伝えてもらおうか。

「メイヤはリオとよく会ったりする？」

「いえ、会うことは滅多にありません。どうされました？」

何でもないと頭を振った。メイヤに頼んでみようと思ったが、会わないのであれば仕方ない。エロイに頼むと、詮索されるからイヤなんだよな……。

「あかり様。そういえばチェスはどうしたのですか？」

「ああつ、しまった。忘れてたっ」

庭園で自由に遊ばせていたんだった。

「メイヤ。ちよつとチェスを迎えに行ってくるよ」

戻ってきたばかりの自室を出て、走りだした。

朝もまだ早い時間。廊下をすれ違う者は皆無だ。日の光が射し込んで、兄ちゃんに見守られているようで心が安らぐ。

私の名は灯里、兄ちゃんの名は光。光を見ると、兄ちゃんを思い出す。それらは兄ちゃんそのものであるように、幼い頃から思っていた。

朝の光の中で走るのは気持ち良かった。

軽快に弾む息が自分が生きていると教えてくれているような気がする。

庭園には誰もいるわけはなく、ずんずんと昨日ジェラルと遊んだ場所へ急いだ。

キーキーと、チェスが騒ぎ立てている声が聞こえた。一体何をあんなに騒いでいるんだろ。まさか、大きな獣にでも襲われているんじゃない。

私はぐんとスピードを上げて、芝生の場所に飛び込んだ。

「チェスっ。大丈夫よっ。私が助けるっ」

開けた場所で叫んだので、声が広がって消えていった。

「お早うございます、あかり。何から助けるんですか？」

チェスと一緒にいたのは、今最も会いたくて、会いたくない人だった。

「リオ。えつとおはよう。どうしてここに？」

「部屋の窓からチェスが一人でいるのが見えたものですから」

リオが指差した窓を見た。なるほど、あそこならここが見えるだろう。

こんな時に会うことになるうとは思っていなかった私は、咄嗟にどう対処していいのか分からず、口をつぐんでしまった。

チェスが私の肩の定位置に登り、非難めいた鳴き声をあげる。

「ごめんね、チェス。悪気はなかったんだけどね。今日はランチを奮発するから許してっ」

チェスの柔らかい毛を撫でると、気持ち良さそうに喉をならしている。

どうやら機嫌を直してくれたようだ。

「あのさっ、リオ」

顔を上げてリオを見て、私は固まった。

「……リオはズルい。そんな目で見ないでよお」

そんな切なそうな瞳を私に向けないで。私はバカだから期待しちゃう。ほんの少しの希望さえ見つけて、自分の良いように解釈して夢見てしまう。

「私はあかりが好きです。私だって止められません。あかりには迷惑はかけませんので」

「ズルい。そんなこと言うのはズルい。傍にいたいよ、リオ。傍にいたい……」

私は初めて人を好きになるということを知った。あまりに切なくて、痛くて崩れ落ちそうになった。それでも心の底から愛しいと思った。

「私は本当にズルいですね。でも、あなたが他の誰かと親しそうに

している姿を見るのは耐えきれないのです」

昨日、あの窓から私とエロイの姿を見たのだろうか。そのことを言っているのだろうか。私が親しくしている人間と言えばエロイくらいなものなのだし。

「じゃあ私はどうすればいいっていうの？」

「私の傍にいてください。あなたが元の世界に戻るその日まで」

「……後悔しても知らないよ？」

「あかりといられるのであれば、後悔などしません」

私は後悔しないだろうか。1年後に戻るとき、私はどうなっているだろうか。

正直、そんなの分からない。でも、分かっていることはある。私はリオのそばにいけないことが、この1週間すごく辛かったということ。

「恋は盲目とはよく言ったもんだね。うん、悩むなんて出来ないんだよね。もう、心は決まってるの。だってリオが好きで仕方ないんだもの。傷ついてても良い。苦しくても良いよ。私はリオの傍にいる」
未来を思えば怖くもある。離れなきゃならない運命でも、今というときを離れてはいられない。

私は恋に溺れた女にすぎないのだから。

第16話

「気持ち悪い」

開口一番そう言ったエロイを無視して、私はジェラルルを膝の上に乗せ、絵本を読み聞かせていた。

「お姫さまと王子さまは末永く幸せに暮らしましたとさ」

ぱたりと絵本を閉じると、ジェラルルをテーブルに座るように促した。

文字を読めたのは、私には嬉しい誤算だった。言葉は大丈夫だとしても、文字はさすがに読めないだろうと思っていたからだ。因みに文字も書ける。どうやら相当優秀な魔法使いなのだろう、色々と都合のいいオプションがついているようだ。

それにしてもこちらのお伽話は日本のものと全く同じものと言っているものだった。今日ジェラルルに読み聞かせたものだって、『シンデレラ』だったのだから。

「今日のおやつは（なんちゃって）マドレーヌだよ」

昨夜のうちに焼き、予め用意しておいたマドレーヌをテーブルの上に置き、つい今しがた侍女が届けてくれたミルクをコップに注ぎ、ジェラルルの前に差し出した。

自分には紅茶をいれ、ふと手を止める。

「エロイも食べるの？」

エロイの存在を無視してしまってもいいのだけれど、一応この国の王子であるので仕方なく配慮したのである。

「食べるに決まってるだろう？」

「ならさつさとすわんなさいよ」

エロイにも紅茶をいれてやり、ジェラルルの隣に腰を落ち着けた。

「ジェラ、美味しい？」

「おいしっ」

少しずつ言葉が増えてきたジェラルルは嬉々として叫んだ。

甘い物の大好きな（子供なら誰しもそうだと思うが）ジェラルルは、おやつ時間が大好きで上機嫌だ。

「そっか、良かった」

料理を褒められるのは嬉しい。

「あかり、ジェラルル。ご一緒してもいいですか？」

ノックのあと、ひよっこりと顔を出したリオが言った。

「リオっ。いいよね、ジェラ？」

「リーオっ。いいっしょ」

ジェラルルはリオが大好きだ。部屋にこない日は少し拗ねたように見える。

私とジェラルルは好みが一緒なのだ。

リオが来たことで自然とウキウキしてしまう私を見て、エロイが白い目をしてこう言った。

「気持ち悪い」

「うっさいわ。あんたは何度同じことを言えば気が済むんだよ」

あんまりしつこいエロイにとうとうキレてしまった私は、慌ててリオを見た。

「また何か言われたんですか？」

私の暴言を気にすることなく、クスクスと笑うリオが眩しく映った。

「んーん、何でもない。エロイがバカなだけ。こんなバカ放っておいて早く食べよう」

「あかり。今日も美味しいですね」

リオに言われると格別に嬉しい。ふわふわと宙を漂っているような足元が覚束ない感覚。

「そうだ、リオ。私の部屋、この部屋の近くにしてもらえないかな？ あんまりに遠いから、何かあっても飛んできてあげられないし……ダメ？」

夜のジェラルルが心配なのだ。一人で泣いていても私は気付いてやれない。

「隣の部屋が空いていると言えば空いているのですが、贅沢な作りではないですし、なにより狭いですよ」

「私は贅沢な部屋じゃなくて十分なの。私一人寝るスペースがあれば問題ない」

今の部屋は、日本で一般人だった私には、大分贅沢すぎて気後れする。ベッドが大きすぎて落ち着かないし、寝室だけで、兄ちゃんと二人で住んでいたアパートの広さなのだから。

「本当にいいのですか？ あかりが望むのでしたら、部屋を整えさせます」

「ありがとう、リオ。ねえ、そういえばメイヤがここに近付くことは禁止されてるって聞いたんだけど、私がこっちに來たら私の侍女って違う人になっちゃうのかな？」

「選ばれた侍女しかこちらには立ち入ることは禁じられていますが、メイヤなら大丈夫でしょう。ですが、あかり付きの侍女は一人だけになります、いいですか？」

そもそも私はまだメイヤとしか会ったことがないのだ。私は朝起きたらすぐに厨房に行き、そのままジェラルと共に一日を過ごし、夜また戻ってくる。朝も夜もメイヤしかおらず、メイヤの言によれば、昼間私の部屋を清掃してくれたりしていたらしいのだが。

会わずままお別れみたいでなんだか申し訳ないけど……。

「私は問題ないけど。メイヤ一人で問題ないならいいんだけど」

「それは大丈夫でしょう。あかりはあまり侍女に頼らないようだし、部屋も小さくなりますから、負担はないでしょう」

「そっか、ならいいんだ。ジェラ。私、お隣に引っ越してくるからね」

がむしゃらにマドレーヌを食べていたジェラルは、きょとんと首を傾げた。

「引っ越し」

「ひこし？」

引っ越しの意味が分からないのだろう。今度は逆に首を傾げた。

「引越し。近いうちに私のお部屋がジェラの部屋の隣になるの」
「となり？　となり、いこと？」

「うん。すぐにジェラに会いにこれるから、淋しくないでしょ？」

「ああ、となり。さみしいっ」

私の言ったことを理解してくれたのか、嬉しそうに私に抱き付いた。あまりに愛らしいジェラルの頭を丁寧に撫でてあげると、嬉しいのか私の腕の中でキャッキッと笑っている。

勿体ない。こんなに可愛い時期を共に過ごさないなんて。

王妃が受けた過去の事件を考えれば、ジェラルを良く思えないのは仕方のないことなのかもしれない。その辺は人の感じ方によって違うのだろうし、その事件の記憶があまりに酷く心に残っているのなら、それも頷ける。でも、ジェラルは王妃の血が繋がっている子供だとは思えないだろうか。例の神官の血を継ぐ子供ではなく、自分の血を継ぐ者だとは思えないだろうか。

子供の一番可愛い時期に一緒にいれなかったことをいつか後悔しやしないだろうか。

王妃と話したことがないので何とも言えない。王妃がどれほどジェラルを悪しく思っているのか。王妃と話がしてみたい。ジェラルのことを話しに上げることさえ良しとしない王族を抜きにして二人きりで話せないものだろうか。話が出来ないほどに、王妃は病んでしまっているのだろうか。

私がジェラルの隣の部屋に引越してきたのは、それから約1週間後のことだった。

リオによって整えられたその部屋は、今までお世話になった部屋よりはよっぽど狭かった。けれど、庶民の私には申し分ない広さで私の希望通りシンプルにまとめ上げられているので私は大満足だった。リオはいつまでも、狭いことを気にしていたようだが、私が頑なにその部屋に移るといっているので最後には諦めていた。

「ここが私の部屋だよ。ジェラの隣り。ねっ、近いでしょ？」

ジェラルルの手を引いて私の部屋を案内する。

ジェラルルは私の手を離れると、嬉しそうにあちこち見て回っては、ぴよんぴよんとはしゃぎ跳ねまわっている。

いつもとは違う部屋に興奮しているのか、今日のジェラルルはいつにもましてハイテンションだった。

「あぁりのえやつ、えやつ。となり、となり、ちかいっ」

ジェラルルがでたらめな節をつけて、走りながら歌っている。そんなに嬉しかったのかと、呆れてしまうほどに今日のジェラルルは絶好調だった。

走り回り、跳ねまわっていたジェラルルは洋服が汗でびしょびしょになっていた。

「凄い汗ね、ジェラ。ジェラの部屋でお着替えしよう」

走り回るジェラルルを捕まえようと手を伸ばした私の視界からジェラルルが消えた。びっくりして立ち止まると、ジェラルルがその場に倒れている姿が目に見えび込んできた。

「ジェラっ」

第17話

苦しそくに荒い寝息を立てるジェラルルを覗き込み、おでこに乗せた濡れタオルをそっと取った。

桶にはった水に浸し、ギュツと絞ると額の上に再び乗せた。

「あかり殿ですな？ わしは宮廷医師のラクールですじゃ」

そう言つて、ジェラルルの急な病に慌てている私を宥めるように、優しく微笑んだ。まるでケンタツキーの店前で客を出迎えているあの白髪のおじいさんのような風貌をしていた。

「風邪ですな。心配は無用じゃよ。薬を置いていくからの、食後にそれを飲ませることじゃ。……あかり殿のせいではないて、そんな顔をするもんじゃないぞ。ジェラルルが目覚めた時、そんな顔を見たら、不安になるじゃろ？」

「ありがとうございます。気をつけます」

「子どもは何度も風邪を引いて免疫力を付けるんじゃ。苦しいだろうがこれも必要なことじゃよ」

それは分かっているつもりだ。小さい時分に何度も風邪を引いて徐々に免疫力を付け、段々と風邪を引かない強い体になっていくのだ。

ただ、あんなに小さな体であんなに苦しそうにしている姿は、見ているこちらが辛くなってくる。

「私がつと早くに気付いてあげてたら……」

「子供は高い熱が出ていてもけろりとしているからのう。上手く伝えられないどころか、自分の体調の悪さにさえ気付かない子もおるくらいじゃ。自分を責める必要はないじゃろうて。あかり殿がいなければ、大変なことになっていたかもしれんのじゃからの」

誰もいない部屋でジェラルルが倒れている姿を思い描き、ゾツとした。

私がいる間はこれまで以上に注意を払うだろう。けれど、私がいなくなったら誰がジェラルルの面倒を見ると言うんだろう。ジェラルルの面倒を見る人がいなかったから私が喚ばれたんじゃ、この国に面倒を見てくれる人がいないのは明白だ。

「ラクールさん。私がいなくなったら、ジェラはどうなっちゃいますか？」

「元の世界に戻りなさるのか」

私は素直に頷いた。

驚くことはない。ラクールさんがジェラルルの存在を知り、私の存在を知っている時点で私が異世界の人間だと知らされたうちの一人だと認識していた。

「未来のことはわしとて分からんがのお、最低限の衣食住は保証されても、あかり殿のような存在はおらんようになるなあ。あかり殿には、この国に留まるという選択はないのかのお」

「私には兄がいるんです。両親は随分前に事故でなくして、兄にとっても私にとっても身寄りには私だけなんです。帰らなきゃ。兄が待っているんです」

「兄上殿以外に身内はおらんのかの？」

「両親が家を勘当されたようで、私は両親の葬儀の時に初めて顔を合しました。兄はその当時18歳で、既に大学にも受かっていました。あ、大学って言うのは学校のことです。兄は両親の葬儀でも冷たい態度を示す親戚たちに、私は自分一人で育てる、と宣言して大学の入学を蹴って、仕事を始めました。それ以来、親戚とは何の連絡も取り合っていません」

両親がどんな理由で双方の親戚から勘当を受けたのかは聞いていない。だが、葬儀の際の親戚のあからさまな非難の視線はその子供である私達に容赦なく注がれた。両親の死のショックで彼らから何を言われたのかは覚えていないが、相当酷いことも言われたようだ。そんな彼らの助けはいらないと、兄ちゃんは自ら援助を断った。

もし、自分が兄ちゃんの立場だったとしても同じことを言い、実

行しただろう。だが、兄ちゃんには成し遂げたい夢があったんじゃないかと思うと胸が軋む思いだった。兄ちゃんの夢は聞いたことがない。けれど、確かに兄ちゃんには夢があった。兄ちゃんが合格していた大学が、その夢を叶えるために最適な大学であったのを知っている。

ふと、兄ちゃんは私がいなくて良かったんじゃないかと思った。私の負担がなければ、兄ちゃん一人の大学の学費くらい自分で何とか出来たのかもしれない。

私は戻ってもいいのかな……。

「色々と苦労なさったんじやの」

「私の国では、若い頃の苦労は買ってでもしろ、なんて言葉があるくらいですから私は平気です」

と言っても、私は苦労しただなんて思っていない。兄ちゃんがいとも傍にいてくれて楽しかった。料理を作るのは元々好きで、苦にはならなかった。

「あかり殿にも色々あるのに、勝手を言っただけだったのよ」

「いいんです。私もジェラのことは心配ですし、ラクールさんもジェラのこと心配してくれたんでしょ？」

「哀れな子なんじやよ。あの子に非は何にもないんじや。それなのに理不尽にもこの仕打ちじや。あかり殿が来るまで、あの子の笑顔をわしは見たことがなかった。あんなに楽しそうに笑っているあの子を見て、わしは嬉しくてのお。感謝しておるんじやよ、あかり殿には」

そんな言葉を残してラクールは部屋を後にした。

ジェラルルの看病をしているうちに、私はベッドに頭を預けて寝てしまったようだ。

ハッと目を覚ますと、ジェラルルを覗き込む。

「やつ、いちゃやつの」

ジェラルルは涙を流し、手を空に彷徨わせていた。目は閉じてい

る。イヤな夢を見たようだ。

私はジェラルをそつと抱きよせた。

「大丈夫。どこにもいかない。ここにいるよ」

背中を撫でながら、同じ言葉を何度も言い聞かせた。

ひつくひつくとしやくりあげるジェラルが徐々に落ち着いていくのを、感じながら背中を撫で続けた。

「ジェラ。少し落ち着いたらお水を飲もうか？　のど渴いてない？」

「ああ、ここ、いる」

「大丈夫だよ、ジェラ。お水はここにおいてあるんだから、どこにもいかないよ。ね？」

素直にこくんと頷くジェラルの姿に身悶えそうになるのを堪えて、お水を少しずつ飲ませた。

「ジェラ、おかゆ食べられるかな？」

「いやない」

「でも、食べないとお薬も飲めないし、早く良くならないよ。少しでも食べてごらん」

「すこし」

ジェラルの手が私の洋服を掴んでいた。おかゆを作り私がここからいなくなると思っているようだ。もしかしたら、おかゆをいらないと言ったのも私がいなくなるのを心配してのことかもしれない。

「ジェラ。私はどこにもいかないよ。おかゆはね、ノアンさん、料理長に作って貰っているし、出来たらメイヤが持って来てくれることになってるの。だから、大丈夫よ」

「メイヤ？」

「メイヤはね、私の侍女でお友達なの。優しい人だから、ジェラも仲良くなれると思うよ」

私がいなくなると納得したのか、洋服から手を放した。それでも、どこか不安げなジェラルに苦笑した。

「これならどう？　それでも不安になる？」

ジェラルルの手を包み込むように両手で握った。

ジェラルルは嬉しそうに繋がれた手を見て、ふるふると首を振った。

「ちょっとジェラ、熱がどれくらいかおでこ触らせて」

ジェラルルのおでこを触ろうと手を放そうとするが、ジェラルルはそれを拒んだ。

「ジェラのお熱がどれくらいかっておでこに触るだけよ。それが終わったらまた手を繋ごう？」

名残惜しそうに手を放したジェラルルは、今にも泣き出しそうだ。私はジェラルルのおでこに自分のおでこを押しつけた。

「大分下がったみたいだけど、まだ少しあるかな。今日は一日寝てないとダメだね」

ジェラルルの瞳を覗き込みながら語りかけた。ジェラルルの瞳がまん丸と見開かれている。

「あぁりの目、くちゅいてる」（あかりの目、くっ付いてる）

「本当？ ジェラの目もくっついてるみたい」

微笑んで、おでこを放すとそこにそっとキスをした。

あなたは愛されている、だから、安心して……。

第17話（後書き）

こんにちは。いつも読んで頂き有難うございます。

私事ではございますが、今週の木、金曜日及び来週の木、金曜日は夏期休暇のため、投稿をお休みさせて頂きます。また、場合によっては明日の投稿も出来ないかもしれません。

第18話

「メイヤ様、おかゆをお持ちしました。それと、ラクール様が昼過ぎに診察にくるそうですので」

ジェラルルを気遣ってか、寢室をノックしたあと扉は開けずにその場で私に呼び掛けた。

「ジェラ、メイヤを中に入れても構わない？」

ジェラルルは繋いだ手に力をこめたが、すぐに力を弛めてんと頭を下げた。

「メイヤ。中におかゆを持って来てくれる？」

メイヤの元気な返事のあと、扉が開かれトレイを片手に持ったメイヤが姿を現した。

「ありがとう。メイヤ」

「いいえ、礼など不要です。ノアンさんからあかり様の食事も受け取って参りました。この国の料理は口に合わないかもしれないけど、我慢して食ってくれ、といってました」

「そう。ノアンさんの料理が口に合わないわけないのにね」

ノアンさんのあまりの言いぶりに吹き出してしまった。

「メイヤ、ここに置いてくれる？」

ベッド脇の小さなテーブルにトレイを乗せてもらう。

「では、私はこれで。殿下、お大事にしてくださいませ」

ジェラルルに深々と頭を下げ、メイヤは寢室を出ていった。

こんなに小さくても、王子様なんだな。

などと、感心してしまった。

「ジェラ、おかゆ食べさせてあげるね」

微量を匙に乗せ、十分に冷ましてからジェラルルの口元に運んだ。ジェラルルは素直にそれを口におさめると、美味しそうに咀嚼した。どうやら食欲はあるようだ。

ジェラルルの様子を窺いながら、口に運び、殆どおかゆをたいら

げた。

この調子ならすぐに治りそうだ。昨日は、ジェラルルの辛そうな姿を見ていて、不安で不安でしかたなかったが、少しずつ快方に向かう姿を見て心にゆとりも出て来た。

ラクールが置いていった薬は粉状のもので、指示どおり少量の水で溶かしてそれをジェラルルの口に運ぶ。苦そうに顔を歪めるジェラルルを気の毒に思うが、飲まないことには早くよくなるのだ。「ごめんね。不味いよね。あと一口だから頑張ろう」

涙目になりながらも最後まで飲み切ったジェラルルは、心なしかぐつたりとしている。

「さあ、ジェラはもう少し寝ようか」

「ねむ、ない」

「眠くなくても寝ないと良くならないよ？」

「ねう」

少し拗ねたように唇を尖らせて、でも、渋々ながら横になったジェラルルにつこりと微笑んだ。

ジェラルルが寝息をたて始めたのを確認して、ノアンさんが作ってくれた朝食に手をつけた。だが、右手をジェラルルがしっかりと握っているの、左手しか使えない。だが、フォークなので食べれなくもない。

「貸してください」

突然フォークを奪われ、小さな悲鳴を上げたが、すぐに口をつぐんでジェラルルが目覚めていないか確認する。すやすやと寝ている姿を確認して、胸を撫で下ろした。

「すみません。驚かせてしまいましたか？」

「うん、びっくりした。リオ、いつのまに？」

「一応ノックはしたのですが、応答がなかったの、勝手ながら入らせて貰いました」

ノックなど全然聞こえなかったし、気配も全然感じなかった。

「あの、リオ。フォークを……」

「私が食べさせてあげます。さあ、あーんしてください」

微笑を浮かべたリオは、有無を言わさぬオーラを纏い、口元にフオークを運んでいる。その微笑がとても優美で、眼鏡の奥に隠れている瞳はとても柔らかかった。

日本でなら、絶対に拒否していたと思う。こんな羞恥プレイをさせられたら、恥かきすぎて逆上していたかもしれない。けれど、ここは日本ではなく、現実ではあるけれど、どこか非現実的な世界。そして、目の前にいるのは私が好いた男で、私を好いてくれる人。ここにいるのは私とリオ。ジェラルもいるけれど、今は寝ているから誰にも見られる心配はない。

私は、自分に沢山の言い訳をして口を開いて、フオークを迎える。リオがこんな甘い行為をしてこようとは思ひもしなかった。私が思っていたリオとは少し違うのかもしれない。私のイメージでは、恥かしくてこんな行為は考えられないというタイプだと思っていた。恥かしさより、リオの今の表情が気になって、視線だけを上げた。「リオ……」

リオは、自分の振る舞いを恥じているのか、悶絶していた。

「リオ、恥かしいならやらなくて良かったんだよ？」

「いえ、女性はこのいう風にされると喜ぶと聞いたので」

「誰から聞いたの、そんなこと」

喜ぶ女性がいらないとは否定できないが、この行為はいわゆるバカップルがするような行為だ。バカップルを否定するつもりはないが、私が特別それらに憧れているかと問われればノーかもしれない。

「メイヤに。あかりは嬉しくないですか？」

やっぱりリオだった。どこか抜けているというか、素直というか。メイヤが本当に私がそれを喜ぶかどうか知っていると思う。だからメイヤはからかったのだ。そして、それを実行したりオはまんまと騙されたのだ。

「そつだなあ、嬉しくなくもない……かな？」

「それは、嬉しいということですか？」

「あのね、嬉しいってよりも恥ずかしいって方が勝ってるかな。私にはちよつとハードルが高かったかも。でも、私が喜ぶんじゃないかって、その為にリオはしてくれたんじゃ？ それは凄く嬉しかった。リオに想われてるんだなって思えた」

恥かしくてもその手から食べさせて貰おうと思ったのは、そんなリオの気持ちが嬉しいと思ったからだ。そんなリオが可愛いと思つたからだ。

「私の気持ちは伝わっていませんか？ どうすれば伝わるでしょうか」

そんな風に真剣に悩んじゃう所が凄く可愛いと思う。真面目で不器用で、少しばかり要領が悪くて、それでも一生懸命なところが。

「伝わってるよ。うん、今、伝わってる。あのね、リオ。手を握ったり、抱きしめたり。言葉だってそうだし、態度でだって人の気持ちには伝わるよ」

私はリオの手を取って、手のひらにキスを落とした。そして、その手を自分の頬に押しつけた。

「伝わった？ 私の気持ち」

顔をほおずきのように赤らめて、ぶんぶんと頭を上下するリオを私は愛しい気持ちで見つめた。

他の人という時のリオは言わばクールガイ、けれど、私と二人の時のリオはまるで純な男の子みたいだ。年上とは思えないその愛らしさに私はやられた。

私はずっと精神年齢の高い落ち着いた大人な男性がタイプだと思っていた。けれど、実際好きになったのは見た目とは違う純情ボーイだったようだ。それを、可笑しく思うことはあっても、不快に感じることはない。

少し情けないリオの姿も全然気にならなかった。私が包み込んであげたいと思うほどだ。

「ふふっ、良かった。じゃあ、リオ。折角だから食べさせて」

少し甘えて見せると、リオはさらに頬を赤らめた。それでもいそ

いそとフオークを私の口に運ぶ。

「リオ、キスして」

今、そんなことを私が言ったら、リオは茹で上がって蒸発してしまいかもしれない。言ってみたいと悪戯心に火が付きそうだったが、ジェラルルが寝込んでいるのにあまりイチャイチャするのもどうかと思ったので止めておいた。

いつか、リオにキスして貰おう。自分からおねだりするのがいいと思う。いいムードの時じゃなく、突然というシチュエーションがいいと思う。リオがびっくりして動揺してしまったところで、チュツとするのだ。

いつか実行されるかもしれない計画を頭の中で思い描いて、くすりと笑った。

第19話

見上げた空があまりに青くて、とても遠くにあるはずのそれが手の届くほどに近くにあるような錯覚を感じて手を上げた。

誰もいないのを良いことに、庭園の芝生に横たわっていた。

私がこの非現実的にも感じられる世界に迷い込んでから一月以上、まもなくふた月が過ぎようとしていた。

少し考えたいことがあった私は、拗ねるジェラルルをメイヤに預け、この庭園に一人で来たのだ。

「あの夢はなんだったんだろう？」

誰に向けたわけでもないその問いは、誰に受け取られるわけでもなく、虚しく消えていった。

私は昨日、変な夢を見た。

どこからどこまで続いているのか判断できない、白い空間。手を伸ばせば白い壁に突き当たりそうでも、どこまでも続いてそうでもある広いのか狭いのか分からない不思議な空間。そこに存在するのは私だけ。

右を見ても左を見ても出口を見つけることが出来ないことに不安を感じる。

その白がいつか私に覆いかぶさり、引き込まれてしまうのではないかと思うといてもたつてもいられなくなった。

がむしゃらに走りだしてしまいたくなった。

「ここはあかりちゃんが不安になるようなところじゃないぞあ。安心してね」

背後に気配を感じずに声だけが聞こえたことに私は体を奮わせた。恐怖を感じながら振り返った。

だが、そこにいたのはあまりに軽そうな若い男であった。私と目が合うとぱちりとウィンクした。

「あなた誰？」

「あかりちゃんと会うのは初めてだったよねえ」

「なにが可笑しいのかけらけらと笑いながら、私の反応を見ている。そうね。あんたなんか知らないからね」

「無然と答えれば、そんな反応をする私が可笑しいのかとにかく笑いを堪える素振りもない。」

早くどこかに行ってくれないかな。

さっきまではこの空洞のような孤独に耐えられなかったというのに、今はあの不安すら恋しいと思ってしまうほどだ。

「あははっ、ごめんごめん。ちよつとからかい過ぎちゃったかなあ」
今まで意識したことはなかったけれど、初めて思い知った。

私は軽い男が嫌いなのだ。今まで気付かなかったのは、私が暗にそういう類の男を避けてきた結果だろう。

「で？ 私の質問に答える気あんの？」

「あーあ、すっかり嫌われちゃったねえ」

私ごときに嫌われたところで、痛くも痒くもないだろうに。

私が無言で睨み付けていると、肩をすくめて漸く話す気になったようだった。

「僕があかりちゃんをこの世界に導いた、と言ったら分かるかな？」

「まさかつ、あんたがあ魔法使いなのっ？」

そうだよお、と緊張感のない言葉を吐き出す。

誰が魔法使いという言葉とこの男を結び付けて考えられるだろうか。

「こんな軽そうで、ふざけた男を魔法使いだなんて。黒いローブだつて着てないし。」

「なんかの間違いだと言ってよ。イヤ、もうそんなのはどうでもいいことよ。どうしてあんたがここにいのよ。そもそもここはどこなの？」

「ここはね、あかりちゃんの夢の中だよ。なんで僕がここにいるかっていうと、あかりちゃんに会いたかったからさ」

語尾をだらしく伸ばすしゃべり方が不快で堪らない。ここに生卵があつたら、間違はなくおでこに叩きつけていただろうと思う。

そう思った途端に私の手の中に生卵が出現した。

この非現実感ほまさしく夢である。

私が卵を持った手を振り上げて、魔法使いの方へ直進すると、ちよつと狼狽えたようだった。

魔法使いの目の前に立つて、どすのきいた声でこう言った。

「覚悟しな」

さらに手を大きく振り上げると、魔法使いは反射的に目を閉じた。「バー力。本気でやるわけないじゃん。卵は食べ物なんだから、あんたのおでこでかち割るなんてもったいないことしないよ」

「冗談は止めてよ、あかりちゃん。ふふっ、でもあかりちゃんのと氣に入っちゃったなあ。ねえ、地球に戻るの止めてこっちにいてよ」

「やだよ。日本には兄ちゃんがいるんだから」

ただ一人の私の肉親を安心させてあげたい。けれど、もうすでに日本に帰ることを手放して喜べない私がいた。

ここにはリオとジェラルがいる。ここにもまた大切な存在が出来てしまったのだ。

「それなら、あかりちゃんのお兄さんをこっちに呼んじゃえばいいんじゃない？」

私の心を読んだのか、軽い感じでとんでもないことを事もなげに言う。

そんな簡単な話じゃない。兄ちゃんにだって日本に繋ぎ止められるたくさんの要素があるのだ。仕事とか友人、聞いたことはなかったけど、恋人だっているかもしれない。

私が、私のために兄ちゃんの人生を変えるわけにはいかない。

「じゃあ、聞いてみよう。あかりちゃんのお兄さんがこちらに来たといったら、それを止める権利はあかりちゃんにはないんだからね。ああ、そうしよう」

一人で納得したように何度も頷いた。私を完全に無視して。

「ダメだよ、絶対」

「どうして？」

だって兄ちゃんだもん。兄ちゃんだから、後先考えずに私に会いに来ちゃう。

笑顔で私に抱き付く兄ちゃんの姿が目には浮かぶ。

「それはあかりちゃんのお兄さんがそうしたいから、そうするんじゃない？ あかりちゃんには、それが馬鹿馬鹿しい選択に思えるかもしれないけど、お兄さんにはそれが最善の選択なのかもしれないでしょ？ あかりちゃんとお兄さんは別の人間なんだから、違う考えや想いがあるのは当たり前なんだよ。あかりちゃんの気持ちだけを押し付けたらダメだよ」

こんなにチャライ魔法使いなのに、なぜか私は夢の中で説教されている。

「あかりちゃんはさ、こんなふうにおチャラけてる僕が本当の僕だと思う？ 上辺だけで人を判断すると、そのうち痛い目にあうよ？ それじゃ、またね」

魔法使いは自分の言いたいことだけ告げて、私の制止など聞かずに忽然と姿を消した。

その瞬間に私は目を覚まし、それが夢だったことを知る。

「本当に兄ちゃんがこの世界に来てしまったらどうしよう？」

あの魔法使いは本物だったんだろうか。本物の魔法使いを目にしたことがない私に判別は出来ない。

「地球の女性はみなこんな無防備に身を投げだすのですか？」

「リオ。地球の女性だってしないかな。まれにいるかもしれないけどさ」

リオに覗き込まれて慌てて私は身を起こす。いまさらリオにいいカッコをしても仕方ないが、少しくらいはよく思われたい。

「じゃあ、あかりは少数派ですね？」

「もうむやみにしないから言わないで、お願い」

くすりと聞こえてリオを見れば、鮮やかにリオが微笑んでいた。クールに見えるだけに、そういう無防備な笑顔は人をひき付ける。

「分かりました。で、何がありました？」

私はそんなに分かりやすかっただろうか。待つでもなく、リオがさりげなく待ってくれている。リオは無理矢理聞き出そうとはしない。ちよつと距離をとって相手が口を開くまで優しい空間を作りながら待っていてくれるのだ。

「何があつたとかじゃないんだけど。……一つ聞いてもいい？ 魔法使いつてどんな感じの人？ リオは会ったんでしょう？」

「ええ。魔法使いは見るからに軽そうな若い男でしたよ。一見魔法使いには見えなかったです」

「金髪で青い目、背は高く、魔法使いらしい黒いローブなんか着てなくて、しゃべり方がだらしなかったりする？」

「なぜそれを？」

第20話

「なぜそれを？」

「リオ、ごめん。もう一つ質問させて。魔法使いは人の夢に入ることはできるかな、違う世界に行くことは出来るかな？」

リオは心底驚いているようだったが、私の真剣な瞳を見ると表情を固くした。

私は兄ちゃんがこの世界に来ることを望んでしまっているのかもしれない。自分の想いははかることができず、どう考えていいか戸惑っていた。

「あの魔法使いなら恐らく可能でしょう」
「そっか」

ならば兄ちゃんはこちらに来るだろう。そんな予感がしていた。

私は直感した。

イヤ、正確に言えば兄ちゃんの私を呼ぶ声を聞いた気がした。だから、兄ちゃんはこっちに來たのだと感じたのだ。

「リオ。私をあの部屋に案内してくれない？ 私たちが初めて会ったあの部屋に」

「おまえ、あそこに行つてどうするつもりだ？」

横からエロイが割つて入るが、私はそれを無視してリオを見つめた。

おやつの時間の一時であつた。

ジェラルとチェスは焼き菓子を頬張りながら、私たちの様子を傍観していた。その傍でメイヤが控えている。

「リオ」

「分かりました。あかり、行きましょう」

「ありがとう、リオ。メイヤ、ジェラをお願いしてもいい？」

メイヤは勿論だと言いたげに大きく頷いた。ジェラルが少し不

安げで不満げな表情を浮かべていたが、私の醸し出す雰囲気が普段と違うことを感じたのか、わがままを言うことはなかった。

リオと目を合わせ頷き合うと、部屋を後にした。

私たちの後ろをエロイがついてくる。何事か言っているようだが、私の耳には届かなかった。兄ちゃんのことしか私の頭になかった。確実に兄ちゃんは私と同じように扉を通ってくるのだろう。

体全体の血が踊るようにざわざわと疼いている。兄ちゃんと私、同じ血が二人を呼び寄せているように思えた。

私たちがその部屋に入った時、扉はまだ現われていなかった。

あの時は、あまり周りを気にする余裕もなかったが、この部屋は先日夢の中で見た白い空間に似ていた。

ここには今私たちが入って来た扉がある。そして、有限だ。そこが夢とは違うところだ。

「リオ。ここは一体何の部屋なの？」

「元々は物置として使っていた部屋でした。魔法使いより、地球との道を作るための部屋を、と要望があったのでこの部屋を提供したのです」

ふーん、と小さく頷いた。

「おいつ、なんでここに来たんだよっ」

「いたんだ、エロイ？」

ムツとしたのか私を鋭く睨み付けている。正直、エロイの相手をするゆとりは私にはない。絡んでくるなら早々に立ち去ってくれればいい。

「今は説明できない。ちょっと黙っててくれる？」

ゆとりのない自分を恥じるべきなのかもしれないが、今は出来そうになかった。

ふわりと温かい重みを頭の上を感じた。

「リオ」

見上げると、リオの笑顔が私の心をやんわりと温かくしてくれた。リオに魔法使いのこと、兄ちゃんがもしかしたらこの世界に来る

かもしれないことは話していない。だが、リオは察してくれている。察した上で、私を包み込んでくれる。

扉がそこに現われたのは、本当に突然の出来事だった。音もなく、じわりじわりと全貌を明らかにしていく。

私は何かに縋りつきたくて、リオの手を握り締めた。私を守ろうとするかのように握り返してくる。

私たち三人は扉を凝視していた。

私にはこの先の展開が予め予期できるが、両隣に立つ二人は、私が日本に戻ろうとしていると思っているんじゃないかと、急に思い至った。

リオを見上げると、苦しそうな表情を浮かべていた。

「違うよ、リオ。私は……」

私は全てを言い切ることが出来なかった。

扉が勢いよく開けられ、待っていた者が姿を現した。

私を見つけると標的を見つけたかのように直進してくる。

その猪のような姿に一瞬怯んだが、逃げる間もなく腕の中に包み込まれてしまった。

「灯里い。会いたかったよお」

腕の強さに気を失いそうになりながら、私は見ていた。扉がその姿を消していく様を。

「につ、兄ちゃんっ。扉が閉まっちゃう。帰れなくなるよっ?」

「いいに決まってる。俺は可愛い灯里の傍にずっといると決めている。灯里のいない世界など意味がない」

少し異常な発言かもしれないが、これがかつて知ったる兄ちゃんの姿なのだ。

「うん、分かったから。とにかく苦しいから放して」

二人が格闘している間に扉は完全に消失してしまった。名残惜しいと思うが、悲しいとは思えなかった。

「あかり、この方は兄上殿なのですか?」

「リオ。うん、私の兄ちゃん。あー、来ちゃったみたい」

驚いているようではあったが、どこかホッとしているようでもあった。やはり、私が日本に戻ると勘違いしていたのだろう。

「こんにちは。灯里の兄の光です。灯里がお世話になったようで、ありがとうございます」

兄ちゃんの挨拶は実に好感を持たれると日本でも言われていた。言葉というよりも、兄ちゃんが醸し出す柔らかい雰囲気が周りをも柔らかくしてしまうからだと思われる。

「はじめまして。私はブラウリオと申します。あかりからはリオと呼ばれています。ここでは何ですので、部屋を移りましょう」

「リオ。ジェラの部屋でいいでしょ？ あんまり遅いとジェラが心配するし、私も心配だもん」

ジェラルが兄ちゃんを見て、びっくりするのは予想できるが、私の兄ちゃんのだと説明すれば、大丈夫なような気がする。兄ちゃんは子供に好かれるタイプだし、子供の扱いもきつと私なんかより上手であろう。

「そうしましょう」

「灯里い。兄ちゃんがない間に恋人が出来たんだなあ。あんなに将来は兄ちゃんと結婚すると豪語していたのに。兄ちゃんは何だか寂しいぞっ」

私のことについては勘の鋭い兄ちゃんが、私とリオを見て気付かない筈はないと思っていたが、ほんの数分で見破られるとはなんともあっぱれなことである。

「兄ちゃん。私にだって恋人くらい出来るさ。兄ちゃんは喜んでくれると思ったのになあ。悲しいな……」

私が泣く真似をすると、嘘泣きしていた兄ちゃんが慌てて私を慰めにかかる。正直チョロいと思ってしまった。

「すまなかった、灯里。俺は灯里とリオを祝福するぞ。俺がどんな時でも味方になってやるっ。どんと任せなさい」

兄ちゃんに交際を認めて貰いました。

ほんの1分以内の出来事でした。

私と兄ちゃんのやり取りを見ていたリオは何だかひどく驚いていたが、そのうち羨ましそうな表情を浮かべ出した。

「リオ？」

「羨ましいです。とても仲が良いんですね」

それはリオが兄弟の仲の良さを羨んでいるのか、それとも私が他の誰かと仲が良さそうなのを羨んでいるのかどちらだろうか。私個人としては後者である方が嬉しいが、恐らく前者であろうと思われる。リオとエロイは正直あまり仲がよさそうには見えない。お互い一歩踏み込めない位置にいるような気がする。それは王位をめぐる確執がもしかしたらあるのかもしれない。第一王子であるリオではなく、第二王子であるエロイが第一王位継承権を有するあたりに関係が。それでも、お互いがお互いを嫌っているようには見えないので、修復は出来るのではないかと思う。

リオにはそんなに悲しそうな顔をしていては欲しくないから、私は二人の仲をどうにかできないかと思案していた。

第21話

珍しいものでも見るように不躰にぶつけられる視線を、兄ちゃんは真摯に受け止めていた。

この世界に來た時に、私のいでだちを見ていたリオやエロイ、メイヤは驚きはしなかったが、兄ちゃんを見てのジェラルルの驚きは大きなものだった。

「ジェラ、私の兄ちゃんだから怖くないよ」

警戒してメイヤの足に手を回し、隠れてちらちらと様子を窺うジェラルルのもとに兄ちゃんはずかすかと近寄り、ジェラルルの目の前にしゃがみ込んだ。

「俺は光。あかりの兄ちゃんだ。お前がジェラだな？ よろしくな、ジェラ」

ジェラルルの頭の上に大きな手を置くと、わしゃわしゃと掻き回してニカツと笑った。

ジェラルルはびくりと体を強張らせたが、私の様子を窺い、私が笑顔であることを確認すると顔を上げた。

「あありのにちゃ。よーちくつ」

「おおつ、偉いなジェラ」

兄ちゃんは声が大きいから、褒め言葉も大袈裟に聞こえる。でも、それが子供には嬉しいことのようなのである。私も何度も褒められているから分かる。兄ちゃんは褒め上手なのだ。

くすぐったそうに身を擦っていたジェラルルが、おずおずと兄ちゃんの服を掴んだ。

心を開いてくれたと感じた兄ちゃんは、ジェラルルを抱き上げた。急に抱き上げて内蔵が浮いた感覚を味わったのか、ジェラルルが奇声を上げている。

「さすが兄ちゃん」

「どんなもんだっ。よーし、ジェラ。今日から俺はお前の兄ちゃん

だぞ」

「あぁりのにちゃ、ジェラのにちゃ？」

「そつだぞお」

ジェラルが小首を傾げると、あまりの可愛らしさにやられたのか、兄ちゃんが頬擦りしている。それがくすぐったいのか、キヤツキヤツと声を上げる。

「兄ちゃん、とにかく座ろうよ」

「あぁ、ジェラの可愛さに翻弄されたぞ」

ジェラルを抱いたまま椅子に座り、ジェラルを膝の上に乗せた。

兄ちゃんの隣に私が腰掛け、向かい側にリオ、そのとなりにエロイが座った。

「光殿、それからあかり。一体何があつたか教えてくれませんか？」

まず、私から夢に出てきた魔法使いとのやり取りを話した。

いささか非現実的なことではあるが、魔法使いならやりかねないと、リオもエロイも納得しているようだった。

「兄ちゃんも魔法使いが夢に出てきたの？」

「イヤ、俺が魔法使いに会ったのはトイレの鏡の中だったよ。用を足して手を洗ってふと鏡を見たら、チャライ兄ちゃんがいるから驚いたよ。しかも会社でさ。他に誰もいなかったから良かったけどな」魔法使いは魂だけを地球に飛ばしたんだろうか？ 夢や鏡に自分の姿を映し出す。実体を地球に移すのは難しいのだろうか。

「魔法使いはなんて言ってたの？」

「ねえ、あかりちゃんに会いたい？ あかりちゃんはね、この世界とは異なる世界にいるんだよ。あなたにこの世界を捨てる覚悟があるなら、連れて行ってあげてもいいよ。どうするう？ てな」

「うわっ。そっくりでムカつく」

兄ちゃんの物まね混じりの語り口調は夢で会ったあのチャライ魔法使いにそっくりで私をイラつかせるのに十分だった。

「確かにそっくりですね」

「ああ、そつくり過ぎて殴りたくなるな」

「ねえ、兄ちゃん。本当にそう言ったの？」

ああ、と兄ちゃんが答えるのを見て、私は顔を歪めた。

「それだと、私たちは二度と日本に戻れないみたいな感じに聞こえるんだけど？」

「そういうことだろう？ 俺は会社を辞めてきたんだ」

待て待て、そんな話は聞いていないぞ。

もし兄ちゃんがこちらに来たとしても、次に魔法使いが来た時には、二人同時に日本に帰れるんだとばかり思っていた。

「じゃあ、兄ちゃんは一生ここで暮らす覚悟で来たって言うの？」

「部屋も解約してきたし、友人たちにも別れの挨拶をしてきた」

兄ちゃんは覚悟をして、準備周到でこちらに来たのかもしれないが、私は何も覚悟がないままこちらに来てしまったのだ。

「お父さんとお母さんのお墓は？」

「叔母さんに頼んできた」

叔母さんは親戚中の中で唯一、私たちを気に掛けてくれていた人たちだ。あの叔母さんなら、お墓参りもしてくれるだろう。

私のこの気持ちはどこに行くんだろう。感傷も何もないままここにきて、わけもわからぬままここにいる。兄ちゃんがここにいて、強い未練はない。ただ、故郷を完全に失ったような消失感がこりのように残っているのだ。

せめて、私がここで生きていく意味があれば、そういう感情も薄れるかもしれない。

「そうなんだ」

強い視線を感じ、目をあげるとリオのそれと出会った。私を案じてくれているのだろう。安心させるように微笑むことしか出来なかった。

自分が大丈夫であるのか、私自身が理解できていないのだ。

「えっと、リオ。俺をここにおいて欲しいんだ。俺に出来る仕事は何でもするからさ」

兄ちゃんは強い。

強くなければ、両親を失い私を養うことが出来なかったのだろう。兄ちゃんはまだまだ若かった。これから大学に行って、サークルに入って、遊んで、可愛い彼女を作って。楽しい時はこれから、という時だったのだ。

私の存在を鬱陶しい、憎らしいと思ったこともあったに違いない。どうして、いつも犠牲にするの？ 私のためにそんなに簡単に全てを投げ出さないでっ。

ぶつけたくても、ぶつけられない想いをまた今日も呑み込んだ。

「あかりの兄上殿ですので、住んでいただく分には何の問題もありません。ですが、しばらくは働かずにこの世界に慣れてみてはいかがでしょうか？」

「気遣いありがとうな。だが、俺は働いてないところ体が疼いて仕方ないんだ。仕事しながらこの世界にも慣れていきたいんだ。ダメか？」

「いいえ、光殿がそれでよろしいなら」

「兄ちゃんは器用だから何だって出来ると思うよ。料理は私より巧いし、腕もたつから近衛兵にだってなれるかもね」

兄ちゃんは幼い頃から何だって出来る優れた才能を持っていた。それを公にせず、ある程度手を抜いていたのを私は知っている。煽てはやされるのを好まないのだ。特別扱いを嫌う。

それに対して私は本当に不器用な子供だった。

ただ、兄ちゃんの深い愛の前には妬むことすら出来なかった。兄ちゃんが兄ちゃんだったから、私はひねくれずにここまで生きてこれたのだと思う。

「では、一度城内を見学しつつ興味のあるものには体験してみる、というのはどうでしょうか？」

「そうしてくれるとありがたい。なにからなにまでありがたいな、リオ」

「いいえ、あかりの兄上殿ですので」

珍しく私の前でないとこで頬を染めるリオ。とっても新鮮だが、他の人には見て欲しくないという独占欲が沸き上がり、私を居心地悪くさせた。

「おお、惚れられてんなあ、灯里」

ばしばしと私の背中を叩く兄ちゃん。頬が赤くなるどころか背中が赤くなってしまいそうだ。

「灯里は世界一可愛いだろう？ 俺の自慢の妹なんだ。分かっているだろうが、泣かせるようなことがあれば俺が黙っちゃいないからな」

幼い頃、大好きな人にフラれて泣いていた私を見て、私がいじめられたのだと思いこみ、その男の子を殴り飛ばしてしまった、という話は私たちを知る人たちには語り継がれる伝説のようなものになっていた。男の子はその後、私を見ると怖れ慄くようになってしまった。

その事件後、私は兄ちゃんの前では泣かないように心掛けていた。リオをそんな目に合わせたくはない。だから私は泣かない。

第22話

兄ちゃんがリオとエロイと共に城内見学をして帰った頃には、二人とも兄ちゃんとすっかりと仲良くなっていた。

万物にも好かれる絶対的な存在、それが兄ちゃんだ。同性からは憧れを抱かせ、異性からはとろけるような好意を向けさせる。

子供から大人まで、兄ちゃんを嫌いだという人に私はお目にかかったことがない。

私は本当に兄ちゃんと同じ血が通っているのかと、疑いたくもなる。高校生の時にたまたま目にした戸籍謄本には、きちんと血の繋がりがあることを示していて、漸く疑いを解いたのだ。

特にエロイが兄ちゃんに向ける眼差しは、崇拜に近いものがあり、私を呆れさせた。

兄ちゃんも兄ちゃんてエロイを弟のように扱うので、完全に図に乗っている。

「なんでお前がああ素晴らしいお方の妹なんだっ」

ジェラルルの部屋に入るや否や私に詰め寄るエロイを残念なものでも見るように眺めた。

単純バカだと思っていたが、ここまでバカだとは。

「さあね、そんなの知りやしないよ」

「本当にお前は生意気だな」

「あんたは単純で、短気でどうしようもないバカだね。兄妹が同じ人柄だったら気持ち悪いだろうがっ。あんな完璧な人間は一人いれば十分なんだよ」

私は兄ちゃんとは違う。兄ちゃんが兄ちゃんだけに、他人が私に求めるものは自然と高くなる。そして、実物の私を見ては落胆するのだ。そう、今のエロイがいい例だ。

それを責めるつもりはない。だってそれが事実なのだから。

「まあ、確かにそうだな」

「でしょ？ 特別な人間は稀少だからこそ特別なんだよ」

煩いエロイが納得したようなのを見て、気付かれないように小さく息を吐いた。

「兄ちゃん、ちょっとジエラ頼んでもいい？」

「いいぞ」

兄ちゃんは言わなくても分かってくれる。私がエロイのようなタイプをあしらう事を本当は苦手としていることを。

少し頭を冷やさないと、酷い態度を取ってしまいそうだ。

気分転換に散歩するに限る。

たまには一人で庭園を歩くのも良いかもしれない。いつも誰かいたから落ち着けなかった。それが、この世界に来た当初は救いであつたけれど、それに慣れてしまった今は少し一人の時間も欲しい。

庭園の中には小さな噴水があり、そこにはベンチがしつらえてある。ベンチに腰をかけ、空を見上げた。今日は少し雲が多い。雲が風に流され少しずつ形を変えていく様はいくら見ても飽きることはない。首は痛くなるけれども。

私はなんでここにいるんだろう。なんで私だったんだろう。

子守だつて、それ以外のことだつて兄ちゃんの方が上手くできる。それこそ兄ちゃんなら英雄にだつて救世主にだつてなれるだろう。

私が間違えて来てしまっただけで、兄ちゃんを喚ぶ予定だったんじゃないか。

私の居場所つてどこなんだろう。なんて私は宙ぶらりんなんだろう。

「あかり」

見上げていた顔を声のする方に向けた。

「リオ」

「隣に座つてもいいですか？」

「いいよ」

あんなに一人になりたいと思つていたのに、リオの顔を見たら、凄くホツとした。本当はリオに会いたかったのだと。

リオは私の隣に腰掛けると、私がしていたように空を見上げた。それに倣って私も空を見上げた。

「あかりは光殿が嫌いですか？」

隣に座るリオを窺い見たが、空を見たままこちらを見ることはなかった。

「ははっ、直球だね。……兄ちゃんのことは好きだよ。嫌いとか憎らしいかと思ったこともない。だけど、エロイみたいなタイプって日本でもたくさんいたんだよね。ああいうのは正直鬱陶しい。ほら、自分でも分かっていることを一々言われると気分が悪いでしょ？ そんな感じ。私のことなんて放っておいてくれればいいのね」

「私は、エロイを憎いと思ったことがあります」

リオがゆっくりと顔をおろし、私の瞳の奥を見つめた。

「それって……」

「私はエロイよりも劣っています。私には政治的な駆け引きをすることは出来ません。父上が私を見てがっかりし、エロイを見て満足そうにしているのを見ると、エロイが憎らしくてしかたなくなりました」

そうは言うものの、普段エロイといるときのリオからはそんな感情は見出だせない。

「今は大丈夫です。どう努力したところで人には向き不向きがあることを知っています。私が国王になれば、国が傾くのは目に見えています」

リオは噴水に視線を移してから、再び私を見据えた。

「なぜ、あかりがこの世界に喚ばれたか知っていますか？」

「ジェラの面倒を見る人が必要だったんでしょう？」

「それは建前です。実際は、父上が私を癒してくれる存在をこの世界に連れてきてくれるように魔法使いに頼んだんです。あ、誤解しないで下さい。私がそれを知ったのは、あかりを好きなのだと自覚したあとです。父上は私に負い目を感じていたようです。だから、

せめて私が穏やかに暮らせるためにあかりを喚んだんです。父上には、感謝しています。あかりがいてくれるおかげで私の心はとても静かです。でも、それと同時にドキドキもしていますけど」

私はリオを癒すためにここに来た……。

「私がここにいる意味はリオなの？」

「それは分かりません。ここへ喚ばれた理由は私だったかもしれませんが、その先の意味はあかり自身が決めるものです」

リオのために私が喚ばれた。それが今はとても嬉しいことのように思える。

「リオが私を必要としてくれるなら、私がここにいる意味はリオのためだと思いたい」

「必要ですよ、間違いない。私が光殿が現れる前の数日間、どれだけ苦しんだと思いますか？ 何事かを思い悩むあかりを見て、向こうに帰ってしまうのだと思いました。引き留めたくて、別れたくなくて、でも、あかりがそれで幸せになるのなら、と何度も言葉を呑み込みました。あかり、もうあなたを放したくない。その命枯れるまで私と共にいると言ってはくれませんか？」

リオの瞳を見つめていた私は、目を見開いたまま固まってしまった。今、語られた事実を私は頭の中で整理する必要があった。

これは……、これって、そういう意味だね？

「リオ、今のってプロポーズ？」

「はい。私の唯一の妃になってくれませんか？」

リオの傍にいたい。リオが私を必要としてくれているのなら、リオの傍に。

日本に帰れないとなった時、私なりに動揺した。もう二度と帰れないかもしれない私の故郷。故郷の風景をもう見ることが出来なくなるのは、そこに会いたい誰かがいなかったとしても辛いことだ。自分の体を構成する一部が抜け落ちたようなそんな気だつてする。けれど、リオの言葉を聞いて私の抜け落ちた何かが再び構成されようとしていることを知った。故郷にもう帰れないのなら、新しい

故郷を作ればいい。その故郷として私はこの国を選んだ。リオと共に過ごすこの国を。

この郷愁のような寂しさはすぐには消えないだろう。もしかしたら、一生消えないかもしれない。だが、隣りにリオがいればそんな寂しささえ消えてなくなる気がするのだ。

リオが私といて癒されると言ってくれているように、私もまたリオに癒されている。あの魔法使いは、お互いにとって癒しになる存在として二人を出会わせてくれたのかもしれない。

「私、リオのたった一人の女性になりたい。私だけを愛してくれませんか？」

「勿論です。あかりしか愛せません」

「私も、リオだけを愛します」

第23話

リオと私の婚約が正式に発表された。

リオのプロポーズを受けたあと、二人で国王に報告に行った。

国王は勿論喜んでくれたが、ちょっと変態チックに追いかけて来て、正直気味が悪かった。この人が父になるのが唯一の難点な気がする。

国王の執務室を出たあと、二人はジェラルルの部屋を目指した。

「あかり、手を繋いでも？」

恥ずかしがり屋のリオにしては珍しい。とくに廊下は人の通りが激しいのだ。すぐに噂として流れるだろう。

「いいけど、恥ずかしいんじゃない？」

「恥ずかしいです。けれど、私のあかりを見せびらかしたいのです」
にこりとリオの微笑みを向けられ、私は落ちた。

普段表情の乏しいリオの笑顔は国宝級に値すると考えている。

「じゃあ、私もリオを見せびらかすね」

リオの手を取り、笑顔を向けた。リオが啞然と私を見つめるので、首をかしげてリオを覗き込んだ。

「どうかした？」

「いえ、あかりの笑顔に見惚れていたんです」

それは私の台詞だ。恥ずかしそうに何を言ってるんだ。きっと傍から見れば私たちは甘すぎるオーラを出しまくっていただろう。

「何言ってるの」

「あかりは自分の魅力に気付いていないのですね。城の中であかりにあわよくばお近付きになりたいと考えている男がどれだけいるか知らないでしょう？ 私がどれだけ焦っていたと思っっているんですか。私はやっとかかりを手に入れた。これは私の恋敵どもに牽制のつもりなんですから」

リオは繋いだ手を持ち上げて満足そうに微笑んだ。

少し前まで気分が悪くて、一人になりたいと思っていたのが嘘のように晴れやかだった。そして、ちょっぴりこしょばゆい。

今まで感じたことのないそんな感覚が幸せなのだと感じた。

引き締めようと思っても、口元が勝手に弛んでしまう。

「ねえ、リオ。リオの婚約者として私で相応しいのかな？ ほら、

リオは王族なわけでしょ。身分相応な女性、ご令嬢とかじゃなくていいの？」

「私の相手は好きに決めていいと父上から言われていましたから。

私に王位を継がせない代わりに、何でも自由にさせてもらっています。そこまで気を遣う必要もないんですけどね。でも、あかりを心置きなく選ぶことが出来ました。まあ、私に王位継承権があったとしても、あかりならば反対はされなかったと思いますよ。父上はあかりが大好きですから」

そう、それが不思議で仕方がないのだ。

国王とはあんまり会わないし、まともに話したこともない。何故ゆえにあんなに好かれているんだろう。

「なんであんなに好かれちゃったのかな？」

「父上には、魂の色が見えるんです。あかりの魂の色は今まで見た中で一番美しいのだそうですよ」

魂の色……。オーラみたいなものだろうか。

なににせよ、国王は私の魂の色を見て好いてくれたということか。

「それも魔法の一つなの？」

「ええ、そのようですね」

「リオにも魔法が使える？」

「はい。私は風を操ることができますが、あまり得意ではありませんせん」

魔法、という言葉聞いてワクワクしてしまうのは、幼い頃に大好きだったアニメの影響かもしれない。

ほつきに跨ってみたり、棒切れを振り回してでたらめな呪文をと

なえたりした。

「いいなあ、魔法」

「あかりも使えると思います。あかりから魔力を感じますから」
魔力という言葉が出てきたことに驚いた。驚くことでもないのだ
ろうが、私には未知の世界すぎてついていけない。

「私に魔力があるって分かるの？」

「はい。あかりの力は強いですから、練習すれば上手になると思
います。私で良ければ教えますよ？」

「うん、お願い」

幼い頃に夢見ていた魔法が使えるかもしれないとあって、私のテ
ンションは急上昇だった。

「ありがと、リオっ」

あまりの興奮にリオに抱き付いたあと、ここが公衆の面前である
ことに思い至る。

「ごめん、リオっ」

リオの肩に顔を埋め、小さな声でそう言った。

周りが騒ついている。それは、間違いなく私がした行為のせい
である。多くの視線を背中に感じる。ということは、リオにいたつて
はみんなに顔を見られているということだ。

うつっ、ごめんリオ。でも、恥ずかしくて顔を上げられない。

リオが小さく笑んだ声を聞いた気がする。気のせいかと考えてい
ると、頭に優しい手が乗せられた。

その行為により、さらに周りが騒めいた。

「煽つてどうすんのよお。余計に顔上げられなくなったじゃない」

「わざとです。あかりともう少しこうしていたかったので。すみま
せん。私の我が儘です」

くっ、可愛いな。

公衆の面前と分かっているけど、キスしてしまいたくなる。もう、
こうなったらしてしまっていていいんじゃないか。

と思うほどにリオが可愛くて仕方ない。

「そんな可愛いこというと、ここで襲っちゃうぞ？」

「いいですよ。是非して下さい」

狼狽えると思っていたリオの逆襲に動揺させられた。

「してくれないなら、私が」

リオに体を離され、けれども顔が近付いてくる。目を睜り慌てる私、悲鳴にも似た歓声が上がる。

いよいよリオの顔が間近に迫ったとき、私は強く瞳を閉じた。

リオの唇を感じたのは、私の頬で、びっくりとほんの少しのがっかりを感じながら目を開くと、その途端に唇を塞がれた。

「襲っちゃいました」

子供っぽく微笑むリオが憎らしいやら可愛らしいやらで、私は完全に彼の魅力にハマってしまったのが分かる。

「ズルい。私が襲おうとしていたのに」

公衆の面前だというのも忘れて、襲う襲わないなどと話している私たちを、人々は半ば呆れて、半ば悔しそうに、半ば憧れの眼差しで見ていることを私は気付いていなかった。

「おいっ、お前たちはこんな所で何してんだ」

私たちの言わばイチャイチャムードを壊したのは、エロイだった。二人向き合って至近距離で顔を近づけて話している私とリオの真横に仁王立ちで突如現れた。イヤ、厳密に言えば二人が気付くまでそこに立っていたのだが、あまりに二人の世界を作り上げるものだから、我慢しきれなくなったエロイが口を挟んだという形なのだ。

「何って、お話？」

「こんな人の多いところで、そんなにくっついて、何を話してたって言うんだ？」

「あかりが私を襲いたかったというものですから、じゃあ、ここで襲ってくれていいですよ？」といった話でしょうか」

「ちよっ、リオ。何ではらしちゃうのよっ。恥かしいでしょうが」

それをきに再び小競り合いを始めようとする私たちをエロイは無理矢理止めに入った。

「お前がいなくて、ジェラルが拗ねてるぞ。早く行ってやった方がいいんじゃないのか？」

「あつ、そつか。行かなきゃ」

リオが自然に私の手を取り、エロイを置いて歩き出した。こつそりと見上げると、丁度リオも私を見下ろしている所で、自然と二人の間に微笑みが生まれる。

「ジェラにも報告しないといけないし、兄ちゃんにも報告しないと喜んでくれるかな？」

「喜んでくれるといいですね。そういえば、光殿は本当に素晴らしい腕の持ち主ですね。早速近衛兵の隊長から入隊要請が出ていました」

「ああ、兄ちゃんらしいよ。隊長を骨抜きにしちゃったんでしょ？」
楽しそうに微笑み言葉を交わし合う私たち二人を、少し後ろを寂しそうに歩くエロイがいることにこの時私は気付くはずもなかった。

第23話（後書き）

こんにちは。いつもありがとうございます。

一応、最後まで書き上げました。45話完結予定です。

今後は、これまで通り平日1話ずつ更新しながら、次のお話の構想を練って行きたいと思います。

第24話

部屋に入った途端にジェラルルが激しい頭突きをお見舞いした。

「あありおちよい。ジェラ、さみしい、ヤッ」

兄ちゃんやメイヤがいてくれても、私を必要としてくれているジェラルルに母性本能をくすぐられる。

ジェラルルは実質的には私の子ではないけれど、もう目に入れても痛くないと思えるほど愛しい存在だ。

「ごめんね、ジェラ。待たせちゃったね」

小さな体を腕の中に包み込み、ぐずぐずと鼻を吸るジェラルルの頭を撫でて落ち着かせた。

しばらく続けていたら、泣き疲れたのかジェラルルは寝てしまった。

ジェラルルをベッドに寝かしてから、テーブルに集まる面々にお茶を振る舞った。

ここには、私の他にリオ、兄ちゃん、エロイ、メイヤ、そして私の頭の上にチェスがいた。チェスは私の頭をベッドにして昼寝をするつもりなのか、すぐに目を閉じた。

初めはジェラルルと私だけで、暗闇に支配されていた空間も、今では明るさと笑い声で溢れていた。

私がフツと微笑めば、リオが私にいち早く反応した。

「あかり。何が可笑しいのですか？」

「うん。私が初めてこの部屋に入ったとき、ジェラをお化けだと思ったんだよね。光が差さない暗闇で一人佇んだ。その頃を思い出すと、ジェラも人間らしくなったなって」

本当に最近のジェラルルは目覚ましい進歩を遂げた。痩せこけていた体は、よく食べるようになり年相応の体型にまでなってきた。人形のように表情がなかったのが嘘のように今ではコロコロと表情を変える。言葉を発することが出来なかったのが嘘のように今では

一日中その声を聞くことができる。

「あかりがこの世界に来てくれたお陰です」

「そんな……、でもそうだとしたら嬉しいな」

俯いてそう呟くと、隣に座っていた兄ちゃんが頭をくしゃくしゃと掻き混ぜた。これは兄ちゃんが私を褒めるときにする仕草だ。言葉がなくても、その大きな手の温もりが私を労っていた。

「兄ちゃんは近衛兵に入るの？」

気恥ずかしさから話題を変えることにした。

「うーん、入るかどうかは分からないけど、訓練に出てみようと思ってるよ。俺に一番合ってるかもしれないが、剣を扱ったことがないからなあ」

「光殿は体術では近衛兵には負けないっ。きっと剣術だってすぐに会得されるさ」

勢い込んで発言したのは、兄ちゃんを崇拜しているエロイだった。まあ、いいんだけど。興奮するのはいいんだけどね、微妙に唾飛んでんだよね。勘弁して。

「兄ちゃんはどう思ってるの？」

「ああ、俺が近衛に入ったら守るのは当然王だろう？俺としてはあかりを守りたいが、自分で守る相手は決められないんだろう？」

「基本的に近衛兵は王族を守る為に存在するものですから、それは難しいかもしれませんね。国王かエロイの周囲を守ることになるかと」

私みたいななんの肩書きもない人間に専属の兵がつくことはない。命を狙われるほどの要人ではないのだから。

「なんだつまんねえな。せつかならあかりの傍でできる仕事がないぜ」

国王を守る仕事をあつさりとつまらないと言い切る兄ちゃんに呆れた溜め息をついた。

「光殿、突然ですが私はあかりを妃に迎えたいのです」

「なにっ。あかり、結婚するのか？こんな可愛いらしいんだ、男

どもは放っておかないとは思ったが、こんなに早く嫁に出すことになるとは……」

兄ちゃんがテーブルに大袈裟に嘆き、突っ伏した。

一般的に言うシスコンの類に入る兄ちゃんが、大袈裟に振る舞うだろうことは分かっている。

そして、

「よしつ、世界一幸せにしないと承知しないぞっ」

こうと決めたら潔いということ。

頭を突然がばりとあげ、どすが効いた声でリオを脅す。

「はい。世界一幸せにします」

兄ちゃんの想いを真摯に受けとめるリオに満足したように鼻を鳴らした。

「ふんっ。ならいい」

「ありがとう。兄ちゃん」

「それで光殿、話を戻しますが、私個人があなたを雇いたいです。あかりとジェラルルの護衛として。いかがでしょうか？」

リオと兄ちゃんを交互に窺った。

「それは、俺が軍には所属せずに一個人としてリオと契約するということか？」

「はい」

「気に入った。その話乗った。だが、お前と契約するのは今じゃない。まだ俺は人を守るほど剣の扱いが達者じゃない。軍の訓練に参加してもいいか？ お前たちが結婚するまでにこの国一の腕前になってやる。契約するのはそんな時だ」

「軍の訓練に参加するのは、兵の刺激になりますので問題ありませんし、契約についても光殿の希望どおりで構いません」

方向性を見いだした兄ちゃんは満足気に微笑んだ。私としても、兄ちゃんが守ってくれるなら何も怖いことはない。

未来がとても明るいもののように思えた。

ぼんやりと私を見ていたジェラールは、突然泣き出した。

ジェラールが寝起きで泣きだすことはあまりない。よほど嫌な夢でも見たのだろう。

真っ赤な顔をして、大粒の涙を流すジェラールを抱き上げ、ポンポンと背中を叩いた。ヒックヒックとしゃくり上げ、私の腕をしつかりと掴んだ。爪が腕に食い込み痛みを感じたが、ジェラールを落ち着かせるほうが最優先だ。

「二人でお散歩に行こうか？」

泣きじゃくりながらも私の声はすっかり耳に入るらしく、こくりと頷いた。

メイヤにかつらを被せてもらいジェラールを抱っこしたまま庭園へと向かった。

最近のジェラールの周りでは変化が目まぐるしかった。あまりに急に色んなことが変わっていくので、小さな体では対応しきれなかったのかもしれない。私も最近は兄ちゃんのことなんかがあって、ジェラールをよく見てあげられなかった。

私がつとしっかりしていれば、と自分を強く責めた。

「ジェラは今の生活嫌い？ 私がいて兄ちゃんがいて、リオやエロイが遊びに来てくれる生活。イヤ？」

ぶるぶると振り子人形のように頭を振る。

今の生活がジェラールのストレスになるなら、考えものだ。そうではない、と言ってくれてホッとしている。

「良かった。ちょっと安心した」

私がジェラールくらいの歳の頃のことなど、断片的にしか思い出せない。幼稚園に入っただけで、初めて知らない子たちの中にぽいといれられて呆気に取られていた。それでも、しばらくすればその世界は私の日常になった。ジェラールも今のこの生活が日常になる時が来るだろうと思った。

「ジェラ、楽しいことはこれから一杯あるよ。私と一緒に色んなことをしようね。お勉強もするけどね」

「たのしこと？ いっぱい？ べんきよもたのし？」

「楽しいこと一杯だよ。勉強はそうだな、楽しい時もあるし大変な時もあるよ。だけど、きっと将来役に立つよ」

「あぁりもいっしょ？」

「うん、そうだよ。一緒に色んなことするよ」

「じゃあ、しゅる」

ジェラルルの涙は消え、好奇心に溢れた瞳はキラキラと輝いていた。

子育てなんてしたことのない私だけど、親にはない、恐らく同じ目線に立って考えることが出来ると思うのだ。ジェラルルの気持ちを考えながら、どんな風に成長していくか、これからが楽しみだ。

とんでもない男に成長したら困るので、色んな人に子育てのコツだけは教えて貰っておいた方がいいかもしれない。その上で、自分なりの子育て法を考えていこう。

きっといい男に育ってくれると、期待しすぎず期待しよう。

第25話

「めっ」

頬を膨らませ、頑なに頭を縦に振ろうとしないジェラルルに私はどうしようかと、途方に暮れていた。

「どうしてダメなの？ ジェラはリオが好きでしょ？」

ジェラルルの気持ちが落ち着いて、普段と変わらない状態へと落ち着いたところを見計らって、リオとの結婚の話をしたのだ。ところが、駄目の一点張りなのだ。

「どうしてかなあ。ジェラにお祝いして貰えないと悲しいな……」

「あーり、かなしらめ。リオとけこらめっ。あーりはジェラのっ」

（あかり、悲しいダメ。リオと結婚ダメっ。あかりはジェラのっ）

ジェラルルは私をリオに取られると思ったのだろう。確かにリオの嫁になるということは、取られると言うことになり得るのかもしれない。

「リオと結婚しても、ジェラといつも一緒にいるよ。大丈夫だよ？」

「らーめっ。ジェラ、あーりとけこしゆるのっ」（ダメっ。ジェラ、あかりと結婚するのっ）

「本当？ じゃあ、ジェラのお嫁さんにして貰おうかな。でも、まだジェラは結婚できる年じゃないから、大人になったらね？」

こんなラブリーな存在にプロポーズされて、断れるわけもない。

この時の私は軽い気持ちでそう言った。大人になったらそんな約束も忘れてしまっだろうと、思ったからにすぎない。

「やくしよく。あーり、ジェラのっ。だれちよもけこしゆるめっよ。わかった？」（約束。あかり、ジェラのっ。誰とも結婚するダメよ。分かった？）

今は私を中心に回っているジェラルルであるが、もう二、三年すれば視野が広がって私から巣立っていくのだろう。いわば私はそれまでの繋ぎに過ぎないだろう。

「うん。約束するよ」

ジェラルルが本当に私とリオの結婚を認めてくれるまで、結婚はしない。ジェラルルには祝福してもらいたい。

リオならきつと分かってくれるだろう。

ジェラルルと部屋に戻り、夕食を作るために再び部屋を出た。

前までは、私が料理の支度をしている時間はジェラルルを一人にしなければならなかったが、今はメイヤがいてくれるから助かっている。

「あかりっ。おめでとう。坊っちゃんと婚約したんだってね。私は嬉しいよ」

調理場に入った途端にノアンさんに抱き締められた。豊富な胸を押し付けられてもがいているところを、他の調理師に助けられた。

「ありがとうございます。ノアンさん」

「幸せになるんだよ。きつと二人なら幸せになれるさ」

ノアンさんの胸からは解放されたが、今度は女性にしては大きくて肉付きのいい手で、バシバシと背中を叩かれる。

「はっはい。ありがとうございます」

興奮したノアンさんには周囲を気配ることができないようで、仲間の調理師たちが、またかと言いたげに渴いた笑いを浮かべている。どうにかノアンさんの攻撃から逃がれて、持ち場に避難した。嬉しく思ってくれるのはありがたいが、度がすぎている。恐らく私の背中には手形が浮かび上がっているかもしれない。

夕食の支度がもう終わるというタイミングで、リオが姿を現し、私と同じノアンさんの洗礼を受けていた。

近頃は夕食を供にするメンバーが増えたおかげで一人で運ばなくともよくなった。頼んだわけではないが、それを見越してリオが手伝いにきてくれるのだ。

私よりも激しい洗礼を潜り抜けたリオと連れ立って廊下を歩く。あちこちから祝福の聲がかけられ、それらが私の心を温かくして

くれた。

「あのね、リオ。ジェラが反対しているの、私たちの結婚。私が結婚するのはジェラなんだって。ふふっ、可愛いよね。嬉しいけど、そういう気持ちって視野が広がれば、自然と他に向くでしょ？ だから……」

「そうですね。ジェラルが祝福してくれるまで待ちましょう」

リオはどこまでも優しく、あまりに優しくすぎて、私は我が儘になっ
てしまいそうだ。

「ありがとう。リオ」

「いいえ。愛しい人の願いを聞き入れるのは男の本望ですから」
にこりと微笑んだリオを私の方こそ愛おしいと思うのだ。

正直、結婚は今すぐじゃなくてもいい。二十歳になったばかりの私には、結婚はまだ遠い先の話だと思っていたから。

誰かと添い遂げる覚悟も恐らく出来ていない。今の私では、早い
と何かが告げている気がした。

「あ、兄ちゃんっ」

前を歩く兄ちゃんの背中に声をかけると、振り返って右手を上げ
た。

「持つぞ、灯里」

「ありがとう。兄ちゃんは訓練に参加してきたの？」

「ああ、軽くな」

兄ちゃんが近付いてくると、ほんのりと汗の匂いがした。その匂
いは全く不快ではなく、私にとっては兄ちゃんそのもので、懐かし
くもあり落ち着くものなのだ。

幼い頃の夏休みには、大汗をかきながら兄ちゃんとくっ付いて昼
寝をしていた。兄ちゃんの汗の匂いが私を安心させ、すぐに眠りに
つくことが出来た。そういえば私は、夜も兄ちゃんが傍にいてくれ
なければ寝れない子供だった。

「ジェラがね、結婚に反対だって」

「ああ、ジェラはあかりが大好きだからな。取られると思ったんだ

ろう。それでどうするんだ？」

「うん。ジエラが納得してくれるまでは、結婚はしない」

兄ちゃんと私の会話をリオは涼しげな表情で見ていた。

「リオはそれでいいのか？」

「はい。別に構いません。あかりが私の傍にいてくれるのであれば、形にこだわるつもりはありませんので」

「灯里の我が儘に付き合ってくれて悪いな。ありがとな、リオ。ジエラにとって灯里は初めて心を許した存在だから特別なんだろう。ジエラの気持ちも分からなくもないしな。昔は灯里も俺のお嫁さんになると言ってくれていたのになあ」

遠い目で空を見つめる兄ちゃんは、幼い頃の私を思い出しているのだろう。

幼い頃の私にとって、兄ちゃんは絶対だった。大好きで大好きでいつも後を付いて回って。年齢差があるので、鬱陶しかっただろうに、兄ちゃんはいつでも私の相手をしてくれた。同年代の友達と全力で遊びたかっただろうに、兄ちゃんの一番は私だった。

「そうだよねえ。兄ちゃんが私の兄ちゃんじゃなかったら、結婚してたんだろうけどねえ。残念だったね」

「全くだ。血の繋がらない兄弟だった、なんてことになったら、俺は間違いなく灯里を嫁に貰う」

「兄ちゃん、それ本気じゃないよね？」

「本気だが、それが何か？」

イヤ、本気過ぎてちよつと怖かったというか……。リオが少し不穏な雰囲気醸し出していますし。

「リオ、私たちは真正銘血の繋がった兄弟だから何の問題もないし、兄ちゃんのこれはある意味冗談みたいなものだから本気にしないで」

「良かったです。光殿がライバルですと、なかなか手強そうですから。安心しました」

「何だリオ、俺に勝てないなら娘は嫁にやらないぞっ」

「娘じゃないでしょがっ」

「いいか、灯里。父さんと母さんがいない今、俺にとって灯里は妹であり、娘でもあるんだ。半端な男に嫁にはやらないぞ、俺は」

「いくら手強そうでも、光殿に負けるつもりはありませんので」

「泣かせたら承知しないぞ。灯里を悲しい目にあわせたら、その命ないと思え」

その言葉は、私とリオの結婚が決まってから何度となく口にされた言葉だ。

「はい。肝に銘じておきます」

男二人の会話についていけなくなった私は、もう勝手にやってと他に意識を向けた。周囲の視線がリオと兄ちゃんに向けられている。兄ちゃんの声がでかいというのも一因としてあるが、この二人人目を惹く容姿をしているからなあ。

この二人を置いて、こっそり足早にその場を後にした。

第26話

ジェラルルの成長は日々目まぐるしい。

舌つたらずだったしゃべり方も日に日になれを潜め、言葉で感情を表現することも出来るようになって来ていた。

私が来てから兄ちゃんが姿を現すまで2ヶ月、兄ちゃんが姿を現してからゆづに3ヶ月はたっていただろうと思う。日本なら今頃は夏であろう。

この世界でも夏の日本と同じような気候であるようだ。毎日毎日茹だるような暑さは私の体力を消耗させていた。

「ジェラ、暑いねえ。アイス食べたい」

「あついねえ。あいしゅたべたいねえ」

ジェラルルの体の成長も目まぐるしい。三歳児であるはずなのに、小学生くらいの大きさはあるように思える。不思議と日に日に成長していく姿を私は見ていることしか出来なかった。

ああ、それにしても暑い。日本の夏もうだるような暑さだが、この夏も相当なものだ。

「よしっ、アイスを作ろう。ジェラも手伝ってくれる？」

「うん。ジェラもてちゅだう」

ジェラにかつらを被せ、部屋を出る。出掛けにチェスもついでこようとしたが、手でせいした。

「調理場にチェスは入れないの。チェスの分も作ってくるからお留守番してて」

キツキツと不満げに喚いていたが、自分の分もあるのだと分かったのか急に大人しくなった。

実を言えば、ジェラルルを調理場に連れて行くのは初めてだ。調理場には、子供にとって危険なものが溢れている。今日、ジェラルルの入室を許可したのは、時間帯が食事時を過ぎているからだ。各人が入り乱れるように動いている食事時は、とてもとても入室させ

られないが、その忙しさが一段落ついた今なら、調理場は閑散としている。みんな思い思いの休憩をとっている時間だ。

「ジェラ、調理場のものを勝手に触ったらダメだからね。いい？ 約束だよ」

人がいないとはいえ、好奇心で出来ている子供にとって調理場は魅惑の場所なのだ。たなを開けて包丁を出してきたら、シャレにならない。

「やくそく。ジェラ、いい子だからやくそくまもる」

純粋な瞳がキラキラと輝いて、私の瞳を貫く。

「うん。いい子ね」

頭を撫でるのを待っているジェラルの希望を応えてやる。目を細めて喜ぶジェラルを見てみると、こちらまで温かい気持ちになる。

「おや、今日は珍しいお客さんだね」

調理場に入ると、ノアンさんが一人お茶を飲んでいるところだった。

「ノアンさんだよ。挨拶してごらん」

「こんにちは。ジェラはジェラだよ」

調理場の人々はジェラルの存在を知っているが、実際に見たことはない。ノアンさんは、私が連れている子どもはジェラルしかないを知っているの、自己紹介しなくとも分かっているだろう。

「こんにちは。ジェラ。今日はどうしたんだい？」

「きょうはね、あかりとアイシュちゅくるの」

ストツの滑舌が悪くて、それがなんとも可愛らしい。その想いはノアンさんも同じようで、孫を見ているようなとろけるような笑顔を浮かべていた。

「ジェラもおてちゅだいしゅるんだよ」

「そう。偉いのねえ」

褒められたのが嬉しいのか、恥かしいのか、私の足にしがみつい

て顔を隠してしまった。私以外の人に褒められることに慣れていないので、照れ臭いのだろう。だが、ノアンさんには興味があるのかちらちらと窺っている。

ノアンさんに頭を下げると、ジェラルルを足にくつつけたまま、私の持ち場に引き摺って行く。ずりずり引き摺られるのが楽しいのか、キャツキャと高い声を上げていた。

「ジェラ、降りないとお手伝い出来ないよ？」

「おりる。おてつだいしゅる」

パツと素早く離れたジェラルルは私の耳がおかしくなりそうなほど大きな声を上げた。

「よし、じゃあやりますか。初めに手をきれいに洗ってください」

ジェラルルを抱き上げると、自ら手をごしごしと洗った。背の高ささえもう少しあれば、一人でなんでも出来てしまうだろう。

「では、始めましょう。ボールに卵を割って黄身と白身に分けまーす」

生クリーム（もどき）と砂糖を用意して、それぞれボールに入れてひたすら角が立つまで泡立てる地道な作業。

明日、腕が筋肉痛になるのは確定でしょう。

ジェラルルも微力ながら一生懸命にかき混ぜている。時折何処かに飛んでいく生クリームを私は見なかったことにする。

「まあ、あかり。地道な作業してんだね。ハンドミキサーならあるんだよ」

私の頭の中で、この世界は中世ヨーロッパと位置付けている為、そんな画期的な機械はないもんだと思いこんでいた。

あるなら、早く行ってよノアンさん。

私とジェラルルのこれまでの努力を水の泡にしたノアンさんの一言に、打ちひしがれている私にジェラルルはキョトンとした目を向けた。

「そのハンドミキサーをお借り出来ますか？」

気を取り直してハンドミキサーで泡だてていくと、早いことなん

のつて、今までの行為が嘘のような速さに少しだけ涙が出そうになった。

「全部を混ぜ合わせたらべらで切るように混ぜる」

ジェラルルの手に添えて共同作業。ジェラルルは一人でやりたくて私の手を迷惑そうにしている。そんなジェラルルの気持ちにくんで一人でやらせてみる。案外うまくやってしまうもんだ。

ジェラルルの手によって混ぜられたそれを容器にいれて冷凍庫にいった。

「これで、しばらくたったらアイスクリームになるからね」

「あいしゅいちゅたべられる？」

「うーん。どれくらいで固まるかなあ。夕食の後のデザートにしようか？」

「でざーと？」

「そう、デザート」

すぐに食べられると思っていたジェラルルは不服な表情を浮かべていたが、夕食のデザートとして自ら作ったアイスクリームを食せると聞くと、パツと明るい表情を浮かべた。まだまだ単純なお年頃です。

調理場を片づけながら、ジェラルルに問い掛けた。

「これから兄ちゃんとこに飲み物届けに行くけど、ジェラも行く？」

「にいちゃんとこいく」

この暑い中、兄ちゃんは訓練に勤しんでいた。毎日毎日飽きることなく続けられる訓練で、兄ちゃんの体は逞しく進化をつづけている。剣の腕もめきめき磨き、生半可な相手では太刀打ちできないのだと聞く。

兄ちゃんと一緒に訓練をしているだろう（巻き込まれているであろう）兵たちの分もと大きな水筒を何個かとちよつとしたおやつを持って調理場を後にした。ノアンさんが名残惜しそうにジェラルルに手を振っている姿を見て、またジェラルルを連れて来ようと思うのだった。

兄ちゃんがいる訓練場には、沢山の人がいるが、今現在立っているのはほんの数名程度だった。後の大部分は地面にのしている状態である。

「差し入れ持つて来ましたよ」

声をかけると、地面にのしていたはずの人々が我先にと近付いてくる。その勢いに恐れをなしたジェラルは私の後ろに怯えたように隠れてしまった。

そんな様子を兄ちゃんが呆れ顔で眺めていた。

「いつも悪いな、灯里。今日はジェラも一緒か？」

ジェラルに視線を巡らせ、そう言うとかくれんぼしているジェラルを覗き込んだ。兄ちゃんだと分かるジェラルもひょっこりと出て来て、両手を上げてだっこをねだった。

ここには毎日差し入れを届けるようにしている。

「あかり殿。いつもありがとうございます。こんな方が嫁に来てくれたらなっていつも話しているんですよ」

一兵士がそんなことを言うてくれて、それが社交辞令だと分かっている私は笑顔でお礼を述べた。

「ダメよ。あかりはジェラのおよめさんになるのっ」

社交辞令だと分かっているお方が一人いた。その真剣な叫びにその場がどつと沸いたのは言うまでもない。

第27話

私にとつての兄ちゃんのように、ジェラルルにとつての特別な存在は私だ。

その想いは時に私を戸惑わせるほどだ。

実年齢は三歳であるのに、体の方はすでに姉のディアナに追いついてしまいうさだ。

その急激とも言える体の変化が私には不思議で、リオに一度聞いてみたことがあるが、

「不思議ですね」

と、にっこり微笑んでいたがその瞳は何かを隠していた。リオは、というより王はまだ何かを隠しているのだ。それ以上何かを聞ける雰囲気ではなかったため、深入りはしなかった。

不思議に満ちたジェラルルの体と私への執着は成長していくばかりだ。

近頃のジェラルルは、私の隙についてはキスをする。頬やおでこではない、唇にだ。

私のこの世界でのファーストキスはジェラルルなのだ。そもそも、いまだにリオと唇を交わしたことはない。それもどうかと思うが、照れ屋なりオなら仕方ないのかと、ゆっくり構えることにしている。そんなことより、ジェラルルだ。いくら子供だといえ、キスし過ぎなのではないか。というか、私の隙が有りすぎ？

今日も今日とて、公衆の面前でぶちゅつとされました。というのも、兄ちゃんや兵士の皆さんへ差し入れしにジェラルルと共に訓練所に来たわけだが、兵士の一人が余計なことを口走ったのが原因だと思われる。

私をお嫁にしたい、なんていう見え見えの社交辞令なのだが、まだまだ幼いジェラルルにはそれが分からなかったのだ。

「ダメよ。あかりはジェラのおよめさんなのっ」

そう公言したあと、ぶちゅつとされたわけだ。

兵士たちは面白がつてやんややんやするは（表向き仲良し兄弟と思われている）、それをバカにされたと思ったジェラルルは怒りだすわで大変な騒ぎになった。ジェラルル、兵士さんに噛み付いちやうし。大人な兵士さんは快く許してくれたけど、ジェラルルは憮然としていて、反省の色は窺えないし、散々な結果となった。

「ねえ、メイヤ。ジェラのあれ、どう思う？」

ジェラルルが昼寝をしている間に、メイヤに相談するつもりでいた。

「あれってあれですか？」

「あれよ、あれ」

もちろん、この場の『あれ』というのはジェラルルがキス魔だということなのだが。

「この国では、キスは挨拶みたいなものだったりする？」

「いいえ。挨拶でキスなどしません。キスは、想い合った男女がするものです」

日本人だから、人前でチュツチュすることには抵抗がある。その考え方にこの国は類似しているようだ。

「じゃあさ、なんでジェラはキスするんだろ。そもそもキスの意味を知っているのかな？ 私、教えてないよ？」

「私も教えていないですよ。男性陣が面白半分に教えたんじゃないですよね？」

兄ちゃんが面白半分にジェラルルに教えたという可能性は高いように思えた。それで言ったら、エロイだってその可能性を持っている。恐らくリオではないと思う。

どちらにせよ問題は……、

「注意して止めさせるべき？」

ということだ。

決して悪いことではないはずだ。問題なのは、それを普通に受け

入れてしまっ、目に入れても痛くないと思っっている相手にキスをされて悪い気がしていいない私なのかもしれない。

ジェラルルの唇の感觸を覚えてしまった私は、変態なんだろう。私の教育上良くないのかも。

「可愛らしい悪戯の一種だと思いますけど。これが本気であかりに襲い掛かるようになったら問題ですけどね」

「そんなあ、あるわけないよあ。ええっ、その目は何っ」

残念なものを見るように、頭を左右に振り、さらに大きなため息を吐いた。

「私はいつも第三者として見ていますから分かります。ジェラルルの目は、恋をしています」

「ええっ、恋っ。それって……」

「相手はもちろんあかりですよ」

相手は私じゃないよね。という言葉をかっさらうようにメイヤが追い打ちをかける。

「でも、ジェラはまだ三歳なんだよ？」

「恋することに年齢制限がありますか？」

何も言えなくなった私は、口をつぐんだ。

メイヤが言うことは正しいのかもしれない。幼稚園児だって、園児なりの恋をしているのだ。〇〇君と結婚する、と豪語した子供たちが実際に結婚する可能性は極めて低いし、その頃の気持ちを覚えていることも少ないだろう。それでも、それが不誠実だとどうして言えるだろう。子供なんだから、と言っるのは簡単だ。

「メイヤ。こういう場合、私はどうしたらいいの？」

「きちんと答えてあげればいいんじゃないですか？ 子供だから分からないだろうじゃなくて、分からないなら分かるように話してあげればいいんです」

一瞬、メイヤが教師に見えた。

子供だからうやむやにしているわけじゃない。寧ろ子供だから理解させてあげなきゃならないのかもしれない。

「難しいかもしれないけど、やってみる」

ジェラルルを散歩に誘い出した。毎日のように散歩をしているので、別段変わったところはない。いつもと違うのは、私の心構えだろうか。

とにかく今日は、ジェラルルと腹を割って話してみようと考えていた。ジェラルルの私への気持ちが懂れなんかじゃなく、恋というものに分類されるものであるのなら、自分の気持ちをきちんと話すべきだ。

もしかしたらそれで結果としてジェラルルを傷つけてしまうかもしれない。そう考えると、まだ時期が早いんじゃないかと思わざるを得ないのだ。

いつもの庭園に来ていた。肩に乗っていたチエスは、ぴゅんっという音がしそうなほどのスピードでどこかに消えていった。チエスが向かう先は森だ。仲間がいるのかもしれない。一度入ると暫く戻って来ない。そして、道をしたチエスはふらりと帰ってくるのだ。最近では、森にいる方が多い。

「ねえ、ジェラ。ジェラは私のこと好きなの？」

どうやって切り出そうと思ひ悩むばかりに、ド直球な質問を投げかけてしまい、口にした後相当慌てた。だが、言ってしまったからにはあとには引けない。

「すきだよ」

につこりと微笑むジェラルルはなんて可愛いんだろう。「うん、私もジェラ好きだよ」と、危うく言わされるところだった。

「その好きはどんな好き？」

「だいすきっ。だいだいだいだいだいすき」

「例えば、兄ちゃんやリオやエロイ、メイヤも好きでしょう？ 私を好きだという気持ちと同じ好きなのかな？」

「ぜんぜんちがう。あかりはばくのとかべつだから」

これは本当に恋なのか？

特別って言ったって、必ずしも特別が好きとイコールで繋がっているわけではないと思うのだ。

「じゃあ、ジェラは私とどうなりたいと思ってるの？」

「もうすこしおおきくなったら、あかりをおよめにする。ほんとはぼく、あかりのすべてがほしい。いますぐにでも」

ちよつと待つてくれつ。

これはっ、これは本当にジェラルが言った言葉なのか？ 私の全てが欲しいってどういうこと？ 大人の私にはいかがわしい響きを感じるのだけれど？

イヤっ、待て待て。相手はまだ三歳の子供なのだ。そんな大それた意味があるとは思えない。

「私の全てが欲しいってどういうことかな？」

「わからない？ そのままのいみだけど。ぼく、あかりといろんなことしたいんだ。きすもそうだけど、ぼく、あかりとセックスしたい」

聞かなきゃよかった……。こんなにダメージがあるなんて思いもよらなかった。私、ここで意識手放してもいいですか？ 現実逃避したいです。

第28話

あんまりな発言を聞かされると、人って本当にぐらりとするんですね……。

私の口からは言えないNGワードをけろりと、言い放ったジェラルは、ふらふらしている私をキョトンと見ていた。

「あのね、まだジェラは三歳だよな？ だから、そういうのはまだ早いかなって私は思うなあ」

「ぼく、さんさいだけどさんさいじゃないから」

今度は私がキョトンとする番だ。

三歳だけど、三歳じゃない？ それってどういうこと？ いや、確かにジェラルは三歳だけど。ああ、見た目が三歳じゃないって言いたいのかな？

「ぼくにねんれいはかんけない。あかりがのぞむなら、いますぐおとなになるよ？」

え？ え？ 今すぐ大人につて、何言っちゃってるのかなジェラル君。

全然意味分らないんですけど。

私の戸惑いなどお構いなしで、ジェラルは突然立ち上がり、その場で目を閉じた。

私の目はもしかしたら、おかしくなっちゃったのかもしれない。目に飛び込んでくる光景は異様なものだった。

ぶちぶちとボタンが音を立てて飛び散って、ズボンがどんどん短くなつていく。現実とは思えないその姿に私は驚愕する。

「あかり？」

声さえもジェラルのものではない。はだけた胸は程よく逞しく、均整の取れた体をしていた。

顔は面影を残しつつも、大人の色香をただよわせていた。

下へ視線を向ければ、立派なものがつ。

私は慌てて視線を逸らし、頬を赤らめた。

まっ、まともに見てしまった。

「あかり。大人の俺はどう？」

ジェラルルは言葉のとおり、大人になってしまった。

いつもの若干高い声ではなく、低い声があまりに私の好みで、体に力が入らなくなりそうだ。

「と、取り敢えずなんか羽織って」

ほぼ全裸を直視できる図太さは持っていない。

「そうは言っても、羽織るものがないよ」

声もそうだが、話し方も大人のそれになっている。「ス」や「ツ」もきちんと発音できている。

「だってそれじゃジェラのこと見れない」

「見ていいよ。あかりになら、いくらでも見せてあげる」

問題発言連発のジェラルルを叱ろうとうつかり見てしまい、心底後悔した。

「バカ言わないで、とにかく私は何か羽織るものを取りに行ってくるから、ジェラは誰にも見られないようにしてね」

早口にまくしたてると、私はジェラルルに背を向けて、逃げるように走りだした。

反則でしょ。

大人のジェラルルは、私の知ってるジェラルルとは、何から何まで異なっていた。

心臓がドキドキしているのは、大人のジェラルルを見たためか、全力で走っているためか。

私は城に戻ると、メイヤに男用の服を頼んだ。突然の要請に驚いていたが、そこはプロ、何も聞かずに迅速な対応をしてくれた。

メイヤが用意してくれた衣服を持って、再び庭園へと走った。

ジェラルルに会うことが怖いと思った。

ジェラルルはジェラルルだ。でもあのジェラルルは、ジェラルル

であつてまったくの別の男だ。

それでも、会つて話を聞く必要がある。リオが隠していた何かはこれのことなんじゃないだろうか。

ジェラルルの秘密。

それは一体なんだ。

「ジェラッ」

呼び掛けると、木の陰に隠れていたジェラルルがひょっこりと顔を出した。

「そのままそこにいてっ。私がそっちに行くから」

こちらに来ようとしていたジェラルルを素早く止めた。

不服そうに頬を膨らませるしぐさは、普段のジェラルルの面影を残していた。

「はい。これ。そこで着替えて。着替えられたら出て来てね」

木の陰に隠れなきゃならないことにも不満を持っているのか、小さく何かを呟いている。

私はその木から離れ、なおかつその木を背にして芝生の上に座り込んだ。

ああ、心臓に悪い。なんだ、あの生き物は。私がこれまで見たどんな男よりも男前で、フェロモン出しまくって、低い声もなんだか震えるほどいいし、笑顔になるとジェラルルそのもの。

私は混乱していた。そうだ。だからこんなに胸がドキドキするんだ。そうに違いない。だって、あれはジェラだもの。

「あかり。何ぶつぶつ言ってるの？」

耳元で低い声が、そしてその後にはフツと息を吹きかけられて、私は飛びのいた。

「ちよっ、何。止めてよ、ジェラ。着替えられたんなら、こっちに座って」

「ええ、折角この姿なんだから、あかりともっとくつつきたいのに」
私は頭を抱えて大きな溜息を吐いた。

「とにかくここに座んなさい」

これでもかというほどの低い声を出した。どすの利いた私の声に大人しく指定された（私の向かい側）場所へと腰を下した。

「よろしい。では、私からいくつか質問させて貰うね。まず、本当にジェラだよな？」

「勿論、ジェラだよ。分らない？」

「イヤ、分かってんだけど、戸惑ってるだけ。じゃあ、次の質問ね。ジェラは三歳なんだよね？」

向かい側に座ったジェラールは何故か正座をしており、その光景は一見私が説教をしているように見えるだろう。

「実際の年齢は三歳じゃない」

「えっ、どういうこと？」

「あかりは俺の出自の秘密しってるでしょう？」

私がこくりと頷けば、それを確認して頷き、再び口を開いた。

「本当の俺は、長男なんだ。リオよりも一つ年上。俺は王の血を引いてないからもともと次期国王になてなるつもりもなかった。母上とはそりが合わない、というよりも疎まれていたからこの城を出て、ひっそりと暮らそうと思っていた。けど、王は次期国王に俺を選んだ。俺の実の父親はこの国髓一の腕前を持つ魔力とその魔力を扱うだけの技量を持っていた。俺にも十分な魔力と技量があった。だから、俺を指名したんだ。王は何故か俺を目にかけてくれていた。こんな出自で普通なら殺したいくらい憎んでいても不思議はないのに」

ジェラールはそこで一息吐いた。

ジェラールの口から紡がれる事実を、私は心を無にして聞いていた。全ての話を聞き終えるまで、自分の感情を交えずにいたかった。「母上にはそれが気に入らなかつたんだ。母上は、エロイに次期国王になつて欲しかった」

「どうしてリオじゃなかつたの？」

「リオは母上の子ではないんだ。王には一人側室がいたんだ。体の

弱い人で、リオを産んだ後命を落とした。母上にとって、自分の子供はエロイだけだと思っている。俺は自分の子供だと認めてもいない。忌々しい存在。だが、殺すことは出来なかった。王によって俺は守られていたから。苦り切った母上に力を貸したのは、あかりをこの世界によんだあの魔法使いだった。魔法使いが俺を三歳の子供の姿に変え、俺の魔力を封じてしまった。そして、俺はあの部屋に閉じ込められた。魔法使いの力は莫大で、誰も俺をもとには戻せず月日は流れた。そんな時、王の元に魔法使いが現れた。王は俺を元に戻す方法を問いただした。魔法使いは言った。俺を元に戻すことが出来るのは、ただ一人の娘だけ、その娘をこの世界によぶことから出来ると。そして、この世界に現れたのがあかり、君だった」

「言葉を話せなかったのも、魔法のせいなの？」

「そうだよ」

「でも、私何もしてないけど……。それに、リオは王がリオの為に私をこの世界に呼んだんだって言ってたよ？」

ジェラルルが言ったことが全て正しいのであれば、リオが言っていたことは嘘であったことになる。何故、嘘をつく必要があったのか。

第29話

「リオが語ったことは全て嘘だよ」

私の心中を悟ったのか、ジェラルルが厳しい表情を浮かべて言った。

「どうして嘘なんか……」

「本人に直接聞いたほうがいい、俺が話すよりもね」

きつと今、ジェラルルに何を話されても私は信じないだろう。それが分かっているから、ジェラルルは話さないのだろう。

「ありがとう、ジェラ。話を戻してくれる？ えっと、なんだっけ」

「そうだね。俺も長くはこの姿ではいられないから」

「どういうこと？ また、子供の姿に戻ってしまうの？」

「そうだよ。俺が急速に成長していくことにあかりは不思議に思っていただろう？ それはあかりの愛の力があつたからなんだ」

「へ？ 愛？」

突拍子もない言葉に私は目を剥いた。その単語はこっぴどく、普段から用いらない言葉で、それだけで私は動揺してしまった。「愛だよ。あかりから受ける愛の力で俺の魔力は少しずつ戻って来てるんだ」

「愛って言っただけ」

私は愛なんて大それた力を使った覚えはない。

「あかりが俺のためにしてくれること。その全てに愛が詰まってるんだよ。最近は、俺にキスをしてくれていたでしょう？ だから、力が急速に増えている。あつ、でも勘違いしないで。俺はその力があるからあかりを好きなんじゃないからね。一目惚れなんだ」

恥ずかしそうに一目惚れなのだと告げるジェラルルを見ると、こちらまで恥ずかしくなってしまった。

「も、元の姿に戻るってことは、力が足りてないってこと？」

「うん。まだ足りない。ねえ、あかり。俺を好きになって？ 俺に

溺れて？」

「そつ、そうしたら元の姿に戻るのね？」

こともなげにぶつけられる直球に私は怯んだものの、それを気取られないように懸命に平静を保った。

返事を聞かなくても、答えは分かっていた。

私が心の底からの深い愛を与えれば、ジェラルルは元に戻るのだろつ。

でも、私の心の中にはリオがいた。なぜリオが嘘を吐いたのかは定かではない。そもそも、どちらの話が事実なのか今の段階では判断が出来ない。

「ジェラ。私の愛は兄弟愛、うーん親子愛？　みたいなものなんだよ。そういう愛ならいくらでも与えることができるよ。でも、ジェラが望んでいる愛はきつと与えてあげられない」

それが私の真実。

「今は、だよね？　俺、諦めないよ。どうしてもあかりが欲しい。だから、覚悟してて」

真つ直ぐな瞳からつい目を逸らしてしまった。焦った。どうにもこうにも大人版ジェラルルに慣れることが出来ないのだ。

逸らした目を戻した時には、ジェラルルの顔が間近にあって、固まった。

「ちよつ、ジェラ近いよつ」

「だってキスは近づかないと出来ないでしょ？」

「ダメっ」

両手をクロスさせて顔を覆った。

「どうしてダメ？　いつもしてるでしょ？」

それはジェラルルが子供の姿をしているからだ。大人版のジェラルルとのキスは、浮気をしているような気にされる。

「むーりー」

「無理でもしたい。あかり」

きつと大人版のジェラルルは私とその声で名を呼ばれることに弱

いことに気付いている。ひよろひよろと力が入らなくなってしまうのだ。

「あかり」

両手首を捕まれ、安易に下におろされ、大人版ジェラルルの顔がゆつくりと近付いてくる。

咄嗟にギョツと目をつぶると、ふんわりと唇が触れ合った。当たり前のことだが、子供の唇とは違う。いつもより少し固めの唇は、驚くことに、イヤ当然かもしれないが、巧みに私を翻弄していく。可愛らしいチュツとするキスじゃない。私の力が入らないのいいことに、もさばるように唇を堪能していた。

されるがままに唇を重ねて、どれくらいそうしていただろうか。短いとは感じられない。相当長かったように感じた。

解放された私は息を乱していた。

「ちよつ、とは手加減してよ、バカっ」

ふと顔を上げた時には、もう大人版ジェラルルの姿はなかった。

「ごめんね、あかり」

ラブリーなジェラルルが上目遣いに濡れた瞳をこちらに向けている。

「ああ、可愛いっ」

ラブリージェラルルが恋しくて、思わずその体を掻き抱いた。

ああ、安心する。

だぼだぼの服を身に付けているジェラルルが可愛らしかった。

「あかりはぼくのほうがしゅきなの？」

「だって、大人のジェラは慣れないし……、それにちよつと怖い」

大人版ジェラルルは、私を翻弄しようとする。私はリオを好きなのだから、揺れる心なんていららない。

最近、私はリオと話をしていない。というよりも、姿を見ていないのだ。

「ねえ、エロイ。リオは忙しいの？」

エロイの赤い髪をいじくり回しながら、尋ねた。

ジェラルルは、昼寝をしている。

相変わらずエロイは、この部屋に入り浸っているのに、リオの姿を見ない。

大人版ジェラルルにリオが嘘を吐いていると知らされた私は、その真相を本人の口から聞きたかった。

もしかして私は避けられていたりするのかな。

「リオって私のこと好きなのかな？」

「そりゃそうだろ。何のために婚約してんだよ、バカか？」

迷惑そうに頭をずらすけれど、私はそれを決して逃さない。

「そうなんだけどね。だって全然会ってない。エロイは毎日ここに来てるのに、リオだけ忙しいの？」

「知らねえよ。俺はそんなに兄上と仲が良いわけじゃない」

「いつもここに一緒にいたじゃん」

確かにこのテーブルを囲んで顔を突き合わせていたのだ。しかしながら、思い起こしてみれば、リオとエロイが直接話をしているのを見たことはなかったようにも思える。

「仲、悪いの？」

「悪いわけでもないけどな。兄上は俺なんかより母上と仲が良いな」
リオと王妃。

その二人が並んだ姿を思い描いて、すぐに頭を振ってその映像を振り払った。

酷くイヤな感じがした。とてもイヤな感じが。その二人が私なんかよりお似合いに思えたから。

リオと王妃に血の繋がりは無い。その事実が私をとて不安にさせた。

「そうなんだ……」

「そんな顔すんなよ。俺が兄上を連れてきてやるから」

自然と動きを止めていた手をもぎ取って、部屋を出て行った。

エロイが出ていってからの時間の刻みが私には遅く感じられた。

まるで時計は時を刻むのを忘れてしまったかのように、不自然なほどあたりを静けさが包んでいた。いつもは聞こえる人の気配も、いつも遊びにくる鳥の歌声も、昼寝しているジェラルルの寝息さえも私の耳には入らなかった。

会いたいと思った。でも、会いたくないとも思った。

何か良くないものを突き付けられそうで怖い。恋とは人を強くも弱くもする。恋に翻弄された自分が恐ろしくて仕方なかった。

やがて入ってきたリオの姿を見て、私は泣き崩れた。どうして泣いているのかも分からず、ただ涙だけがとめどなく頬を伝っては落ちていく。

「あかりっ」

大人版ジェラルルとは違う、私を安心させてくれる声。その声が私を更に泣かせた。

リオは私に走り寄るときつく抱き締めてくれた。

「すみません、あかり。多忙であなたに寂しい想いをさせてしまいました。でも、私も寂しかったんですよ」

その言葉は本当か。信じていいのか。そう思うそばから、私はリオを信じていた。

「リオに、聞きたいこと、があるの。……どうして私に嘘を吐いたの？」

自分の声とは思えないか細い声が出た。リオには届いていないかもしれない。寧ろ届かなければいい。

「あかりは私を信じてくれないのですか？ 私が嘘を吐いたと？」
リオの瞳が私を食い入るように見つめていた。

第30話

「あかりは私を信じてくれないのですか？ 私が嘘を吐いたと？」
その瞳に捕らえられ、そう聞かれて「信じられない」などと言えるだろうか。

「リオのこと信じてるよ」

瞳を見つめたままそう告げると、リオは目を落として肩を震わせた。

「リオ？」

泣いているのか？

そう思ったのはほんの一瞬のことだった。

リオは笑っていたのだ。クツクツと肩を震わせ、少しずつそのボリュームを上げていく。

リオが壊れたように笑っている姿を私は茫然と見ていることしか出来なかった。

はぁ、とひとしきり笑い終えた後に大きく一息吐いて、私を強い瞳で見据えた。先程とはまるで違う強い瞳。その瞳には、憎しみさえ感じられた。

「馬鹿ですね、あかり。私があなたなんかを好きになるわけがないじゃないですか」

笑顔を浮かべてはいたが、声が笑っていないかった。私を地の底に陥れようとする意図を多分に含ませた低い声だった。

「あなたに言ったことは全て嘘ですよ。何から何までね」

人を一瞬で凍らせる瞳と声が一身に注がれた。

「どうして？」

「どうして、と聞くのですか？ あなたにはもうお分りなのでは？ 私が何のために、誰のために動いているのかを」

そう、私はもう気付いている。ジェラルルを見つけたあの日、扉の前で佇む二人を見た時から気付いていた。リオが王妃を見つめる

あの瞳をみたときから。それを認めるのが怖くて、気付かないふりをしてきただけなのだ。

「……王妃のため。ジェラの魔力が戻るのを阻止するために、リオは私に近付いた」

「ええ、その通りです」

出来れば否定して欲しかった。

全て嘘だと、私を好きだと言って欲しかった。だが、それは夢のまた夢であることを私は痛いほどに知っていた。リオが王妃に向けていたあの瞳を、私に向けることは一度もなかったのだから。

「私が愛しているのは王妃だけです。この命はあの方だけのもの……」

胸に手をあて、うつとりとそう呟くリオの姿が霞んでいく。

「あかりに何をしたっ」

声のするほうへ目をやると、ジェラルが鋭い目でリオを睨み付けていた。

「ジェラ」

酷く擦れた声が喉を通った。

「真実を告げたのですよ、ジェラル。そもそも好きでもない女との婚約、真実をバラすことでもう嘘を吐かなくても良くなってせいせいしていますよ」

ギリギリとジェラルの歯軋りが聞こえてきそうだ。リオはわざとジェラルを煽るように、私を傷付けた。私が傷付けば傷付くほどに、ジェラルも傷付き、怒りを顕にすることを知っているように。

「リオは敵なのね」

「あなたが私につくのなら、少しくらい可愛いがってあげてもいいですよ？」

「お断わりよ。私はジェラの味方なのっ」

「それは残念です」

残念などと少しも思っていないのがありありと分かる笑顔でそう

言い、私とジェラルルを一瞥したあと部屋を辞した。

「あかりっ」

ジェラルルは威嚇していた体を解放すると、泣き崩れる私に抱き付いた。

「大丈夫。私は大丈夫だから」

何度もそれだけを繰り返して呟いていた。ジェラルルにというよりは、私自身に言い聞かせるように。

何故かジェラルルが泣いていた。私の涙を吸い取っているかのように。

「どうなさったんですかつ？」

部屋に入った途端に異様な空気を感じたメイヤは、達磨のように抱き合つて泣く私たちに悲鳴に近い叫び声を上げた。

「メイヤ……」

安心させようと微笑んだのだが、それを見たメイヤが顔を顰めたのを見ると、どうやら私は失敗してしまったようだ。

「ごめん、メイヤ。兄ちゃんが戻ってきたら全部話すから」

兄ちゃんにも話す必要がある。

これから、王妃とリオがジェラルルにどんなことをしてくるか分からないのだ。

私とジェラルル、兄ちゃん、エロイ、メイヤの五人がテーブルを囲んでいる。

私は、自分が知っていることを全て事情の知らない三人に話して聞かせた。

エロイに至っては、ジェラルルが兄だという事実さえ知らされていなかったようだ。

「よし、行つて来る」

「え？ 兄ちゃん、どこにいくの？」

「リオを殴りに行つて来る」

「待つて。待つて待つて。兄ちゃん、お願い落ち着いて」

暴れ馬の調教は私には荷が重い。それでも、慣れというのは恐ろしいもので、私のことに関して怒り狂う兄ちゃんを何度も止めて来たので、動じないだけの強さを身につけていた。

「行かせろ、あかり」

「あのねえ、兄ちゃん。リオのことはもういいんだよ。ありがとう。気持ち嬉しいけどね」

リオを殴ったところで、何かが解決するわけではない。誰かの心が晴れるわけではない。もしかしたら、殴った瞬間はスツとするのかもしれない。だが、その行為が恐らく兄ちゃんを傷付ける。

兄ちゃんは毎日訓練をしているけれど、本当は人を傷付けることをよしとしていないのだ。

「それより、これからどんなことしてくるのかの方が気になるよ」
「王妃なら、二人の命を狙うかもしれない」

この場を黙視していたエロイが突然声を上げたので、一斉に視線が集まった。

「イヤ、狙われるのはあかりかもな。あかりがいるためにジェラルの魔力が戻りつつあるというなら、あかりの存在が邪魔になるだろ？ ジェラルの魔力が戻らないのなら、もつと強力な魔法で閉じ込めてしまえる。ジェラルの魔力が満ちる前に動いて来ると見たほうがいい」

「ねえ、エロイ。王妃はあんたのお母さんでしょ？ こちら側についていいわけ？」

「構わない。俺はあいつにとって駒でしかない。愛情なんて一度も感じたこともないしな」

次期国王という位を無理矢理背負わされたことに不満を持っているのだらう。憎々しげに拳を強く握り締めていた。

「あかりはぼくがまもるつ。そのために、あかり、ぼくにあいをちょうだいっ」

ここで意味する愛というのは、ジェラル的には何を求めているのだらうか。抱きしめることか、キスすることか、はたまたその先

をお望みか。なんとなく後者であるような気がして、恐ろしいので聞かない。

ジェラルルを抱き締めて、頭のとっぺんに愛を込めてキスを贈った。

顔を離すと、不満顔で私を見上げるジェラルルと目が合って苦笑せざるをえなかった。

「これじゃたりないっ。もっと」

そうは言っても、ここには兄ちゃんや兄ちゃんや兄ちゃんがいるんだよ？ 兄ちゃんが私とジェラルルがキスしている姿を目撃したら、どんなことになるか、ちよつと恐ろしくて想像したくない。辛うじてこれまでは、目撃されていないから良いものを。

「あとで……」

「じゃあ、あとでならいつしよにねてくれる？」

何故だろう。子供の口から出る寝るという単語はお昼寝という意味に過ぎないのだからうけれど、ジェラルルが口にすると卑猥な言葉に聞こえるのは。

「もうお昼寝はしたでしょ？」

「ええ、ねたりないよ。りおのけはいがしてとちゅうで起きちゃったんだもん」

どうにかして私をベッドに誘い込もうとするジェラルルとの攻防は暫く続いた。

「ジェラ。灯里は俺が守るから心配すんな。お前は自分の体を元に戻すことに専念しろっ」

兄ちゃん。だから、ジェラルルが自分の体を取り戻すには私の愛が必要なんですっ。きつと、ジェラルルはあんなことやこんなことをご所望なんです。許していいのですか？

「うん。分かった」

あああ、嬉しそうに返事しちゃってるよ。

これで、私の逃げ場は断たれたように思う。リオへの気持ちという逃げ場も、兄ちゃんという逃げ場もない今、どうやってジェラ

ルのアプローチから逃げればいいだろうか。

第31話

緊張、イヤ警戒している私に苦笑を漏らす目の前の男を、実のところ決して嫌いではない。

時として、常識はずれな行いをすれものの、悪い人でないのは分かっていた。

「嬉しいなあ。あかりが訪ねて来てくれるなんて」

「王様は私に秘密ばっかりしてましたね。もう、バレてるんですからね。これ以上ないでしょうね」

昼食の食器をメイヤと片付けたあとに、王の執務室を訪ねた。

「もうないと思うよ？ ジェラルにかけられた魔法のことも、魔力を取り戻すことも知っているのでしょ？」

「はい、知っています。リオは……、私たちの婚約を解消すると言いに来ましたか？」

「イヤ、来ていないよ」

私の暗い表情に気付いたのだろう。申し訳なさそうな顔をした。

「リオがあかりを傷付けたんだね？」

「そうですねえ、ええ、傷付いたのかもしれませんが。でも、思うほどには傷付いていないのが現状です。恐らく私は知っていたのだと思います。彼が私を本当には想ってくれていないということに」

リオが私を本当には好きではなかったように、私も本当には好きではなかったのかもしれない。だって私は笑っていられるのだから。あの日から幾日しかたっていないのに、私の心は痛んですらいない。

「あの子の王妃への愛は崇拜に近い。そういう、人を惹き付ける力を彼女は持っている。だが、彼女の魂は美しくなどない。皆外見に惑わされているんだよ」

「王様は、王妃が好きじゃないんですか？」

王から、王妃への愛情は見受けられない。

「私たちは政略結婚だからね」

寂しそうに語る姿に、王が決して努力を怠らなかったのが分かる。それでもどうにもならなかった関係だったのだろう。

決して嫌いではなかったはずだ。

「会った当初から彼女の魂は濁っていた。それと反比例するように彼女の国民からの人気は上昇したよ。彼女は国民の人気を得るために魂を汚しているのかもしれない。その代償としてね」

「それも一種の魔法なんでしょうか？」

「そうかもしれないね」

「王様はリオが私と婚約すると言った時、なぜ反対しなかったんですか？」

リオが唯一愛する人が王妃なら、私と婚約するというのはおかしいと思わなかったんだろうか。

「君の魂の美しさがあの子を目覚めさせたのではないかと思ったんだよ。私の考えが甘かった。君を傷付けてしまつてすまない」

「いえいえ、私こそ力不足ですみません。それに、私はこんなことでは傷付きませんから、大丈夫ですっ」

力瘤を見せて、逞しさをアピールすると二人同時に吹き出した。

「エロイがジェラよりも私が狙われるかも……なんて脅すんですけど、大丈夫ですよね？」

「私もエロイの意見に賛同するよ。ジェラルルの魔力を戻す存在さえいなければ、ジェラルルの力はまだ驚異ではない。今現在、王妃にとつて一番邪魔な存在があかりなんだよ。それにね、ジェラルルの命を狙うことは出来ないが、王族ではないあかりの命を狙うのは容易なんだ」

今、ジェラルルの存在が一部にしか知られていない今、命を狙うのは非常に危険だ。限られた存在の中で唯一ジェラルルを憎んでいるのは王妃しかない。手を下したら、自らが犯人だと宣言しているようなものだ。たとえ白を切ったとしても、疑いは深まるだろう。そんな危険を払うなら、私を消したほうが早い。

「王妃の望みは一体何なんでしょう？ エロイを次期国王にたてて一体何がしたいんでしょう？」

「私にもよく分からないんだ。彼女が何を望んでいるのか」

「あの、ジェラの出自のことなんですけど……、本当に王妃は神官だった男に……」

気になっていたことだった。とてもナイーブな問題であるのだが、聞ける相手が他にはいないように思えた。

さすがに直接ジェラルに聞くことも出来ないし、エロイはあまり事情を知らない風だった。ましてやりオに聞くわけにはいかなかった。

「リオに王妃は襲われたのだと、聞いているんだね？」

「はい」

「真実はその逆だよ。王妃が神官だった男を襲い、襲われたと嘘を吐き、国民に男を始末させた。何故王妃が神官を襲ったか分かるかな？」

「いえ、分かりません」

「じゃあ、その当時国一番の魔力の持ち主がその男だと言ったら？」

「王妃はその男との間なら魔力の強い子供が生まれてくると思った……ですか？」

「そうだね。一概に魔力の強い親から必ずしも魔力の強い子供が生まれるとも言えないが、魔力のない親よりかはその確率は上がる。」

王妃は魔力の強い子供を手なづけ、操ろうとしていたのかもしれないね。だが、実際は手なづけるどころか反抗的な子供に育ってしまった。そして、三歳児のジェラルが生まれることになったんだよ」

王妃は魔力の強い子供を操って、一体何を掌握しようとしていたのだろうか。禁忌まで犯して授かった子供に一体どんなことを望んでいたんだろうか。どんな汚いことをやらせようとしていたんだろうか。

「使えない駒はもういらないということですか？ 王妃にとってジェラは不要物だと言いたいんですね？」

体の底からふつつと煮えたぎるような感覚に襲われた。体が震えるほどの怒り、自分では制御出来なくなりそうなほど強い怒りに私は身を沈めていた。

「あかり、怒りでジェラルルは救えない。君に必要なのはジェラルルを包み込む愛情なんだよ。気持ちを静めなさい」

優しくしかりつける言葉に、私の怒りが少しずつ冷えていくのが分かる。怒りはある。だが、怒りがすべてではない。怒りに支配されるわけにはいかないのだ。

「あかり、ジェラルルを好きかい？」

「好きです。男としては、うーんって感じだけど、とにかく好きは好きですよ。私の子供っていうか弟みたいなものですから」

実質弟ではないし、ましてや子供ではない。でも、ここに来てから毎日顔を突き合わせている存在なのだ。とても家族に近い存在であるように思える。

男として好きだと言ってくれるジェラルルには申し訳ないけど、子供の姿のジェラルルのが私の脳裏に深く刻まれているので恋愛対象には見れないのだ。

いつか、ジェラルルを男としてしか見れなくなる日が来るんだろうか。

そんなことを考えていると、突然扉が叩き開けられた。

「このへんたいっ。おれのあかりに手出したら承知しないぞっ」

勇ましく飛び込んできたのは、今しがた私の思考を独占していた人物で、王に牙をむこうとしても何だか可愛らしく見えてしまうジェラルルだった。

「ジェラっ、一人で来たの？」

開け放たれた扉の外にはメイヤの姿はなく、これから現われる気配もない。

「一人できたっ」

なんて危険なことをしているんだ。頭にかつらもかぶらずに。

「ジェラっ。駄目じゃないの、かつらもかぶらずにこんな所に一人

で来てしまつては。ジェラだって命を狙われないとは言えないんだからね？」

ジェラルの前にしゃがんで目線の高さを同じにし、両肩を掴んで叱りつけた。

「だって、あかりがおそいからいけないんだ。おれ、あかりがおうひに連れられたんじゃないかって心配したんだ」

ジェラルは必死に訴え終わると私の首に抱き付いた。

「ごめんね、ジェラ。心配かけたね。王様からお話を聞きたかっただけなの」

「あかりはおれからはなれちゃダメだ。おれが守るんだからっ」

小さなナイトに守ってもらうのもいいかな、と叱っていたことなど忘れてメロメロにさせられている私なのであった。

第32話

私たちが警戒しているのを知ってか、王妃が不審な動きをするとはなかった。

毎日、平穏な日々を過ごしていると、ふと力が抜けてしまいそうになる。そういう時は、ハツとして気を引き締めるのだが、その日の私は本当に力が抜けていた。というのも、朝から少し熱っぽかったのだ。

昼の用意をするために立ち上がった私は、誰にも声をかけずに部屋を出てきてしまった。

いつもなら兄ちゃんが午前の訓練を終えて戻って来てから、二人で調理場に向かうのだ。この時間、メイヤは侍女としての仕事で部屋にはおらず、ジェラールはエロイと勉強をしていた。

熱で朦朧としていた私は、兄ちゃんを待たずに出て来てしまった。ジェラールかエロイが追って来ないのを見ると、二人は私の不在に気付いていないのだろう。

目前に男が立ちはだかった時、私は不味いと思ったが体は一つも動かすことが出来なかった。

目の前に霞がかかったようにぼんやりしているのは、男が何かをしたからか、それとも熱のせいか。

男の右手にはキラリと光る刃物——剣だろうか——が握られていた。

一步一步と歩きたびにその振動で予先が揺れる。私はそれを不思議な気持ちで見ていた。

この男が私を殺す目的で近付いて来ているのは理解しているつもりでいた。だが、動かないのか動けないのか、私はただじっと男の動きを見ているだけなのだ。

男の顔が黒く見えるのは、マスクが何かで顔を隠しているからなのだろう。顔が見えないのに、その男が誰なのか私には分かった。

私は微笑んでいた。

久しぶりに会う男に笑いかけた。

一瞬、その男、リオが怯んだように見えた。

ああ、良かった。リオにはまだ心がある。

私はそう思った。

王妃は、自分への愛を証明するために私を殺して来いと命じたんだろうか。

その一瞬の迷いが、私への情がほんの少しでもあったということになるのではないか。

「私を殺したら、あなたはどうなる？」

心の声が口について出てしまった。私を殺したことで、リオの心が病んでしまわなければならない。

リオは完全に足を止めたが、口は開かず、ただ私を見ていた。

「あなたの心が傷付かないならいいの」

殺されてもいいなんて思っていない。ただ、傷付いて欲しくないだけ。

先ほどまで動けなかったのに、何故か足が動いた。先ほどまでは逆だ。私が動くのを、リオがただただ見守っている。

「リオ……」

私は右の手でそつとリオのマスクを取り、頬をなげた。

「放せっ」

リオが乱暴な言葉を使うのも、声を荒げるのも初めてのことだ。

「放したらリオは私を殺す？」

「放せと言ってる」

「私を殺してリオは満足できる？」

自分でもどうしてこんなことを聞いているのか不明だ。満足だから、リオはここに来たのだ。

「放せっ。黙れっ」

「ねえ、答えられないからそんなに怒ってるの？」

リオは冷静な判断が出来ていない。私の手はほんの少し頬に触れ

ているだけなのだ。一步後ろに下がれば手は放れることに気付いていないのだ。

「迷いがあるなら止めたら？」

「黙れっ」

「可哀相なりオ。それが愛だと本当に信じてるの？」

私の意識が薄弱してきている。ちゃんと言葉が紡げているのかも、自信がない。もう、殆どうわごとのようなものだ。

「愛はそんなものじゃないよ？」

「……」

「リオ、お願いだから幸せになつて……」

意識を保っていられるのは、これが限界だった。手がリオの頬からずり落ちていく。

足に力が入らず、たつていられなくなつて崩おれた。

意識の遠ざかる狭間で、ジェラルルの声が聞こえた。ホツとしたことでさらに力が抜けていく。

あの声は、大人版ジェラルルの声だった。そして、咄嗟に私を抱き留めていたリオは、その声を聞いて逃げるように去っていった。

「リオには人は殺せないよ。私を殺すなら、人を雇うといい」

「君は馬鹿だ」

私もそう思うよ、リオ。裏切られたあなたを、助けたいと思ってしまうんだから……。

人の話す声で、私は目を覚ました。

左手が温かく感じ、動かすがびくりとも動かなかった。

そちらに目を向けると、ジェラルルが私の手をしっかり握ったまま、頭だけをベッドに預けて寝てしまっている。

「ジェラ」

意識を手放す前に聞いたジェラルルの声は大人版のものだったが、今は子供の姿だった。

私は空いているほうの手でジェラルルの頭を撫でた。

先日王の前で宣言したとおり、ジェラルルが私を守ってくれたんだろう。大人版の姿で部屋の外を歩くのは、危険だというのに。

おそらく、リオにジェラルルが大人の姿に戻れることを知られてしまった。それは、王妃にも知られたということなのだ。

「無茶してからに。おバカなんだから」

頭を軽く指で小突いた。

「痛いよ、あかり」

寝ているものだとばかり思っていたジェラルルは、狸寝入りだつたようだ。

「そんなに強くやってないでしょ？ 無茶するジェラが悪いのよ。王妃に知られちゃったんじゃない？」

「そうかもしれないけど。それよりあかりの安全の方が優先だよ」「あれっ。ジェラ、大きくなったよね？ それに、言葉も……」

ジェラルルの体はもう大人とたいして変わらない。推定14歳、16歳くらいではないかと思われる。言葉に甘えた感じがなくなつて、声も多少低くなっている。声変わりしたみたいだ。幼さと大人との微妙なラインにいる思春期の男の子だ。

「もう三歳のジェラじゃないんだ……」

「寂しい？」

「うっん。好きな人の子供の頃の姿まで見ることが出来て、その成長を目の当たりにする。それってお得じゃない？」

「え？」

「は？」

ジェラルルの驚きの声に、自分が今した発言の重要性に気付いて驚愕する。

「え？ あれ？」

「あかり、今のって……」

「あれ、待つて。私、今何て言った？」

「俺のこと好きな人って、それってどういう意味？」

どういう意味ってこちらが聞きたい。私の発言を普通に聞けば、

私はジェラルルを恋愛対象として好きだと言っているように取れる。だが、私にその意識はまるでなかった。考えてもいなかったのだ。自然にぼろりと零れ落ちた言葉なのだ。

「私ってジェラが好きなの？」

「あかり、俺が聞いているのに。どうして俺に聞くの？ あかりは俺が好きなんだよ、って言えば好きになるの？」

「……なるかもしれない」

「じゃあ、言わない。それじゃ、俺が暗示をかけたみたいでイヤなんだ」

もう、今朝までのジェラルルじゃない。まだまだ子供っぽさが残るけれど、一人の男と言ってもいい。

私はあの時、意識を失いかけて倒れた時、ジェラルルの声を聞いてホッとした。誰の声よりもジェラルルの声を望んでいたのだと痛いほどに感じていた。ホッとしたと同時に、涙が出そうなほどに切なかった。

ねえ、いつから？ いつから、私はジェラルルが好きだったの？ そう考えてそれがあまりに馬鹿馬鹿しいことだと思った。いつからでもいい、私はジェラルルが好きだったのだ。その事実の方が何よりも重大なのだ。

「……好き。私、ジェラのこといつの間にも好きになってたみたい。今まで気付かないなんて……、私ってバカ？」

ジェラルルに微笑みかけたその瞬間に涙がぽとりと零れ落ちた。

「俺は知ってたよ、あかりの気持ち」

「え？ どうして？」

「俺の体がその証拠でしょ？ あかりの気持ちが大きくなったから、俺の体も成長した。体の成長がこんなに嬉しかったことはないよ」

「どうして私より、ジェラの方が先に気付くのよつ。バカっ」

自分の知らない気持ちを知られていたことが恥ずかしくて、悪態を吐いて布団に潜り込んで隠れた。クスクスとジェラルルの笑い声が聞こえて悔しさに涙が浮かぶ。

第33話

自分でも自分の気持ちを疑った。だって私は、少し前まではリオの婚約者だったのだ。

もしかしたら私は尻軽なんじゃないか、移り気なんじゃないかと責めたりもした。

熱の引きかけたダルい体をベッドに横たえて、一日そんなことばかりをぐるぐると考えていた。

リオの時と決定的に違うのは、想いの重さだろうか。この胸に痛みすら感じる想い、気配を感じるだけで嬉しくて、声を交わせば涙が零れそうになる。彼が微笑めば自然と私まで笑みが浮かび、苦しそうな表情を浮かべていればこちらまで苦しくなった。傍にいればもつと傍に行きたいと思い、抱き締められれば触れて欲しいと思う。挙げだしたらキリがないが、全てにおいて違った。

ジェラルが恋しくて、苦しい。

「ジェラが好きなのかな？」などと言っていた私が、自分の気持ちを認めた途端に、隠れていた想いが雪崩のように押し寄せた。

気付いた気持ちはあまりに重く、その気持ちをぶつけていいものが悩んだ。あまりの重さに恐れおののかれるのではないかと不安になった。

「メイヤ。恐いよ。なんだろう、こんな感覚初めてだよ。私、ジェラのこと言葉に尽くせないほど好きみたい」

自分でも信じがたい。リオのことを本当に好きで、こんなに強く人を好きになったことはないと思っていたのに。それよりも遙かに強い想いが私を包んでいた。

「それ、本当？」

寢室の扉が開いた音に、当然ながらメイヤが現われたのだと思っていたのだ。

「ウソッ、ジェラ」

まさか訪問者がジェラルルであるなど思いもしなかった。

飛び起きてジェラルルを窺えば満面の笑みが私を迎えていた。

「ジェラ、また大きくなった？」

大きくなった？ よりも大人っぽくなった、の方がしっくりくるのではないだろうか。

「そうだね。あかりが俺のこと強く想ってくれたから、離れていても魔力が満たされていくようだったよ」

「もう、本当のジェラの姿に戻った？」

「ううん。まだだよ。あかりが俺に全てを委ねてくれた時、俺にかけられた魔法は完全に崩れる」

「それって……」

ジェラルルがにこりと微笑んだ。

要するに私がジェラルルに身も心も捧げればってことだよ。心はもう既に捧げているようなものだ、とすれば……。

「かけられた魔法なんてどうでもいい。俺はあかりの全てが欲しい。あかりを俺にちょうだい」

最後に発した言葉に、子供のジェラルルが垣間見れた気がして吹き出した。

「あかり？」

「ごめん。だってジェラがその姿で子供っぽいこと言うから」

ジェラルルは決まり悪そうに笑い続ける私を待っていてくれた。

「ジェラ。私、ついこの間までリオの婚約者だったんだよ。移り気な女だと軽蔑する？」

「しないよ。だってあかりは、俺を好きになる運命なんだ。俺が子供の姿だったから気付けなかったただだよ。リオと俺が並んでたら絶対俺を選んだでしょ？」

「ふふっ、それはどうかな。分かんない」

ジェラルルの意味の分からない自信が面白かった。

私の言葉に拗ねたジェラルルはやはりどこか、子供な感覚を引き摺っているように見える。

「ウソでもいいからそこは、俺って言うてほしかった」

「嘘でいいんだ？」

「う、ウソはイヤだけど」

やっぱりジェラルは可愛い。どんな姿になろうとも、私の心を揺らす存在ではあるけれど、私の心を温める存在でもあるのだ。

「ジェラが好きだよ」

パツと広がるジェラルの笑顔に満足気に頷いた。

「あのね、ジェラは自分本来の姿に戻りたいよね？ 私もそれがいいんだろうなって思うよ。でもね、そうしたら小さいジェラにはもう会えないんだろうなって思うと少し寂しい感じがしちゃうんだ。可愛かったもんね、小さいジェラ」

舌つ足らずで話すジェラルも、無邪気に走り回るジェラルも、小さいながらに私を守ろうとするジェラルも大好きだった。だから、少し寂しい。

「じゃあ、早く子供を作ればいいね？ 俺たちの子供ならきっと可愛いよ？」

そういう話でなくて……。イヤ、でもジェラルとの子供なら超可愛いんだろうなあ。

「イヤ、子供は欲しいけど、まだ早いし……」

それに、私はジェラルと結婚するなんてまだ決まっていな。何よりそんな言葉をジェラルから貰ってもいないんだから。

「俺は一生あかりを放すつもりはないよ。あかりが嫌がってもきつと放してやれない。今ならまだ間に合うよ？ 俺に捕まえられていい？」

「望むところよ。私を決して逃がさないでよ？」

言い切る前に私はジェラルの胸の中に包まれていた。

「俺はあかりをお嫁さんにする」

「何それ？ プロポーズじゃなくて宣言じゃないの？」

「だって、あかりは断らないでしょ？」

「ええ、どうしようかな……」

返事を渋ると慌てたように私の顔を覗き込み、私の表情を見てくれた。

「ちゃんとやってくれなきゃ。私だって一応乙女なんだから、言葉が欲しいんだよ?」

「俺と独占契約してくださいっ」

独占契約と言う言葉が、可笑しくてこんな時だというのに、爆笑が止められなかった。

「ちよっ、何それ。止めてよ。私を殺す気い?」

笑い過ぎてお腹が痛い。

「兄ちゃんがこう言えば即オーケーだって言うから、言ったのに……」

「兄ちゃんがそんなこと言ったの? 本気で言ってるのかなあ。兄ちゃんがプロポーズする時その言葉本気で言うつもりなのかな。相手の人に引かれなきゃいいけど……」

兄ちゃんの今後が少し心配になってしまった。兄ちゃんって全てが完璧な人なんだけど、こここぞって時の決め台詞が残念なんだよね。そんなところも可愛いから好き、なんて言ってくれる人が現れてくれればいいんだけどね。

考えにふけっている私を現実に戻すように、ジェラルルが軽い咳払いをした。

ジェラルルを見上げると、真剣な眼差しとがち合った。

「あかり、俺の生涯ただ一人の女ひとになってください。絶対に幸せにする」

「うん。私もジェラを幸せにする」

ジェラルルにきつく抱き締められて、息がつまりそうになった。それは、抱きしめられて苦しかったからというのももちろんあるが、嬉しくて涙が零れそうになったからでもある。

私が苦しくて腕の中でもがくと、ジェラルルは慌てて開放してくれた。急激に大人の姿に近づいたから、普段の力の入れ具合が調節で切れていないのかもしれない。申し訳なさそうに苦笑している。

ジェラルルの顔を見ていたら、自然と頬に手が伸びていて、私はジェラルルの頬を両手で包み込んだ。その輪郭を確かめるようになる。親指を唇に触れ、少し押してみると弾力で押し戻してくる。ジェラルルのパーツの一つ一つを確認するように触れていく。その間ジェラルルは私にされるがままで、瞳だけが私を食い入るように見つめていた。

「ジェラ。キスしてもいい？」

「俺も今、同じこと思ってたよ」

二人見つめ合い、声を立てずに笑った。

ほとんど初対面と言ってもいいその顔に、慣れてしまいたくて、どんな表情も見逃さないように観察していた。

ジェラルルの顔が近付いてくる。間近に迫るジェラルルの顔はとても美しかった。瞳の閉じられた瞼の先から延びる睫毛は女性のように長く、女性的でありながら決して女性ではありえない男らしさを感じた。

「目を閉じないの？」

「見ていたいから。どんなジェラも見たい。見ないのは勿体ないでしょう？」

視線に気付いたジェラルルが瞳を開いてそう聞いた。

「じゃあ、俺も」

私たちは見つめ合いながら深いキスをした。

第34話

夢を見た。

心を掻き乱されるような夢だった。

私がベッドに寝ていると、ジェラルルが現われた。私はジェラルルがベッドに潜り込むことを当たり前のように感じていた。まるで毎日寄り添って寝ているように、ジェラルルも当然のように横になり、これまた当然のように口付ける。毎日行っている行為のようにそれを当然のように受ける私は、自ら誘うようにジェラルルの首に手を回した。

丁寧に与えられる心地好い快楽を何の抵抗もなく受け入れていく。瞳を閉じてその快楽に酔い痴れていると、突然乱暴な愛撫に変わる。普段ない乱暴な所作に驚いて目を開けると、目の前にはリオの顔があった。突然襲いくる恐怖感と不快感に声をあげようとするが、その声はリオによって唇を塞がれることで消えてしまった。

不快な愛撫はどこまでも続き、私は全身をくまなく愛されていく。泣き叫ぶ私はジェラルルの名を何度も何度も呼んでいた。

リオが自身の欲望を果たした時、私は強い視線を感じた。

ジェラルルが私とリオの痴態を見ていたのだ。悲しそうに歪むジェラルルの瞳が私を射ぬく。決して責めてなどいないその瞳が、余計に苦しかった。

私は懸命にジェラルルの名を呼ぶ。だが、ジェラルルは悲しそうに頭を二度三度と振り、私に背中を向けてどこかへ行ってしまった。

ジェラルルの名を泣き叫びながら、目を覚ました。

あのリオに犯された感覚が生々しく、自分の体を抱き締めて声を殺して泣いた。

怖い。誰かに縋り付きたいのに、今の私を見られるのが怖くて誰

も呼ぶことが出来ない。

ベッドの上で、肩を震わせて泣いた。

「灯里。どうした？」

「兄ちゃん」

泣きじやくる私の嗚咽は兄ちゃんには届いていたようだ。

「嫌な夢を見たのか？」

コクコクと頷くと、その振動で涙が飛び散っていく。

兄ちゃんがベッドサイドまで歩み寄ると、私を抱き寄せた。

「もう大丈夫だ。俺がいるから怖い夢はもう見ない」

頭をポンポンとリズムよく叩かれると、幼い頃を思い出す。

幼い頃の私は、怖い夢を見ては兄ちゃんに泣き付いた。こんな風にポンポンと叩かれると、すぐに眠気は訪れて、怖い夢など忘れてぐっすりと眠るのだ。

「兄ちゃん、もう朝？」

「ああ、まだちょっと早いけどな」

「どんな夢を見たんだ？」

今まで兄ちゃんが私の怖い夢のことについて尋ねることがなかったので、少々驚いた。

「……怖い夢。兄ちゃんに話すのはちょっと抵抗があるんだけど…」

…」

私は、震える腕を握り締めながら悪夢の内容を兄ちゃんに話した。話している間中、兄ちゃんの表情が気になった。実際に兄ちゃんが表情を変えることはなく、無表情が崩れることはなかった。

「それが現実になることはないぞ。灯里にはジェラも俺もついてる。エロイだってメイヤだってついてるんだ。な、そうだろ？」

「そうだね。ただの夢だもんね」

私に余地夢を見るような能力なんてないのだから、たかが夢くらいで動揺する必要はないのだ。

「兄ちゃん。私ね、ジェラと生きていくって決めたよ。だから、もう兄ちゃんは自分の幸せ探してよ」

三役をこなしていた兄ちゃんが優先するのはいつも私だった。せっかく彼女が出来ても私を優先するあまり、彼女たちはみんな離れて行ってしまった。私がいくら大丈夫だと諭しても、兄ちゃんは聞き入れてはくれなかった。

「私よりも大事な存在、作って？」

「まあ、そのうちな」

きっと兄ちゃんには探すつもりはないんだろう。作るつもりが全くないわけではないところがせめてもの救いだろう。

これ以上言ってもどうにもならないのを私は知っていた。

「灯里がジェラを選んで良かった。俺は最初からリオを信頼していなかった」

「リオに何か怪しい点でもあった？」

「あったといえばあったが、なかったといえなかった」

「何それ、どつちなのか？」

私が小さく笑うと、兄ちゃんもにやりと笑った。

夢の恐怖から段々と解放されていく。強張った体から無駄な力が抜けていく。

「なんというか、俺にはあいつが危なっかしくて仕方なかったよ。本当の自分というものを把握できずに、どこにもいけず途方にくれているように見えた。あいつは、王妃を愛しているって言うてたんだろ？」

「うん」

「うーん、俺にはそうは思えないんだよ。少なからず俺にはお前を想っているように見えた。実際お前を好きだったんだろと思うよ。お前を手放せなくなるのを恐れて、慌てて切り捨てたように思える。愛していると想い続けていた王妃と初めて好きになった女。最初はどんな理由で灯里に近付いたとしても、生まれてしまった感情に戸惑っていたんだろ？」

兄ちゃんの考えでは、リオは私を好きになっただけということになる。私には、それが本当かどうか分からないが、それを聞いた私

がリオに対して何をすべきなんだろうか。

「兄ちゃんは、私に何を求めているの？」

「何も求めちゃいないさ。灯里は灯里の好きなようにすればいい」

兄ちゃんは、リオを救って欲しいと思っている。この私にだ。信賴していなかったなどといいながら、リオをよく観察し、案じていた。

「私に何が出来るのよ？ もし、兄ちゃんが言うようにリオが私を好きだったとしても、私にはジェラがいるんだよ？」

「灯里にとってリオはなんだ？」

「なんだって言われても……」

「裏切られたことを怒っているか？」

「もう怒ってなんかいいよ」

「灯里にはリオが幸せだと思うか？」

「ううん」

リオと対峙したあの時、リオが幸せだとは思えなかった。

「リオは王妃を愛していると思うか？」

「……ううん。愛の意味をはき違えているような気がした。主従関係のような二人に愛が本当にあるのかな？ いや、世の中にはそういう関係だってあるのかもしれないけど、リオが望む愛の形ではないような気がする」

リオは家庭を夢見ていた。そんな気がする。

私と小さなジェラ、そしてリオ。何度となく訪れたそんな場面で、リオはいつも楽しそうだった。幸せそうだった。

母親を亡くしたリオにとって、母の温もりというものを知らない。母の愛に渴望していたリオに優しく近付いて王妃は、ていのいい駒を仕立てあげた。

ならば……

「……母の愛」

呟けば、兄ちゃんが微笑んで頷いている。兄ちゃんも同じ考えであるらしかった。

全ては決まったというように、二人でにやりと笑う。この光景を見れば、二人が似た者兄妹であるとしみじみと思ったであろう。

「灯里、熱は下がったのか？」

「ええ、いまさら？ もう、ないと思うよ。昨日ぐっすり寝たからね」

「そうか。今日の朝飯は俺が作るからな？」

「兄ちゃんが？ 食べるんでしょうね？」

「当たり前だ」

そう言つてでこぴんをおみまいされた。

兄ちゃんが料理が出来ることくらい知っている。両親が死んで間もない頃は兄ちゃんが料理をしていたのだから。仕事から帰って、家事もなにかもをこなそうとしていた兄ちゃんを見兼ねて、二人だけの家族会議を設けたのだ。そこから、兄ちゃんは仕事、私は家事と分担を決めた。

兄ちゃんなら、全てをこなしていたかもしれない。だが、養われているだけはイヤだったのだ。

夢の余韻はもう奇麗に消えていた。その代りに心に沁み入る優しさとなんかを救いたいと思う願望が芽生えた。

第35話

一つ、困っていることがあった。

何せ私はジェラルルのお世話係を任命されていたのだ。お世話する対象が大人になってしまった場合、私の立場は一体どうなるんだろうか。

「あかりはジェラルルの婚約者という立場だろうが……、そのまま世話係で構わないのではないかな？」

王はのほほんとした笑顔をたたえてそう言った。

リオは、ジェラルルの存在は隠されてきたと話していたが、これは大きな嘘だった。

ジェラルルは、その出自から疎まれることもあったが、持ち合わせた魔力の強さからごく一部を除いては王族として認められていた。王はジェラルルを王位継承者として認め、その影響がジェラルルを疎む輩は激減していた。

そんな状況下で件の事件が起きたのだ。王は、ジェラルルは遠征中に行方不明になったと皆に報告した。

これが真相だった。この事実を知るものは本当にごくわずかなものだけだった。

さらに先日、行方不明だったジェラルルが生還したとして発表された。

これでジェラルルは堂々とどこへも出歩けるようになったわけだ。「私が今、ジェラの婚約者だなんて知られたら、ご令嬢方に何されるか分からないじゃないですか」

リオの婚約者と名乗っていた私が今度はジェラルルの婚約者だとは、流石に堂々とは名乗れまい。女の嫉妬が恐ろしいことは知っている。その対象にされたことは今のところないが、今回ばかりは危機を感じる。

「まあ、そつだねえ」

王がこんなだから、王妃に舐められるんじゃないかな、と氣のない返事にそう思わずにはいらなかった。

「そういえば、エロイは何にも知らなかったんですね？」

エロイはジェラルが長男だったことも、リオが嘘を吐いていたことも知らなかった。純粹にジェラルが末っ子だと思い込んでいたのだ。何の疑いもなく。

「エロイは王妃とリオにいいように記憶をねじ曲げられているからね。今ですら自分の母親に疑問を持っているが、幼い頃は従順だったからね」

「ああ、なんかあいつって案外不憫だよな？ 次期国王なのに」

「だが、あれはあれで臣家や国民から人気がある」

「口は悪いけど、素直だもんね。結構いいヤツだと思うよ。あいつは王妃に操られることなく、立派な王になるんじゃないかと思うんだけどな」

王妃に従順だっただけの無力な子供はもういない。

「ねえ、王妃は一体何が目的なの？」

それが私にはどうしても分からないのだ。何が不満で、何を望んでいるのか。何の為にこんなことまでしなければならなかったのか。「一大ハーレムが作りたいんだろう」

「はああ？ そんなの今だって信奉者がわんさかいるじゃんか」

「この国の民だけでは満足出来ないんだよ、彼女は。この世界の全人類から崇拜されたいと思っている。そのためなら、この国が天下を統一しなければならんと思うっている。エロイが国王になった暁には侵略を始めようと考えていた。まあ、今のエロイにその考えはないだろうがね」

「バツカじゃないのお。呆れたっ。そんなもののため？ そんなもののために……」

ジェラルは魔力を取られたのだ。そんなくだらない理由で、子供の姿にされたんだ。暗闇の中で暮らさなければならなくなったんだ。

そりゃ、嫌われるより好かれる方がいいに決まっている。だけど、好かれるために無為に人をあやめていいはずがないんだ。直接手を下すのが例え王妃でなくとも、それは大きな罪になる。それが分からないほどに、人に崇められることに溺れてしまっているのか。自分の命を削ったり、他人の命を奪ってまで得たいものがそれなのか。「どうして王妃を止めないんですか？」

「愛していたからだよ」

「え？」

「あかりは私を軽蔑するだろうね。私は王妃を愛していた。政略結婚ではあったが、私は王妃を愛していた。だが、王妃は私だけの愛では満足しなかった。自分の体を擦り減らしてでも愛を求めた。彼女は愛がなければ生きていられないんだろう」

王妃は、人の愛を得るために自分の体をどんどんすり減らしていく。愛の代償としてだ。そうまでして何故愛を得なければならぬのだ。

「そこまでして何故愛を求めてしまうんでしょう？」

「彼女はとても貧しい家庭に生まれてね。両親はその日食べる為に一生懸命に働いた。彼女に構ってやる暇もないほどに働きづめだったんだよ。懸命に働いたが結局立ち行かなくなって、彼女は有力貴族に奪われてしまったんだ。親の愛を一番欲している時期に、その愛を得られなかった。それが今の彼女のある意味病気を引き起こしてしまっただんじゃないかと思うんだ」

とても同情を誘う話かもしれない。だが、貧しい家に生まれた人間なんて山の数ほどいるのだ。寂しい幼少期を過ごした人間だってそれこそ腐るほどにいる。

自分だけが、と悲観的になっている王妃を私は良しとは思えなかった。

甘えている。

「私は、家庭が貧しくて愛を与えて貰えなかったことには同情しない。苦しい想いをしている人なんてもっともつと沢山いるんだから。」

王妃の親は何の為に働いていた。王妃に美味しいご飯を食べさせてあげたかったからでしょ？そこに愛がないなんてどうして思えるんだろう。確かに幼い心でそれに気付くのは難しいかもしれない。でも、大人になった今なら分かる筈だと思うんだけど。子を産んだ母親ならその思いが分かるはずだと思うんだ。同情するよ。愛を知らないことに。愛されることも愛することも知らない王妃に私は同情する」

愛されることも愛することも知らない王妃にとって、愛とはどんなものだと考えているのだろうか。

王妃を崇拜する国民たちに、愛はあるのだろうか。勿論あるのだろうが、その裏に隠れている自分本位な考えもあるのだろう。王妃に近づいて娘を王子の妃に迎えて貰おうとか、あの王妃を一度でいいから跪かしてやりたいとか、王妃にとり入って高い宝石を買って貰おうとか、そういうたものの方がもしかしたら大きいのかもしれない。

そんな身勝手な愛を、表面だけの愛を、一生懸命に集めようとしている愚かな王妃に同情する。

恐らく彼女が本当に求めているものは全く違うものなのだから。それに気づくことが出来ないから、いつまでたっても満足することが出来ない。

「そうだね。それを、私が教えてあげることが出来たならこんなことにはならなかったのにね」

「何弱気なこと言ってるのさつ。今からだって遅くないんだよ？本当に王妃を愛しているのなら、王妃を救えるのは王様しかいないんだから」

「じゃあ、どうしたら……？」

「そんなの自分で考えなつ」

私が一喝すると、見事に縮みあがった王は、それでも彼なりにいい顔をしていた。その顔が出来るならば、王妃が目覚めますのも遅くないかもしれない。

「ねえ、王妃が体を擦り減らしてるって自分の寿命を代償にしてるってこと？」

王が私の目を強く見て頷いた。

王妃の寿命が今どのくらい残っているのか、考えると恐ろしくなる。

愛を得られるのなら、自分は命を失ってもいいってか。そんなの下らな過ぎる。何かを代償にしてしか与えられないものは、愛ではないのだから。

「王様、あんたの腕の見せ所でしょう。王妃が死ぬ前にあんたの愛みせちゃいなよ」

「縁起の悪いこと言わないでくれよ。でも、そうだね。そろそろ本気で彼女に思い知らせないとね、私の愛を」

若干黒さを感じる微笑みに、私はこれで王妃も大丈夫なのではないかと少し安心した。

「あつ、ヤバイ」

遠くから怒気を含んだ足音が近づいてくる。

「あかりは愛されてますね？」

「かなりね」

さあ、私の愛すべき人に王の執務室に籠っていた理由をどう説明しよう。

第36話

文字通り駆け込んできたジェラルルに、ずるずると連行されて廊下に行く。

「ジェラ。みんな見てるよ。恥ずかしいから下ろして」

ずるずると引き摺られていたのも最初だけ、あんまり私が暴れるので、しまいには肩に担がれる形になった。

「ダメだよ。また、父上のところを一人で行くでしょ？　いつの間に仲良くなつて、俺聞いてないよ？」

「別に仲がいいわけじゃないけどさ、ただ、私の立ち位置とかさ、色々相談しに行っただけ」

「俺も一緒に行くのに」

「だってジェラは兄ちゃんと訓練だったでしょ？」

大人の姿をなんとかキープ出来るようになってきたジェラルルは、私を守るために剣を習い始めた。　元々剣の腕がたつとはいえ、長い間ご無沙汰して腕は大分鈍っているようだ。

わざわざジェラルルが兄ちゃんと訓練中にこっそりと王に会いに行ったというのに、なんだってバレてしまったんだろう。

「そうだけど、男と二人きりなんて危険だよ」

「ハハッ、危険ってジェラのお父さんじゃん。大丈夫でしょ」

「そんなの分からないっ。突然獣になつたらどうするの」

「ただだけ信用ないんだ、王様よ。」

呆れて大きなため息を吐いた。

「信じる信じないは自由だけど、私の心の中にジェラ以外に入る隙間はないよ。ジェラだけが好きなのにな……」

慌てたように体を肩から下ろされて、がっしりと両肩を掴まれた。

「ちよつと痛いってば」

不満を漏らしたが、それはすんなりとかわされ、顔を間近に覗き込まれて怯んだ。

ジェラールは忘れているかもしれないが、ここは人通りの多い廊下のだ真ん中なのだ。

何かに夢中になると、周りが見えなくなるところ、どうにかしてほしい。

「ジェラ？ 近いんだけど？」

「うん、そうだね」

「そうだねじゃないでしょ？」

「俺ね。あかりのこと信じてるよ」

「そっか、それはありがとう」

「キスしてもいい？」

「ダメ」

そう言ったのに、につこりと笑って唇を素早く重ねた。

「やるなら聞くなっ」

ハハッ、と笑って漸く離れていく顔を殴り付けてやりたかった。

まあ、軽いキスだったので誰にも見られて……

「こんなところで、はしたないと思わないのですか？」
いた。

しかも、よりによってこの方ですか。

今まで王城で会ったことなんてなかったのに。このタイミングで来ちゃいましたか。

「これは母上、こんなところでお会いするなんて珍しい。いつも部屋にこもっているあなたがどうなさったのですか？」

先ほど王と散々語り合ってきた王妃が無表情で私を見下ろしていた。

息子を無視して私を凝視するのは止めてくれまいか。

「ご、ごきげんよう、王妃様」

「ごきげんよう、なんて生まれて初めて使用した言葉がなんだかしっくりなくて、宙をぶらぶらと無惨に落ちていくようだ。」

「ごきげんよう。私はあなたに会いに来たのです。少しお時間よろしいかしら？」

誰だろう、王妃が心を病んで話せないと言ったのは。だが、実際王妃の声を聞いたのは初めてだった。

それにしても、大丈夫なんだろう。顔が青白くげっそりしているように見える。

「私ですか？」

「ええ。出来れば私の部屋に来ていただけないかしら。ちょっと体調が思わしくないものだから」

「あかり。行かないほうがいい。何をされるか分からない」

耳元でジェラルルが囁いた。イヤ、ちよつと耳がこしょばゆいで止めてくれるとありがたい。

「大丈夫よ。心配ない」

ジェラルルに短く答えると、王妃に向きなおった。

「ぜひお伺いさせていただきます」

「母上、俺も同行します」

「好きになさい」

王妃のジェラルルに対する態度は恐ろしく冷たいものだった。

王妃の私室は素晴らしく広いものだった。思っていたような煌びやかさも派手さもなく、ただただだっ広かった。

「何にもない部屋でしょう？ 私、物欲はないのよ」

物欲はないが愛されたい欲はあると。その二つが丁度いいバランスを取れていたら良かったんだけどね。

「そうなんです」

どうでもいいが、王妃付きの侍女の目が強くて鋭い。お茶を入れる手はしっかりと動いているが、目だけがぎろりと私を睨んでいる。「お茶を入れたら下がってちょうだい」

「ですがっ」

「下がってちょうだい」

冷たく畳み掛けるように言い放たれて、侍女が部屋を辞した。

「あなたとこうやってお話するのは初めてね？」

「そうですね」

ニコニコと初対面の時にはなかったその笑みに白々しさを感じた。
「あなたは私が嫌い？」

いきなりド直球だな、と内心呆れたがその質問に答えるべく口を開いた。

「好きや嫌いを判断できるほどに私は王妃様と会ったり、話したりしていませんので今の段階ではなんとも。ただ、話を聞いている分には……、私とは相容れない存在なのかもしれないな、とは思いますが……」

「私はあなたが嫌いよ」

どこまでも笑顔で放たれる言葉はどこまでも感情がこもっていないように思える。ただ淡々と言葉が紡がれているだけ。

「そうですね、それは残念ですね」

「どうしてかは気にならないの？」

「はあ、まあ予想はつきますんで」

王妃にとっては私はことごとく邪魔な存在だろうからね。嫌われて当然と言えば当然なのだ。

「私を愛さない人間なんて好きになれないわ。だから、あなたも嫌い。ジェラルル、あなたもね」

ジェラルルの横顔をちらりと覗き見ると、実の母親と睨み合っていた。

「王妃様は誰が好きなんですか？」

「私を愛してくれる人なら誰でも」

「そういうんじゃないですよ。誰かを胸が痛むほどに想ったことはありませんか？　って聞いてるんです」

私の問いに少し小首を傾げたあと、再び口を開いた。

「ないわ。だって私は愛される側の人間だもの」

「そうですね。お気の毒ですね」

「どうしてかしら」

私の一言に気を悪くしたのが手にとるように分かる。

「100%愛して、120%愛してくれる人と一緒になるのが幸せだってどこかで聞いたことあるんですね。0%愛して、120%愛してくれる人と一緒になっても幸せにはなれないんじゃないですかね。アンバランスすぎます。いくら愛はいらないって思っているも、そこに欠片の愛もないと人は離れていってしまうと思いますよ。人を愛したことがないから、愛を求めてしまう。王妃様はそんな方なんだと思いました。愛を知らないからこそ、愛に執着しているように見えます」

「みんな私から離れていってしまうとあなたは思うのね？」

「何かを代償にした愛は本当の愛とは言えないんじゃないでしょうか？ 愛は自然と自分の心の中に芽生えるもので、人工的に作るものじゃありません。愛して欲しいなら、人を愛すべきだと私は思います。人は人の想いに応えようとするものだと思います」

「みんな私から離れる？ そんな馬鹿な……。みんな私を愛してくれているのよ」

「みんな離れていくわけではありませんよ。本当にあなたを心から愛してくれている人もいます。あなたはその人を探してあげて下さい。本当の心からの愛は、大勢の偽りの愛よりももっともつと大きいものですよ。あなたのその瞳でよく見て下さい。必ず見つかるはずですよ。……すみません。説教染みた生意気なことばかり言つて。私たちはこれで失礼します」

私の言葉が王妃にどの程度伝わるのか分からない。ここからは、王が王妃の心を溶かす番だ。一度失敗した王なら、今度こそリベンジなるんじゃないだろうか。

「ああ、そうそう。言い忘れていました。愛していたんですよ、あなたのご両親は。心の底から、あなたを」

第37話

「ねえ、ジェラ。ジェラは王妃を憎いと思う？」

私は隣を歩くジェラルに遠慮がちに問い掛けた。

もう振り返っても王妃の私室の扉は見えない。

王妃は最後までことごとくジェラルを無視していた。まあ、最後の方は取り乱してそれどころではなかっただろうが。

あのダメージを見ると、王妃がどれだけ人から意見されてこなかったかが分かる。大抵の人は王妃の美貌に酔いしれ、言いたいことも忘れてしまうのだろう。

「憎んでないと言ったら嘘になる。けど、今の王妃を見ていたら憐れに思えてくる」

「そっか」

殺したいほどに憎んでいると言われたらどうしようかと思った。すぐには無理かもしれないけれど、きっと王は王妃の心を変えてくれる。

そうしたら、ジェラルは王妃を受け入れられるだろうかと心配だったのだ。

「俺にはあかりがいるから、憎しみて感情が抱けないんだ」

「そうなの？」

「ああ。……あかり、少し庭園に寄って行かないか？」

「いいねえ」

子供の姿の頃はよく行っていたが、最近は私の身の危険やジェラルの訓練なんかでなかなか外に出して貰えなかった。

久しぶりに芝生の上で寝っ転がるのもいい。

久しぶりに庭園に足を踏み入れると、久しぶりな顔と遭遇した。

「あっ、チェスっ」

すっかり野性生活に馴染んでしまったチェスは、私を捨てて森を

選んだ。いつの間にか可愛らしいガールフレンドまで作って……、イヤ奥さんだったようだ。チェスの肩ごしから小さな存在がよじ登って来て、それから私の腕の中に飛び込んだ。

「ちっちゃーい。いつの間に子供まで作って。ちゃっかりお父さんになったわけだ」

満足気にキツと鳴くチェスは、私の肩の上で跳ねていた小猿ではなく、立派な親猿で、誇らしいやらちよっぴり寂しいやらで涙が零れた。

私に巻き込まれてこの世界に来た小さな存在が、今幸せだということ嬉しかった。

子猿が私の腕からチェスの元に戻ると、チェスは子連れて森の中へ姿を消した。

「チェスはもう森の住人なんだね。もう帰ってこないんだね」

ぼつりと呟くと、ジェラルルの手が私の肩を摩ってくれた。

「別れは辛いけど、チェスが幸せなら……」

「うん、そうだよ」

ずびずびと鼻を嚙り上げる私をジェラルルは胸の中に納めた。

「あかり。俺、ずっと考えていたことがあるんだ」

「ん、なに？」

胸から顔を放して、見上げた。ジェラルルの優しい瞳が私を受けとめてくれていた。

「あかりのいた世界に行こうか？ 向こうで結婚しよう。俺の魔力が完全に戻ったら、可能だと思うんだ」

「日本に？ 日本に行ったらジェラは家族と離れることになるんだよ？ それにジェラの魔法で帰れるの？」

突然の話に頭の中が混乱していた。なにせ、もう二度と日本には帰れないと諦めきっていたのだから。

「俺にはこの国は過ぎにくいんだ。あかりが住んでた国を見てみたいし、あかりが一緒ならきつと幸せになれると思う。元々持っている魔力が戻れば、異空間を渡ることも可能だと思う」

「もう一度日本に行けたらって思わなくもなかったけど、本当にそれでいいの？ ジェラは後悔しない？」

日本に帰れるなら嬉しい。親も家もないけど、故郷はやはり日本なのだ。この世界は平和でいい国だと思うけど、城の環境は私には馴染めないのだ。所詮庶民ということなんだろうけど。

「後悔なんてしないよ」

「それならいいんだけど。ジェラは私が幸せになれるようにって考えてくれたんでしょう？ でもね、それがジェラにとって不本意なことだったり、嫌なことだったら無理はしないでね。私はどこだって生きていけるだろうし、ジェラがいてくれればいいんだからね？」

「大丈夫だよ。無理なんてしていない」

大人版ジェラルに慣れてきたとはいえ、ふと少年のように微笑まれると、つい見惚れてしまう。今、この瞬間もそうで、固まってしまった私をジェラルが覗き込んでいる。

私が具合を悪くしたと勘違いしたジェラルは、芝生の上に胡坐をかき、その上に私を横抱きにした。

「ジェラ。別に私具合悪いわけじゃないよ？」

「具合が悪くないならそれでいいんだ。俺がこうしたいから、ダメだった？」

「いいけど。ちょっと恥ずかしい……かな」

終始私の顔を覗き込んでいるジェラルの視線から、さりげなく逸らした。このままあの瞳に見つめられていたら、大胆にも自分から唇を求めてしまいそうだ。

近くにいてもっと触れたいと思い、キスしてほしいと望んでしまう。その瞳に私以外を映せなければいい、なんて独占欲を感じることに戸惑いを感じていた。

「どうして目を逸らすのかな？」

「だって……」

「ん？」

こんな恥ずかしいことを私に口にさせるつもりか。

「だって、私、ジェラに触って欲しいって思っちゃうから」

「触ってもいいの？」

大きく目を見開いたあと、嬉しそうに顔をくしゃりと崩した。

「恥ずかしいから聞かないで」

もう目線を合わせることもすら出来ない。自分が淫らな女になってしまったようだ。

ジェラルルの子供じゃない大きな手が、私の頬に触れる。

自分から望んでいたこととはいえ、実際そうなってみると気恥ずかしくていたたまれない。

ジェラルルの手は私の体の輪郭をなぞるように下へと下りていく。

「怖い？」

ギョツと目をつぶっていた私を気遣うようにジェラルルが問い掛ける。

目を開ければ、あの瞳が私を覗き込んでいるだろう。怖いもの見たさでも言うべきか、そろそろと目を開けた。心配そうにしていた瞳が安心したようにキラリと輝いた。

「あかり。可愛い」

まさか、あのジェラルルに可愛いと言われるようになるとは。

可愛かったのはジェラルルの方なのに。

「さすがにこれ以上触れるのは止めておくよ」

「どうして？」

「歯止めが利かなくなるよ。初めてが屋外なんて、あ、あかりがそういうのを望んでいるなら俺としては叶えるつもりでいるけど」

子供の姿の時は、私が欲しいと、こちらが狼狽えるほどに積極的だったのに、今は一番に私のことを考えてくれる。

きつと私には分からない痩せ我慢もしているんだろう。

その優しさが心底胸に染みて、私はジェラルルの唇に精一杯の愛を捧げた。

ジェラルルは、私を120%愛してくれる人だ。十年後の私は幸

せにジェラルルの隣で笑えているだろう。そんな未来が容易に想像できた。

「私にはそういう趣味はないよ」

「そっか」

と、少し残念そうに頷くジェラルルを見て、案外外でやるのが好きなかもしれないと疑った。

「そうだよ」

苦笑を浮かべるとその唇を素早く塞がれた。

「あかり。キスは許してくれるでしょ？」

私の返事を待つこともなく、再び塞がれた唇は深く深く私を翻弄した。

そもそも私には、屋外で（人前で）イチヤイチャするという概念がない。手を繋ぐくらいはいいかもしれないが、人前でキスなんて恥ずかしすぎる。ここは、人は通らないし、誰に見られているわけでもない。ここでならいいではないか。と、自分に都合のいい解釈をしたが、ジェラルルとならどこにいてもキスをして欲しいと考えている自分に少し驚いている。

「ジェラ。……今夜、部屋に行ってもいい？」

唇を解放された私が言った言葉に、ジェラルルは仰天しているように、その顔が可笑しくて笑った。

第38話

メイヤが私の部屋を後にして、しばらくしてから私はいそいそとベッドから抜け出した。

メイヤには、ジェラールと私が恋人同士だと知られているわけだから、別にこそこそする必要はないのだけれど、やはり知られるのは恥ずかしい。

これからジェラルルの部屋へ向かうとしていた。流石に夜着だけで外に出るのは抵抗があるので、肩にガウンをかけた。

私がノブに手をかけ自室の扉に出ようとした時、何者かに行く手を阻まれた。私は顔をぶつけた先が人の胸であることに気付いた。そして、それが誰の胸であるのかも。だから私は慌てたのだ。嫌なことを思い出して、瞬時に身を退けた。だが、それを遮るように手を取られ、引き戻された。

「ジェ……」

最後まで口を開くことを許されなかった。

「駄目ですよ、あかり。こんな時間に大きな声を出しては」

口を塞がれたまま、目だけを上げて声の主であるリオを睨み付けた。

「どうして私がここにいるのか不思議ですか？」

私がぶんぶん頭を縦に振れば、優雅とも取れる笑顔を振りまきながらとんでもない台詞を吐いた。

「あなたを奪いに来たんです。ジェラールから、ね」

不穏な光がリオの瞳に見えて、私は身を掬って抵抗するが、男の力に叶うはずもなかった。

「私は今夜、あなたを犯します。ジェラルルの手に完全に落ちる前に」

まるで今夜ジェラールとそうなるのを阻止するために現れたかの

ように感じた。

なんとか声を張り上げようとするが、リオの手はそれを完全に塞いでいた。

引き摺るように寝室に連れていかれ、乱暴にベッドに投げ出された。その隙を見てジェラルルの名を口にしようとするが、それすらも許されず、唇で塞がれてしまった。

じたばたと手足を動かすが、リオの体は少しもぐらつくことはなかった。

「ん、イヤッ。ジェラ」

「そんな声でジェラルルに届くと思いますか？」

蚊の鳴くような声しか出せない自分が情けなくて、悔しかった。

こんな声じゃジェラルルに声など届かないだろう。

「ど……して？」

「あなたがいけないんですよ？ 私に気付かせてしまったんですから」

「いったい何を？」

恐怖のあまり声が上手く出せない。

「私の母上への愛が偽りだと気付かせてしまった。そして、私が求めているものが何かを同時に気付かせてしまったんですよ」

リオは饒舌だった。私の体をしっかりと固定して、私を見下ろしながらなおも語る。

「私が本当に欲しいのはあかり、あなたです。あなたを騙すために近付いた私が、あなたの魅力に惹かれてしまった。ミイラ取りがミイラになってしまったんですよ。可笑しいでしょう？」

リオの瞳には、ジェラルルが私を見ると同じような情欲が浮かんでいた。

今の私には、聞きたくない言葉だった。

「あなたが好きだ。愛している。あなたの心が手に入らないなら、この体に忘れられない傷をつける。そうすれば、ジェラルルに抱かれる度にあなたは私を思い出す」

私は首を左右に振った。その振動で目尻にたまっていた涙が飛び散った。

「リオは、絶対に後悔する。私を傷付けたことで、自分自身を責めるようになる。リオが笑えなくなるのはイヤ」

擦れた弱々しい声しか出て来なかったが、一生懸命に伝えた。

確信があつたから。そんなことをしたら、リオの心が壊れてしまう。一時的な感情で自分自身を傷付けて欲しくない。

「あなたはいつもそうだ。自分のことより、人のことばかり案じてる。そんなことを言われて私が、止めると思ってるんですか？」

「思ってる。思ってるよ、リオ。私が知ってるリオはいつも優しくったもの」

お願いだから、自分を落とさないで。あなたには、これから幸せな未来が待っているんだから。

「欲しい。あかりが欲しい。欲しいんだ」

心が痛んだ。その切実な想いに私は応えることが出来ないのだから。

「リオ。放して？」

「イヤだ。放さない。あかりは私のだ。私を愛してくれていたはずだ。もう一度私の元に戻って来てくれ」

駄々を捏ねる子供みたいに首を振るリオを妙に醒めた目で見ていた。落ち着いてリオを観察していた。

「恋人には戻れないのよ、リオ」

「イヤだ戻って来て……、母上」

最後の言葉に目を瞠った。

リオは私と亡くなった母親を重ねて見ているのだ。よく見れば、リオの目は虚ろだ。私を見ているようで見ていない。夢と現実の狭間にいるのだと思った。

「大丈夫よ、リオ。あなたは一人じゃないのだから」

混乱し始めたリオの頭を優しく撫でた。母が小さな子供にするように愛情をこめて。

その時、勢い込んでジェラルルが部屋に入ってきて、私たちを見付けると固まった。

ああ、あの夢と酷似している。けれど、リオの状態が少し違っていた。

リオはあんなに大きな音がしていたのに、ジェラルルが入室したのに気付いてさえいなかった。

「母上……」

うわごとのように呟くリオの様子を見て、ジェラルルも首を傾げた。

ベッドに横になっていいる私たちを見て、飛び掛かろうとしていたジェラルルは、動きを戸惑いながら止めた。

私は目でジェラルルに語り掛けた。大丈夫だからと。

「リオ、あなたは一人じゃない。大丈夫、大丈夫よ」

拘束の手が放れ、リオが顔を覆って肩を震わせた。

体を起こした私は、リオを頭の上から覆いかぶさるように抱き締めて、背中を擦った。

「ごめんね、リオ。あなたを残して先に行ってしまった。でも、あなたを愛しているから。いつでも見守っているから。幸せになって」

リオが声を上げて泣き始めた。

リオはいつ泣いていたんだろうか。心細い夜、誰に甘えていたんだろうか。

私は、思う存分リオを泣かせた。溜め込んでいた分を全て吐き出させた。

やがてリオから寝息が聞こえ始めた頃、私は自分のベッドにリオを寝かせ、茫然と立ち尽くしているジェラルルに歩み寄った。

「ジェラ。ありがとう」

「なんで、ありがとう？」

「耐えてくれたでしょう？ 本当はリオを殴り倒したかったんですよ？」

「今でも本当は殴りたい。でもあかりは止めるんだろう？」

私を分かってくれているジェラルルに感謝した。

「リオに必要だったのは母の愛だったんだよ。これで前を向けるようになったくれるといいけど……」

「大丈夫だよ。俺だってリオのことは心配なんだ。父上だってきつとそう。リオを見捨てる人なんていないよ」

「うん。……ジェラ、残念だったね？」

「そうだね。でも、俺たちはこれからずっと一緒だから……っていうのは痩せ我慢。本音を言えば、今すぐ押し倒したい。無理だって分かってるよ、けど、キスは拒ませないよ」

抱き締められて、キスを受けた。リオに無理矢理されたキスが浄化されていくようだった。

今頃になって、恐怖が襲ってくる。涙がたらりと零れ落ちた。

私がリオにしたように、ジェラルルは私の背をなぜ、大丈夫だ、と何度も囁いた。

ジェラルルがいなければ、こんなに気丈には振る舞えなかった。ジェラルルが見ていてくれていると分かっていたから、リオを抱き締めることが出来たのだ。

「ジェラ、好き。大好き」

何度も何度も口ずさむ私の言葉に、ジェラルルはいちいち全部応えてくれていた。私もリオと同じようにジェラルルの胸の中で泣き、泣き付かれてそのまま寝てしまったようだ。

第39話

翌朝目を覚ましたリオは、どこまで憶えていたのかは定かではないが、私に対して深く謝罪した。

まだ思い出すと怒りが込み上げてくるのか、私の隣でジェラルが拳を握り締めていた。私がジェラルの怒りを抑えようと腕を掴むと、問題ないというように頭を振った。

「ジェラルが望むなら殴られても構いません」

「いや、殴らないよ」

「卑怯なやり方をしたと反省してはいますが、あかりに言った言葉は嘘偽りないものです」

ジェラルはリオが言った言葉を全ては聞いていなかった。私に疑問を投げ掛けるように視線を送ってくるものだから、正直困ってしまった。

「ありがとう。でも……」

「分かってます。痛いくらい分かっています。ただ、勘違いされたままでは嫌だったので」

私はどう返していいのか分からず、黙ってしまった。そんな私を苦笑を浮かべてリオが見ていた。

「もう、ジェラルやあかりの命が狙われることはなさそうですよ」

「それって、王様が上手いことやってるってことっ？」

リオがにつこりと微笑んだ。

そうか、王は王妃に伝えられたんだ。惜しみのない王の愛を。

「良かった」

「ありがとうございます、あかり」

そう言って両手で私の手を取り、ぶんぶんと振った。

隣から不機嫌なオーラがもんわりと漂ってくる。それを恐らく分かってやってるリオはことごとく笑顔だ。

「じゅあ、私はそろそろ行きます」

リオは、私たちに背を向けた。去りぎわ、扉の前で振り返りこう言い捨てて。

「ジェラルル。私はあかりを諦めたわけではありませんから、隙があればいつでも奪いますよ」

にやりと笑って、言い逃げして出ていった。

ジェラルルが今にも追い掛けて殴り飛ばしてしまいそうな勢いだっただけで、必死で引き止めた。

その日の午後、ジェラルルが兄ちゃんと訓練中、ふらりと部屋を出た。

リオはもう大丈夫そうだと、言っていたが、兄ちゃんとジェラルルは私の一人での外出を控えるようにと言いつけていた。が、窓から見える空があまりに美しかったので、誘われるように出て来てしまったのだ。

気分よく歩いていると、見知った顔を見付けて、足を止めて、にやりと笑った。

見知った顔が二つ、丁度別れるところだったようだ。スススッと近寄り、耳元で囁いた。

「まるで付き合い始めた恋人同士のようですね、王妃様」

「きやつ」

誰もいないと踏んでいたのだろうか、それは甘い。意味もなく歩き回るのが大好きな私がいることを忘れてはいけない。あ、王妃は私のことなんて知らないか。

「愛を知ったんですね？」

「……」

恨めしそうに私をねめつめた。が、あんまり迫力がない。口元が緩んで締まらないからだ。

「良かったですね。これでみんな幸せになれます。もう、私やジェラの命を狙ったりしませんよね？」

「もう……、しないわ」

「それならいいんです。じゃあ、お幸せにつ」

あんまり私が付き纏うのもイヤだろうし、私が聞きたかった言葉も聞いた。長居は無用だろう。

「あかりっ」

振り返り次の言葉を待ったが、なかなか出てこないようだったので、頭を下げたて再び歩きだした。

「ごめんなさい。あの子にも、そう伝えて欲しいのよ」

振り返って大股で王妃の前まで戻って来た。王妃は私の行動に目を丸くしている。

「イヤです。本当にそう思うなら、自分で会いに行つてきちんと伝えるべきです。私は伝言しませんよ」

同じ城内に住んでいるのに他人に伝言を頼むなんて馬鹿にしている。

親子だから、今さらどんな顔をして会って伝えればいいのか分からないのだろう。でも、逃げたらダメなんだ。

「それでは、今度こそ失礼します。どうするのがいいのか、よく考えて下さいね。私たちが消える前に」

「消える？」

私はそれには答えずにずんずんと歩き去った。

よくよく考えるべきだ。王妃には今、それが必要なのだ。

角を曲がるときにちらりと王妃を見たが、先ほどと同じ場所で考え込んでいるようだった。

「あかりっ。あの後リオに会わなかったか？」

戻ってくるなり詰め寄るジェラルに苦笑を浮かべる。

「会ってないよ。心配すぎ。でも、リオには会わなかったけど、王妃には会ったよ」

兄ちゃんも私に詰め寄り、二人が同時に同じ言葉を口にする。

「大丈夫だったか？」

綺麗にハモツたのが可笑しかったが、二人があまりに真剣だった

ので慌てて引き締めた。

「もう大丈夫だよ。私の命もジェラの命ももう狙わないって言うてたから」

「どういった心境の変化だ？」

兄ちゃんが意味が分からんと言いたげに首を傾げた。

「たった一つの大きな愛に漸く気付いたってことだよ」

兄ちゃんには、逐一報告しているので、王と王妃のことも話してあった。兄ちゃんは、すぐに合点がいったのか一つ頷いた。

「ねえ、ジェラ。本当に日本に行くつもり？」

私がそう尋ねると、返ってきたのはジェラのものではなかった。

「『どういうことだ（ですか）？』」

重なった声は、エロイとメイヤのもので丁度部屋に入って来たところだった。

「うわっ。びつくりしたなあ。そんな大きな声出さなくても……」

「そんなことはいいつ。どういうことだっ。二ホンというのは確かお前が住んでた国だったよな？」

「そうですっ。あかりは帰ってしまうんですか？ 確かもう戻れないって言っていたじゃないですか」

「ちよつとちよつと、とにかく落ち着こうか」

私が宥めていると、その答えはジェラルから発せられた。

「俺が提案したんだよ。俺の魔力が戻ったら日本に渡って向こうで暮らそうかって」

「本気なんですか、ジェラル殿下」

「うん、そうだね。それがいいかなって思ってるんだよ」

本当にそれでいいんだろうか。私は、ここに留まった方がいいように思うのだ。事態は好転してきているのだ。ジェラルにとって住みづらい国ではなくなりつつあるのではないか。私の家族も家もない日本に帰るより、完全に修復していなくてもジェラルの家族がいるここに残るほうがいいように思える。

「ジェラ。まだ、もう少し考えてみようよ。もし、日本に行くにし

ても、私たちに待っている人はいないんだから、急ぐ必要はないんだからさ」

「うん。あかりがそう言うなら」

「うん」

そもそもまだジェラルルの魔力は戻っていないのだ。そう、リオの邪魔が入ったことにより、私たちはまだ……。

「とにかく今すぐ行ってしまうわけではないのですね？ 良かったです。急にお別れだなんて悲しすぎますもの」

メイヤが別れを悲しんでくれたことが、不謹慎ながら嬉しかった。「まだ、しばらくはここににいるから、これからもよろしくね」

「はい。もちろんです」

嬉しそうなメイヤと対照的に急に黙り込んでしまったエロイは陰しい表情を浮かべていた。

「エロイ？ どうかした？」

「イヤ。なんでもない」

無愛想に辛うじてそれだけ吐き出すと、何も言わずに部屋を出ていってしまった。

「何よ、あれ？ なんか感じ悪いな。もしかして、さっさと日本に帰れってことなのかな？」

「イヤ、違っだろう。我が妹ながら鈍感で気の毒になるな。まあ、その方がいいのかもしれないけどな」

「ええ？ 言ってる意味が分かんないよ、兄ちゃん」

そこにいる三人が私を呆れた顔で眺めていたが、私は首を傾げるしかなかった。

第40話

しばらく平穏な日々が続いていた。

私は王妃に、謝罪はジェラルル本人に言うように言ったのだが、その王妃はまだ姿を現してはいなかった。このままこないつもりだろうか、疑いたくもなかったが、きつとくるだろうと心のどこかでは信じていた。

王妃の謝罪があれば、ジェラルルとの関係も何らかの変化があるんじゃないかと少なからずの希望を抱いていた。

「ジェラ。準備できた？」

「うん。出来たよ、行こうか」

身の安全が保障された今、私とジェラルルは兄ちゃんとメイヤを連れて町に出る計画を立てていた。

そして今日が町散策の日であった。

私が城外に出るのはこれが初めて、ジェラルルは昔に出掛けたことはあるが、とにかく久しぶりで妙に朝からテンションが高かった。兄ちゃんは、馴染みの兵士と夜に出ていつては一杯飲んでくることもあるので、メイヤよりも詳しいかもしれない。

「俺が詳しいのは飲み屋だけだぞ」

とは言うものの、飲み屋で知り合った数多の顔見知りがここにいるのだろう。

王都というだけあって町は大いに賑わっていた。

珍しい黒髪の男女と銀髪の長身の男という一風変わった一行は注目の的であったが、それを気にする余裕はなかった。

真新しいものを見付けてはジェラルルの手を取り引き摺り回す私は、そんな視線に気付きさえしなかったのだ。

当初の予想どおりそこかしこに兄ちゃんの知り合いが存在し、そ

の都度サービスしてもらえて得をした。

大きな驚きと言えば、兄ちゃんの知り合いの女性に出くわした時のメイヤの態度だろう。いつもは笑顔を絶やさないメイヤがこの時ばかりは無表情になる。

おお、これはラブなのではないかつ。ついに、兄ちゃんにも新たなラブが生まれるのではないかつ。

「そつと見守っていようね」

そんな私を嗜めるようにジェラルルが言う。

私が二人をくつつける為に奮闘するだろうことを予見してのこの発言、図星なだけに言い返せない。

「ジェラは気付いてたの？」

「うん。メイヤはいつも兄ちゃんを見てるから」

そんなあからさまな態度を取っていたのにも関わらず、今さら気付くつて、私つて案外鈍感だったんだろうか。

「そうだったんだ。でも、あの二人がくつついたら嬉しいな」

兄ちゃんの気持ちがメイヤに向いていてくれるといいのだが。兄ちゃんの気持ちは、私では推し測ることが出来ない。あまり顔や表情、態度に出すタイプではないのだ。私に対するシスコンぶりは惜しみなく出すのだけだね。

「兄ちゃんはどうかのかな？ 私ね、いつも心配なんだ。私の心配ばかりする兄ちゃんだから、それが原因で好きな人に逃げられちゃってるんじゃないかって」

「兄ちゃんなら大丈夫だよ。本当に好きな相手ならなにがなんでも引き留めるだろうし、そうしなければそれだけの相手だつてことだと思う。まだ、あかりよりも大事な存在が見付かってないんだよ」ジェラルルが言うとおりならいいんだけど。

「その相手がメイヤだったらいいな」

小声で呟いた私の言葉に、ジェラルルは笑顔で頷いた。

私はそつと後方を歩く二人に視線を送った。メイヤはとても楽しそうで、その楽しそうなメイヤを優しい笑顔で包み込んでいる兄ち

やんが目に入る。

私が何をするともなく、二人は恋人になるのではないかと思わせた。

「もし、私とジェラが結婚したら家族が一気に増えるでしょ？ それに、兄ちゃんがメイヤと結婚すればメイヤの家族とも家族になれるんだね。ずっと兄ちゃんと二人だけだったから、凄く嬉しい」

私とジェラルが結婚すれば、私に再び父と母が出来る。そして、兄や弟や妹までできるのだ。まだ会ったことはないが、叔父や叔母、従兄やとは、大きなつながりが出来る。家族の繋がりがなかった私と兄ちゃんにとって家族が出来ることは何物にも耐えがたい宝物になるだろう。

「そうだね……」

そう呟いたあと、ジェラルが難しい顔で考え込んでしまった。

一体何をそんなに深刻そうな表情で考えているんだろう。

「ジェラ。どうしたの？」

「あかりのためと思っていたことが、本当は違っていたのかもしれないと思ったんだ。うん、そうかもしれないね」

何をどう納得したのか、ジェラル一人で何かを納得してしまっ

た。
首を傾げるが、ジェラルはそれ以上私に教えてくれるつもりはないようだった。

「あかり、そろそろおなか減らない？ お昼はあそこで食べるなんてどうかな？」

話を逸らした感の否めないジェラルの提案を不審に思うものの、確かにそろそろおなかがよく頃だった。それに、ジェラルが指さしたお店は、オシャレなオープンカフェだった。

「うん。あそこにする。兄ちゃんっ、ご飯、あそこで食べよう」

お店を見てテンションが上がった私は、人目もはばからず大きな声で兄ちゃんに話しかけた。興奮すると何処でも大きな声を出してしまう私の癖を心得ている兄ちゃんは、そんなことでは決して動じ

ない。笑顔で頷いて、私たちに合流するべくメイヤをエスコートして歩く速度を上げた。

ジェラルドが提案したそのお店は、結局のところ兄ちゃんの知り合いの店で、そこには顔見知りのウェイトレスがいるようだった。

「ヒカル。私に会いに来てくれたのねえ。嬉しいわ」

馴れ馴れしく兄ちゃんの肩に手を載せ、色気をこれでもかと思しめる若い女性に、メイヤの表情が一瞬にして凍りついた。それを見た私もついでに凍りついたのは言うまでもない。

「別に君に会いに来たわけじゃないよ。食事をしに来ただけだ」

案外そつけない態度に、この女性にはあまり良い思い出がないのではないかと思われた。

「相変わらずつれないのね。今日はどういった御一行様なの？ 女の子も連れているなんて珍しいのね？」

「君には関係ない。注文をしたいんだが、いいかな？」

兄ちゃんが少しも笑顔を見せないのも珍しい。凍り付いていたメイヤもそれを見て、少しは融けて来ているようだった。

一応仕事はこなすその女性は注文をとると、一旦厨房へと戻っていった。

「兄ちゃん、あの人苦手なの？」

「苦手も何もあれは同僚の恋人だ。それなのにあんな風に俺に色目を使うもんだから、俺と同僚の仲がぎくしゃくしてきている。まさか、彼女がここで働いているとは知らなかった」

「ふーん。兄ちゃんは断ってるんでしょ？」

「イヤ、別に好きだと言われたわけではない。だが、あああからさまな態度を取られるとこっちも困る。灯里、兄ちゃんの恋人のふりをしてくれないか？」

恋人の件になったとたんに兄ちゃんの表情が緩んだ。

まあ、私が兄ちゃんの恋人のふりをするのは別に構わないけど、兄弟だつてバレないかな？

「兄ちゃん。あかりは俺の恋人だからダメ。恋人のふりをするなら、

メイヤに頼んで」

まさか、兄ちゃんにもヤキモチを妬いたか。

まあ、それも半分、あとの半分は兄ちゃんとメイヤにラブを届けようって魂胆だね。

「メイヤ、頼んでもいいか？」

兄ちゃんの頼みに、二つ返事でオーケーしたメイヤの頬が真っ赤で可愛らしかった。

次にウエイトレスの彼女が現れた時、兄ちゃんはメイヤを彼女だとして紹介した。その時の彼女の表情は凄まじいものだった。メイヤを視線で刺し殺すんじゃないかと思えるような鋭い目を向け、ふんつと鼻息荒く姿を消した。それから、私たちのテーブルには違うウエイトレスが給仕をしてくれることとなった。

「ありがとう、メイヤ。助かった」

優しい笑顔とはにかんだ笑顔を合わせる二人を見て、私はほくそ笑むのであった。

第41話

オープンカフェを出た私たちは、別行動することになった。兄ちゃんとメイヤが私たちに気を利かせてくれたことだった。

別の方向に歩き出す二人の背を見てにんまりとする私を、ジェラルが温かい眼差しで包んでくれていた。

「あかり。行きたいところがあるんだ。いいかな？」

「うん。いいよ」

ジェラルが自分から何かをしたいというのは珍しいことだ。まだ幼い姿の頃は我が儘も言ってくれたものだけれど、大人になったジェラルが我が儘を言うことはない。

だから、私は嬉しかったのだ。嬉しくてつい抱き付いてしまうほどに。

私の行動に驚きつつもしっかりと体を支えるジェラル。本当に幼いジェラルではもうないのだ。といっても、魔力が弱まれば少年の姿に戻ってしまうのだけれど。

「どこに行くの？」

「着いてからのお楽しみ。いいから着いてきて」

ジェラルの手を引かれ、商店の並ぶ通りをずんずんと越えていく。興味のあるお店はどんどんと遠ざかっていく。

一体どこへ向かおうとしているんだろう。

「あかり。疲れた？ おぶろうか？」

「えっ、いいいい。全然疲れてないからっ」

まだまだ人通りは激しい町中、そんな目立つことはしたくない。そうでなくても注目を集めてしまっているのだから。

「じゃあ、疲れたら遠慮なく言って」

「うん、ありがとう」

やがてその通りに、人は見えなくなり、店の代わりに家々が建ち並ぶようになっていた。大分遠くまで来てしまったようだ。

流石に疲れてきて、息も乱れてきた。それに気付いたジェラルルにひょいと抱き上げられた。

「ジェラっ。重いでしょ」

「あかりは軽いよ」

降ろそうなどと考えてもいないのだろう。幼い子供を抱くようにされ、私は恥ずかしさに耐えた。人影が見えないことが、せめてもの救いだろうか。

「ジェラは疲れないの？」

「俺は大丈夫。鍛えてるから」

いつもとは違う上から見下ろすジェラルルの表情が愛おしくて、知らず体が動いた。

ジェラルルの丁度こめかみのあたりに唇を落とした。ジェラルルは、びくりと足を止めた。驚いた表情を浮かべて見上げ、その次の瞬間には破顔した。普段見られない美しい笑顔を間近に感じ心が震えた。

そして、腰をまるめてジェラルルの唇にキスをした。

「あかりって人前だからっていつも恥ずかしがるのに、たまに大胆だね？　ここで俺が理性を失ったらどうするのかな？」

「だってつい……。ジェラが私の嫌がることはしないって分かっているし」

「ズルいなあかりは。そう言われたら俺は手出しできない」

私は、ジェラルルの頭を抱えるように抱いた。

「あかり？」

「好き」

突然で驚いただろう。現にジェラルルの纏う空気がぴしりと止まったのだから。

「へへっ。なんか無性に言いたくなった」

「あかりは俺を殺す気？」

「そんなつもりないよ」

「心臓が止まるかと思った」

その言葉は大袈裟ではないのだろう。だって、私が好きと言った瞬間にジェラルルはグツと息を詰まらせていたのだから。

「ごめんね？」

「謝る必要はない。心臓が止まったとしても聞きたい言葉だよ」

「そう？」

「そうだよ」

ジェラルルは再び歩みを進めた。

ジェラルルに運ばれているお陰で、町の景色をゆっくりと見るこ
とが出来るようになった。

先ほどの商店街を抜けて、今は民家が並ぶ地域。日本で言うところの閑静な住宅街といったところだろう。

不思議なくらいに人影はない。その家々からも人の気配がしないのだ。

「ここって本当に人が住んでるの？」

「住んでるよ。昼日中は皆商店街で働いているからね」

「そっか」

そういえば殆どの店で子供たちがせつせと働いていた。

「学校はないの？」

「学校に入れるのは身分の高い貴族の子息だけなんだ」

日本では、子供が学校に通うことが義務付けられている。それが、少々鬱陶しいと思っていたものだが、所変わればそれさえも贅沢な悩みであったのだと突きつけられる。

「じゃあ、この辺に住んでる子は皆何も学べないの？」

「うん、そういうことになるかな」

身分の高い貴族と平民の間にある貧富を失くすのは難しいのかもしれない。共存が難しいのなら、平民の間に学校を作ってみたらどうだろうか。貧しくてお金が払えないのなら、無料にすればいい。それだけの蓄えが王にはあるだろう。店の手伝いをしなければなら
ないのなら、学校を三部制にしてどの時間帯に来てもいいようにすればいい。食事屋ならば昼間の忙しい時間を除いた時間帯に学校に

行くという風に、それぞれに忙しい時間帯は違っだろう。比較的余裕がある時間を狙って学習に励めばいい。

私がそんな話をする、ジェラルルは王に提案してみること約束してくれた。

「さあ、あかり。着いたよ」

ジェラルルが連れて来たのは、開け放たれた草原。イヤ、それは広大な墓所だった。十字に形どられた石碑が立ち並んでいる。

「ジェラ、ここって」

「うん。俺の父の墓がここにあるらしいんだ」

その口ぶりからジェラルルがここを訪れるのが初めてであったことが窺える。これまでジェラルルの口から実の父親について語られることはなかった。

ジェラルルが今、どんな風に感じているのか、墓所を見渡す横顔からは察しがつかなかった。

私はジェラルルの腕から降りると、石碑に刻まれている名前を確認していく。

「ジェラのお父さんって何て名前だったの？」

「ジェードという名前しか分からない」

ジェードという名前が一つだけならばいいが、違う家名で何人もいるとどの墓石なのか分からなく可能性があった。

「探してみよう」

「ありがとう、あかり」

なんの心境の変化があつてここを訪れようとしたのか分からないが、ジェラルルがジェードさんに会いたいというのなら、会わせてあげたい。

その想いが形になったのかは分からない。私としても不可思議な現象だと思う。

声を聞いた気がするのだ。ジェラルルの名を愛しそうに呼ぶ声が。その声のする方へ導かれるままに歩を進めた。

私の不可思議な行動にジェラルルも着いてくる。

そして、私の足が止まった目の前に立っていたのは、ジエードという名が刻まれた石碑だった。

ジェラルルのお父さんが眠っているのはここであるのに間違いないと思った。

「どうしよう、ジエラ。お花も何も用意してなかったよ」

「ああ、俺もすっかり忘れていた。どこか咲いてる花を摘みに行こう」

墓所内に咲いている野花を摘み、墓前に手向けた。

「はじめまして、父上。あなたの息子のジェラルルです。あなたにとって俺は憎むべき存在だったでしょうか。ここに顔を見せた俺に早く帰れと思っっているでしょうか。でも、俺はあなたに一度でいいから会いたかった」

「ジエラ、ジエードさん。そこに座ってるの。私には見えるんだけど、ジエラには見えない？」

ジェラルルは食い入るように私の指さした先を眺めたが、残念そうに首を横に振った。

「ジエードさん、笑顔なんだ。ジエラを見てとっても嬉しそう。ずっとジエラの名前を呼んでるんだよ」

「父上。あなたも私と会いたかったのだと思ってもいいのでしょうか？」

『私は父親として、お前を守ることができなかった。私がお前を連れて逃げたら、二人とも殺されることになった。それを避けるために私はお前を迎えに行くことができなかった。許しておくれ、ジェラルル。愛しい私の息子』

その声は私だけでなく、ジェラルルにも届いたようだ。

涙を溜めて声に聞き入るジェラルルを私はただひたすら見守っていた。

第42話

王城に戻ると既に兄ちゃんとメイヤは戻って来ていた。

エロイが私たちを発見して、俺だけのけ者にした、と言って拗ねていたので、頭をモシヤモシヤと撫でてみた。一時黙りはしたものの、逆上したように手を振り払われてしまった。

部屋に戻り、兄ちゃんにどこへ行っていたのか聞かれたが、ぶらぶらしていたのだと言葉を濁した。

ジェラルルのお父さんの墓参りをしていたのだと、この場で言うべきではないと思ったからだ。

帰る道すがらジェラルルにお父さんのことをどう思うかと聞いてみた。

「どうもこうも会ったことがないんだ。父にしてみれば王妃に騙されたようなものだし、その血を繋ぐものとして恨んでいたんじゃないかと思ってたけど、あの声を聞いて、嬉しかったよ。自分は誰にも愛されずに育ったと思っていたから。でも、違っただって」

「うん。ジェードさんはジェラのこと、ずっと気に掛けてくれてたんだね、死んでも尚」

あの声は最初は霊現象なんじゃないかと思ったものだが、実際にはあれはジェードさんが最後にかけた魔法なのだと知った。ジェラルルがいつか来てくれると信じて施した魔法なのだと。

「ずっと来るのが恐かったんだ。恨まれてると思っていたから。でも、あかりと一緒にならば勇気が持てると思えた。出来ることならあかりを紹介したいと思った。来れて良かった。ありがとう、あかり」

「私はなんにもしてないよ。ただ、ジェラの傍にいただけ」

「傍にいてくれるだけで、俺の力になるんだ」

ジェラルルの感謝の気持ち がむず痒かった。私は何もしていないのに、感謝されるのはどうにも受け入れがたい。

「そう思つて貰えて光栄です」

照れくさかったのがバレたのか、けたけたとジェラルルに笑われた。

そのジェラルルの笑顔がすっきりしたもので、私はホツとした。また一つ、ジェラルルは乗り越えたのだ。

「兄ちゃんは、メイヤとどうだったの？」

兄ちゃんの耳元にこつそりと耳打ちした。そういう類のからかいをさらりと回避するのが得意な兄ちゃんが赤面している。

「ほほお。兄ちゃんはここに残ることを希望しているのだね？」

私のにやけた目線をふいと避け、小さく頷いた。

「良かったね、兄ちゃん。メイヤなら私も賛成だよ」

兄ちゃんは鼻の頭をぼりぼりと掻いている。それにしても、別行動中に一体何があったんだろう。まだ四人でいた時には、こんな態度はしていなかったはず。メイヤが正面切つて想いを告げたのだろうか。

なんにしろ、メイヤから聞き出すのがいいだろう。

兄ちゃんが私の尋問から逃れるようにすすと離れていった。

よく知っていると思つていた兄ちゃんにこんな可愛い一面があったとは。

「ジェラっ。兄ちゃんが」

「上手くいったみたいで良かったね」

「うん」

私と兄ちゃんの会話を見ていたジェラルルが、私の言葉を先回りしてそう言った。

「なんか全てが上手くいつてて怖い」

とはいっても、全てが終わったわけではない。

ジェラルルはまだ完全に魔法が解けたわけではないし、王妃とジェラルルの関係に変化もない。

全てが全て上手くいく道理はないのだが、ジェラルルの重荷を少

しでも降ろしてあげたかった。

ノブに手をかけて少しばかり緊張した。暗い記憶が私を捕えたためだ。そう同じことがあるわけではないと、自分を鼓舞しノブを回して扉を開けた。そこに誰もいないことに、ホッと胸を撫で下ろした。扉を開けて、リオの姿が私の前に立ちはだかったのは、私にとつてちょっとした恐怖であった。日中、みんなといるときは感じないが、ふと夜一人になると脳裏をよぎり体が震える。

キヨロキヨロと辺りを見渡し、誰もいないのを窺ってから、部屋の外に出た。

廊下に等間隔に設けられている灯りを頼りに歩を進めた。といっても、私が向かう先は目をつぶっていても辿り着く先だ。

こくりと喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

すうっと大きく息を吸い、ゆっくりと息を吐いてから扉を三度叩いた。

前回は事前に部屋を訪ねると宣告していたが、今回はアポなしの訪問だ。

ノックをしてから、返事がないところを見ると、もう既に寝てしまったのだろう。

私は恐る恐る扉を開け、部屋の中へと忍び込んだ。ソファにもテーブルにも姿が見えないところを見ると、やはりもう寝ているのだ。寝ているのが分かっているのだから、部屋に戻ればいいのだが、なぜか今、顔を無性に見たかった。

寝室に足を踏み入れると、すぐに規則正しい寝息が耳に入ってきた。

歩み寄って枕元にしゃがみこんだ。

私は気持ち良く寝ているジェラルルの頬に手をあてた。少し腰を上げ、頬に唇を落とした。その安心しきった寝顔を見て、自然と笑みが零れた。

ジェラルルの寝顔を見て満足した私は腰をあげて、立ち去ろうと

したが、それは出来なかった。

後ろ手を捕らえられ、振り向くと、眠そうな瞳をこちらに向けていた。

「帰っちゃうの？ あかり」

「気持ち良さそうに寝ていたから。起こしちゃった？」

「良かった。あかりがいつっちゃう前に目が覚めて。まだ行かないでくれるでしょ？」

「居てもいいの？」

「居てほしいんだよ」

まだ眠そうなトロンとした瞳がなんだか可愛らしく映った。

子供の姿の頃に、行かないでと眠そうな目を擦りながら服を掴んでいた姿を思い出させた。

「あかり。入る？」

掛け布団を捲り、私を誘い込んだ。

ジェラルルは半ば寝呆けて、半ば冗談で言ったのだらう。だって私が素直にベッドに潜り込むのを目を瞞っていたのだから。

私はジェラルルに体を寄せた。ジェラルルは既に目を覚ましたことだらう。

「ジェラ？ やっぱり入っちゃダメだった？」

「イヤ、本当に入ってくるとは思わなくてびっくりした。あかり、この時間に男の寝ているベッドに入って、体を寄せたらどんなことになるか分かってる？」

「分かってるよ」

その心積もりでここに来たのだから。もう、大分前から私の気持ちの準備は出来ていた。

「ずっと我慢してたんだ。もう、止めてあげられないよ？」

「ジェラが相手なら大丈夫だよ。あのね、私初めてなんだ。キスの経験はあったけど、それ以上はまだなの。……嫌いになった？」

「なぜ？ あかりの初めてを貰えるなんて最高だ。贅沢を言えば、初めてのキスも俺が欲しかった。あかりの初めてを奪った奴に心底

嫉妬するよ」

ジェラルルの声が耳元で聞こえる。たったそれだけで身震いした。
「あかりの全部を貰うね？」

「うん」

「大切に扱う……ように努力する」

「大切にしてくれないの？」

「ごめん。でも、どれだけ理性が持つか自分でも分からないんだ」

ジェラルルの声が僅かに震えている。ジェラルルも緊張している
んだろうか。

「いいよ。ジェラの好きにして」

「それは反則だよ」

そう言って私の唇を塞いだ。触れるだけのキスから、深いキスへと私を翻弄していった。

怖さは少しも感じなかった。怖いくらいに心臓が鳴っていたが、不安よりも幸せが勝っていた。

「……ジェラ……」

第43話

朝の光が私を見ているような落ち着かない気持ちで目を覚ますと、見ていたのは朝日ではなくてジェラルルだった。

「ジェラ……」

「おはよう、あかり」

清々しすぎるほどの笑顔からは、どこかしら強い何かを感じた。

「おはよう。ジェラ、魔力が戻った？」

漲るパワーと言っべきか、ジェラルルはただ近くにいるだけで、何かを感じる。それは、昨日まではなかったものだ。

これが元々ジェラルルが持っていた魔力なのだろうか。

「うん、戻ったよ。もう、子供に戻ることはない」

「良かったね、ジェラ」

「嬉しくない？」

私が喜びだけを感じているわけじゃないことに気付いていたらしい。

「嬉しいよ。けど、小さなジェラともう少し一緒にもいたかったな
って」

もつともつと可愛いジェラルルと一緒にいたかった。もつともつと可愛いジェラルルを感じたかった。むずかるジェラルルを、甘えてくるジェラルルを、拗ねるジェラルルを、太陽のように無邪気に微笑むジェラルルを感じたかった。

「なんか変だけど、自分に嫉妬した。今の俺じゃダメ？」

「ダメとかじゃないよ。ジェラは大好きなもの。何ていうか、多分私、子供が好きなんだと思う。自分でも知らなかったんだけど、ジェラのお世話してて気付いた」

「そうなんだ、それなら早く言ってくれば良かったのに。じゃあ、これから俺頑張るから」

そう言つと、私の上に乗掛かってくる。

「頑張るって何を？」

「もちろん、子作りだよ」

にっこりと微笑むジェラルルは真剣そのもので、冗談ではないことが窺える。

「ちよちよちよちよつと待って、ジェラっ。子供は欲しいけど、もう少しジェラと二人きりの時間もほしいなって。だから、そんなに急がなくても……。ね？」

ジェラルルは動きを止めて、私の瞳を探るように覗き込んだ。

「二人きりの時間？」

こくこくと頷く私は、必死に見えるだろう。

「それもそうだね」

分かってくれたかとホッとしたのも束の間。

「子作りはしない。けど、今の欲望は、もう止められない。ごめん」
微塵も申し訳なさそうに思えない笑顔を浮かべるジェラルルに、
文句の一つも言い募りたいところだったが、見越したジェラルルに
性急に唇を塞がれた。

私が目を覚ました時、隣にはジェラルルの姿はなかった。そのことに酷く傷付いている自分に苦笑する。

一体どれだけ眠りこけていたんだろうか。体を起こし、寝室にある小さめの窓から外を眺めれば、太陽は大分高い位置に来ていた。恐らく昼近い時間にはなっているだろう。

「お昼ご飯……」

ジェラルルが大人の姿になった後も、私が食事を用意していた。ジェラルルや兄ちゃんがそれを望んだからなのだ。

もう食事の用意に取り掛からなければならぬ時間であることは分かっていた。が、体が思うように動いてくれないのだ。

一人苦闘していると、ジェラルルが颯爽と姿を現した。

あんまりに快活なジェラルルを見ると、無性に憎らしさが込み上げてきて、遠慮なく睨み付けた。

「あ、あかり？」

「……体が痛いっ」

慌てるジェラルルに短く、鋭い声で言い放った。

「ごめん、あかり。今日の昼食はノアンばあさんに頼んで来たからあかりは、ゆつくり休んでいてくれていいんだ。すぐにメイヤを呼ぶよ」

「ジェラ」

子供がだつこをせがむように両手を開いて見せた。ジェラルルは私の望みどおり、その胸に納めてくれた。

「怒ってないけど、少しは私の体のことも考えて欲しいのよね？」

「以後気を付けます」

「宜しい。ジェラはノアンさんのことノアンばあさんって呼んでるの？ 怒られない？」

ノアンさんの歳は聞いたことがないけれど、他者がその話題を持ち出すと、鋭い目でいなすのを見ると、大分お年を召しているのだと窺える。が、調理場で快活に動き回るノアンさんの姿を見ていると、まだまだ若いような気がしてしまうのだ。

「うん、頭を叩かれたよ。二度も」

「二度も？」

「ばあさんって言ったら叩かれて、それから、さっさと挨拶に来い薄情者ってまた叩かれた」

頭を撫でて上げると、まるで猫のように目を細めた。

「ジェラもノアンさんが乳母だったんだ？」

「そうだよ」

「じゃあ、エロイとディアナも？」

「あの二人は違う人。もう子育てには飽きたってノアンばあさんが断ったんだ。元々ノアンばあさんは料理人だったから、調理場が恋しくなったんだと思うよ」

なるほど、ノアンさんは元々料理人だったんだ。だから、毎日嬉しそくに鍋をふるっているんだ。

「俺、会ってみようと思うんだ。あの人に」

そう口火を切ったのは、ノアンさんの料理に舌鼓を打っているときだった。

唐突な発言だったが、私には誰のことを言っているのか瞬時に理解できた。

「いいと思うよ？ でも、どうしてそうしようと思ったの？」

「力がさ、漲ってるんだ。今なら、怖いものはない。あの人に何を言われてもいいかなって思えるんだ。このまま曖昧な関係は良くないと思うしね。どうなるか分からないけど、腹割って話し合ってみるよ」

「そっか。王妃も以前とは少しずつ変わって来てると思うから、今ならちゃんと話せるかもね。それで、王妃とはいっつ会うの？」

前向きに自分のことを考えられるようになったのはいいことだと思う。ただ、王妃にジェラルが傷つけられないかが心配だ。確かに王妃は目に見えて変わったのだろう。けれど、決して傷つけないとは言いきれないのだ。

「今日だよ」

「えっ、今日？ 急すぎやしない？」

思い立ったが吉日なんて日本のことわざにあったりするものだけれど、あまりに早すぎやしないか。

「決心が鈍るから」

ほんの少しだけかいま見えたジェラルの弱音を私は笑顔で受け止めた。

私としては、王妃の方からジェラルに歩み寄って欲しかった。きつと今の彼女なら歩み寄ることも可能であると思っていた。だが、ジェラルがそこまで決心しているのなら、止めることは出来ない。いつぱいの愛をもって、送り出してあげるべきなのだ。

「大丈夫だよ、ジェラ。ジェラなら大丈夫。私が惚れた男なんだから」

につこりと微笑んで見せると、ハの字に下がっていた眉毛が瞬時に上がり、大きな笑みを浮かべた。

「あかり。俺、頑張るよ。だけど、その席にあかりも同席して欲しいんだ。隣りに座っているだけでいい。俺と王妃の一部始終を見守っていて欲しいんだ」

「私がいて邪魔にならない？」

「励みにこそなれ、邪魔になんかならないよ」

「じゃあ、いいよ」

ジェラルルがフツと息を吐いた。

散々苦しめられた母親に改めて会うのは、やはり気の張ることなのだろう。前に二人で会った時には、完全にジェラルルを無視していた。再び同じ態度を取られたらと、気弱にもなるう。

私が隣りにいて、少しでも気がまぎれるならば、いくらでも参加しよう。きちんとこの目で二人の今後の始まりの時を刻みこもう。

王妃との面会は丁度おやつ時だということなので、私は漸く自由に動き出せるようになった体でお菓子を作り、持っていくことにした。

ジェラルルが子供の姿の頃も今も大好きなマドレーヌを持参して、王妃の自室へと向かう。

隣りを歩くジェラルルの表情が普段よりも固い。そつと手をとった。

「ありがとう、あかり」

時として人の温もりは緊張を解すものだ。私の手から感じる熱が、ジェラルルの緊張を解してくれることを願う。

二人は、王妃の自室の前に立った。

第44話

一度は訪れたことのあるその部屋を、私は初めて訪れた場所のように感じたのは、前回の訪問であまりに余裕がなかったからだろう。二人で座るには大きすぎるソファに促され腰を下ろすと、その正面にあるこれまた大きすぎる一人掛けソファに王妃は腰掛けた。

王妃付きの侍女は、茶を出すスピードで部屋を辞した。私が土産として持って来たマドレーヌがテーブルの上に出されている。

重苦しい沈黙が場を包み、茶で喉を潤すことすら憚れる。

ジェラルムも王妃も口を開こうとしない。何をどう切り出せばいいのか考えあぐねているのだろう。

今日は傍観者と決めてきた私が、口を開くのもどうかと思われるが、誰かが何かを口に出さなければ何も始まらない気がした。

「え」と？ その後、王さまとは上手くいっていますか？」

話を振られて助かったと言いたげに、口が綻んだ。

「その話をされるのはあまり好きではないけれど……、滞りなく上手くいっているわ。あなたに教えて貰うまで本当に気付きもしなかった。今思えばとても簡単なことだったというのにね。……ジェラルム。本当なら私があなたに会いに行くべきだった。もっと早くに来てくれて嬉しいわ」

私に向けた言葉はとても自然であるのに、ジェラルムへと向けられた言葉は驚くほどにぎこちない。王妃もまた緊張していることが窺える。

「いえ、俺はきちんと話をしたかったから」

ジェラルムの方もぎこちない。まるで面接官と対峙しているようにも見えなくもない。

「謝りたかったの。あなたを陥れようと躍起になって、ひどい仕打ちをして傷付けてしまったこと。本当にごめんなさい」

別人のように頭まで下げる王妃を、ジェラルムは茫然と見ていた。

私自身もここまであつさり王妃が頭を下げるとは思わなかったの
で、面食らっていた。そして、王を見直したのもこの時だった。案
外やるじゃん。

「俺はあかりが現われなければあなたを心底恨んでいただろうと思
う。愛情を与えられず、駒として役立たないと分かると魔力を奪わ
れ、部屋から外に出ることも出来ない毎日。あの頃、あなただけじ
やなく神さえも憎いと思い始めていた。あかりが闇に吞まれかけて
いた俺に灯りを照らしてくれた。もう、あなたを恨まない。憎めな
い。もう、醜い争いは終わりました。それでいい」

初めて会った時のジェラルルの姿を思い出していた。真つ暗闇の
中、お化けと見間違えたほどに生気のない瞳をしていた。希望が窺
えず、ただひたすら時が過ぎるのを待っているように見えた。生き
ながらにして、死んでいるようだった。その幼い子供の姿はもうな
い。

先ほどまでガチガチに緊張していたのが嘘のように、しっかりと
した眼差しを王妃にぶつけ、強い声音で語った。

成長した我が子を見守るような気持ちでもあり、大好きな人の力
強い姿に惚れ直したような気持ちでもあり、私の心中は複雑なもの
だった。

私は贅沢者なのかもしれない。普通、大好きな人の幼い頃の姿を
拝める人はいない。アルバムの中の愛しい人の幼い姿に想い出話を
聞きながら、想いを馳せるものなのだ。私は幼いジェラルルを見て
触って、語らって、お世話をした。短い期間ではあっても、それは
とても贅沢なものだったのだ。

王妃は立ち上がると、ジェラルルの前まで歩み寄り、戸惑いがち
に抱きよせた。

幼い頃に何度も体験した母の抱擁。だが、ジェラルルにとって母
の抱擁は、これが初めてのことだった。

「ごめんなさい。……ありがとう、ジェラルル。愚かな母を許して
ちょうだい。これからはいい母であるように努めるわ」

「俺のことはいいよ。今更なんだか照れ臭いし。俺よりもいつか産まれてくる俺とあかりの子供に愛を与えてよ」

「あらっ。もうお腹の中に赤ちゃんがっ？」

「いえいえいえいえ、まだいせんからっ」

私に矛先を向け抱き付いて来ようとする王妃を寸で止めた。

「いつかってことだよ。俺とあかりの可愛い赤ちゃんは、みんなに愛を貰って幸せになつて欲しい」

ジェラルルが言った。

私は首を傾げた。ジェラルルは、私と兄ちゃんを連れて日本にっこうとしていたんじゃないかっただろうか。この発言では、赤ちゃんが産まれてもここに留まることを考えているように聞こえる。それとも、ジェラルルの魔力をもってすれば、日本とこの行き来も可能だということだろうか。

「そう。楽しみねえ。二人の子ならさぞや可愛いでしょうに」

残念そうに私のお腹を名残惜しげに見やる王妃に、苦笑を浮かべることしか出来なかった。

やっと全てが丸く治まった。

ジェラルルの心配ごとはすべて払拭されたと考えていいだろう。あと残されているのは、日本に帰るということだけだ。

だが、ジェラルルは何も言わない。そのことについて何も触れない。私からその話を振ることもなんだか出来なかった。話を振るところですぐに日本に発とうと言われるのが怖いからだ。

私は、この世界で一生を遂げたいと思っていた。

「なあ、お前ら向こうに行くのか？」

一人でぶらりと散歩していると、いつの間に来たのかエロイが隣りを歩いていた。

「うん、多分ね。いつかは分からないけど」

「行かなきゃいいじゃねえか。お前そんなに乗り気じゃないみたいだし」

「私はジェラと一緒にいたい。ジェラと一緒にならどこでも幸せ」

これは本当だ。この世界でなくても、ジェラと一緒になら幸せになれるだろう。それでも、ここにいたいと願うのは、ジェラも幸せになるにはここにすることが望ましいと思うからだ。そして、この人たちが私は大好きだ。ここでなら大勢の家族が出来る。子供が産まれても寂しい想いをさせることはないだろう。

「お前はいつも、俺じゃない誰かのことばかり考えてんだな」

「えっ、そりゃそうだよ。だって恋人だもん。何？ 私が羨ましいの？ だったらあんたも好きな人づくりなさい。あれ、好きな人いるって言ってたっけ？」

「お前って結構残酷だよな。俺の気持ちなんか少しも気付いてないんだな。俺はなっ、お前が好きなんだよっ」

「へ？」

大声で投げつけられた言葉は、私の予想の範疇を超えていた。

いつも私とジェラルの周りをうるちよろしていたのは、暇だからじゃなくて、私を好きだったからだと言いたいのか？

「ちよつと待ってよ。そんなそぶり一度もされた覚えはないし？

そもそもいつから？」

「一目惚れだっ、悪いかよっ」

「何よそれ。だってエロイの態度っていつも酷かった。もしかして小学生が好きな女の子にちよっかい出すあれなの？」

「お前がなに言ってるか、意味分かんないけど、とにかく俺はお前が好きなんだよっ」

「そっか、うん、ありがとう。気持ちは凄く嬉しかったよ。エロイがいたお陰で元気になれることもあったし、その赤い髪を撫でると癒された。私にとってエロイは弟みたいなものだった。私のこの気持ちはね、全てジェラルのものなんだ」

「知ってるに決まってるだろう、そんなこと。どれだけお前を見て来たと思ってるんだ。ごめん、なんていうなよ。俺が惨めになるだけだ」

顔を背けてそう言ったエロイに、私はなんて言えばいいんだろうか。

「俺の婚約者口説かないでよ、エロイ」

突然後ろから首に腕を回されパニックに落ちたが、すぐに頭上からジェラルルの声が聞こえて、暴れるのを止めた。

「それから、俺達はここに残るから心配しないでいいよ」

最終話

「俺達ここに残るから心配しなくていいよ」

その言葉を十分に理解してからジェラルルを振り返った。理解するの到大分時間がかかったがその間、誰も口を開かなかった。

「え？」

「日本で暮らすのは止めようと思うんだ。あかりと俺が一番幸せになれるのはどちらかと考えたんだよ。あかりはどう思う？」

優しい声で私に問い掛ける。決してそれが決定事項ではなく、これから二人が話し合うための一つの意見に過ぎないというように。

これまで口を開かなかったのは、ジェラルルなりに幸せになる選択肢を探してくれていたからなのだ。

「うん。それがいいと思う。ジェラはこの世界でももう幸せになれるよね？」

「大丈夫だよ。もう何かから逃げなきゃならないものも、隠れなきゃならないものもない。ここで、一緒に大きな家族を作ろう？」

「うん。うん、そうしよう」

「年に一度、日本へ渡ってお墓参りに行こう。兄ちゃんとも色々相談したんだ。兄ちゃんもここに残るつもりだって。あかりが了承してくれるなら、式は兄ちゃんたちと合同で挙げないかって言うてくれてるよ」

知らなかった。ジェラルルは兄ちゃんとも話し合いを進めていたんだ。私たちのために。

「今言ったこと、全部賛成だよ。私に異論なんてないよっ」

エロイがそこにいることも忘れて、私はジェラルルに抱き付いた。「本当に残酷だな、お前は……」

という呟きは私の耳には入らなかった。

——五年後

「待つて、ジェイ。お外は暑いんだから帽子を被らなきゃダメなのよ」

「ぼつし、いやない。あつくなあからだいじぶ」(帽子いらない。暑くないから大丈夫)

「ダメダメ。日差し舐めると倒れちゃうんだから。ジェイは倒れてお薬や注射をされてもいいの?」

「くちゅり、ヤッ。ちゅちゃ、ヤッ」(薬、イヤっ。注射、イヤっ)

「じゃあ、かぶっていくわね?」

結局大人しく帽子を被らされた幼い長男、ジェイドにっこりと微笑むと、拗ねていた口がゆつくりと笑顔に変わった。

外が大好きで、きかんぼうのジェイドはもうすぐ二歳半になる。

ジェラルルが三歳だった頃を思い出すと、いかにジェラルルが聞き分けのいい子だったかを思い知らされる。

子育ては甘くないと日々思うのだが、それでも笑顔や寝顔を見ればその苦労もすぐに飛んでいってしまう。

「あかりを困らせたならダメだよ、ジェイ」

「こまらしてないっ」(困らせてないっ)

ジェラルルが背後から私を抱き締め、ジェイドを嗜める。

「ジェイは遊んでおいで。あかりは俺と遊ぼう?」

「ダメッ。あかりはぼくとあしょぶんだっ。じえあははなえて」(ダメっ。あかりは僕と遊ぶんだっ。ジェラは離れて)

よく繰り広げられる光景である。ジェラルルがわざと私に抱き付いて仲が良いところをアピールし、ジェイドがそれにヤキモチを焼く。

「もう、ジェラ。ジェイをいじめないで」

「だってあかりは俺のだよ? ジェイにだって渡さない」

本気で言っていることに呆れるしかない。

「私は物じゃないよ?」

子供のように拗ねるジェラルルに向き直り、小さなキスをした。

「でも、まあ、私はジェラのだよね。ジェラも私のでしょう?」

「もちろん」

「いちゃいちゃ」

再び口付けようと顔を寄せた時、下方からそんな言葉が耳に飛び込んできた。

「ジェイっ。誰にそんな言葉教わったのっ」

ジェイドは、キヤーと奇声をあげて走って行ってしまった。

おそらく兄ちゃんかエロイが余計なことを教えたんだろう。

「あとでとっちめてやる」

「あかり。続きしよう？」

こんなだけれど、普段はジェイドの面倒もよく見てくれるいいパパなのだ。あまりに私がジェイドとべったりしていると、邪魔に入るけど。

「ジェラ、仕事は？」

間近に迫ったジェラルルの瞳を覗き込みながら問い掛けた。

「急いで片してきたんだ。あかりにすぐに会いたかったから」

言っただけで唇を合わせた。ジェイドには決して見せられない、深く甘いキスだった。

「私も会いたかったよ」

「じゃあ、今日はあかりを独り占めしてもいい？」

「うん。兄ちゃんとエロイがジェイを見てくれるから」

ジェイドが産まれてからなかなか二人きりになる機会がなかった。ジェイドが寝た後少しだけ与えられる二人だけの時間。それだけでも十分幸せだけど、日中に一緒にいられることはそうないので嬉しいことだ。

胸が少女のように高鳴った。ジェラルルといると、いつでも恋をしていられた。きっと命が尽きるまでそれが止まることはないのだろう。

止まることのない恋、溢れる愛を私は今日もジェラルルと分かち合っていく。

「……りゃぶりゃぶ」（ラブラブ）

「あの二人はお前が産まれる前からああだよ。見なかったことにしてやりな？」

木陰から兄ちゃんとジェイドがあの甘やかなキスを覗いていたことに、私が気付くはずもなかった。

~~~~~END~~~~~

## 最終話（後書き）

ここまで読んで頂いて、有難うございます。

どうにかこうにか最終話まで持ち込むことが出来まして、ホツとしているところです。

次回作の話になりますが、この作品を書き終えた後、大体15話くらいまで書き進めていたのですが、どうしても内容が気に入らず全て削除してしまいました。新しく全く別の内容で書き始めてはいるのですが、まだ投稿できるほどにはなっていないのです。ですから、次回作は1週間〜2週間ほど休ませて頂いた後に投稿したいと思います。イヤ、もうここで決めてしまいますね。10月17日から開始したいと思います。

次回作は『無邪気な恋心』。

ファンタジー要素を織り込んだ恋愛小説です。

では、ここまでお付き合い頂きありがとうございました。また、次回作でお会いできれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1945v/>

---

私の知らない世界

2011年10月3日13時11分発行